秘伝の声 上

池波正太郎



新潮文庫

新潮文庫

秘伝の声

上巻

池波正太郎著



新潮社

新潮文庫

秘伝の声

上巻

池波正太郎著



新潮社版

4580

目次

盗みの夜……七
十年後……三
秘伝の書……三九
岩蔵の道……七〇
剣客・大久保八郎……九五
再会……一六四
水野道場にて……一八三
闇の中の声……二一〇

秘伝の声 上巻

盗みの夜

押し込んで来た盗賊は、十名を越えていたろう。

この年の夏は、例年にない猛暑の明け暮れがつづき、

「こうも、ひどい暑さがつづいては、病人がたまらない」

「先ごろは私なぞ、三日に一度は知り合いの通夜やら葬式やらで、すっかり、まいってしまいましたよ」

などという声も聞かれたが、その暑い暑い夏も、ようやくに去った。

秋の嵐（台風）が、二度ほど江戸の町を通りすぎると、空は高く澄み、吹きわたる風は冷気をふくみ、

「ああ……つい先ごろまでの、あの暑さが夢のようにおもわれる」

「何しろ、あの暑さが夜になっても消えてくれないのだから、たまったものではなかった」

と、人びとがいうような寝苦しい夜がつづいていたのだが、いまは雨戸の外の虫の声を聴

きながら、安らかに眠ることができる。
そうなると、寝不足の積み重なった夏の疲れが一度に出て、人びとは深い眠りに落ち、容易なことでは目がさめぬ。
盗賊どものねらいは、そこにあった。
彼らは、寝苦しい夏の夜の犯行は避ける。
暑さで、なかなかに寝つけぬ人びとの耳は、盗賊どものひそかな気配にも気づいてしまうからだ。
それゆえ、秋風が吹きはじめると、大小の盗賊どもが跳梁しはじめる。
人びとも、戸締りをきびしくし、じゅうぶんに気をつけてはいるのだが、それでもやられる。
この夜、武蔵国・豊多摩郡・角筈村の名主、本郷庄左衛門方へ押し入った盗賊どもは、大がかりな仕掛けで、三年ごしの計画をたてた上での犯行であった。
なぜというならば、三年前に、この名主の屋敷へ下女奉公にあがった初という女が、あきらかに手引きをしたからだ。
初は、三年の間、骨惜しみをすることなく実直にはたらきつづけ、
「口入れ屋から来た女にしては、めずらしい」
屋敷の人びとからも信用されていたし、少しも怪しいそぶりを見せなかったという。

こうした女を、盗賊仲間では、
「引き込み女」
と、よぶそうな。
引き込みをする者は女にかぎらぬ。男もいる。
お初は、当日の九ツ半（午前一時）ごろに、名主屋敷の裏門を内側から開け、一味の盗賊どもを、屋敷内へさそい入れたのである。
盗賊どもは、声もあげず、音もたてずに、引き込み女・お初にみちびかれて、母屋へ侵入した。
名主屋敷の敷地は宏大なもので、東面には表門と通用門と二つの門をかまえており、奉公人の中で妻子がある者が住み暮す茅ぶき屋根の家が合わせて四棟もあった。
盗賊どもは、これらの家には目もくれずに、母屋へ向ったのである。
彼らは、先ず、主人の本郷庄左衛門・りよの夫婦が眠っている寝間へ入った。
こうして、名主夫婦を人質にしておき、母屋に寝ている人びとをつぎつぎに寝間へあつめた。その中には、庄左衛門夫婦の子で、いずれは名主の名跡をつぐ庄吉郎夫婦もいる。
若くて屈強の下男三人は、下男部屋で殺害された。
六人の盗賊どもが、微風のように下男部屋へながれ込み、一人が鼻と口を押さえるのと同時に、別の一人が鋭利な短刀を心ノ臓へ突き込み、ただの一刺しで殺してしまった。ともか

くも、恐るべき手ぎわのよさで、しかも速い。

ひろい母屋の部屋の、どこにだれが寝ているかを、まるで自分の家の内のように心得ているのは、引き込み女が三年にわたり、本郷家の内情を、くわしく内通しておいたからであろう。

「金品は、あるだけのものを差しあげましょう。なれば、何とぞ、血をながさぬよう、お願いをいたす」

と、名主・本郷庄左衛門は、盗賊の首領に見える男へ低い声でいい、家族や奉公人に、

「さわぐな。決して、さわいではならぬ」

念を入れた。

盗賊どもが身につけているのは、揃いの筒袖の胴着と股引き、足袋で、両眼だけが見える頭巾も同じ灰色である。

彼らは、いずれも脇差を腰へ差し込み、中の数人が短刀を引き抜いていた。

母屋の外には、見張りの盗賊がいた。

盗賊の首領は、母屋へあつめられた人びとを見まわし、

「これで、すべてじゃな?」

配下に尋ねた。

「さようで」

「よし」

だが、盗賊どもの鋭い目をのがれた者が一人だけいた。

それと気づかぬ首領は脇差を引き抜き、名主へ向って、

「立て。金蔵へ案内しろ」

落ちつきはらった声をかけた。

現代でも〔角筈〕の地名は、東京都・新宿区に残っているけれども、二百数十年前の当時は、まったくの田園地帯であって、高層ビルが林立する現代新宿の景観からは当時をしのぶ何物も得られぬといってよい。

木立と竹籔にかこまれた名主屋敷の中の異変を、気づくものとてなかった。

ところで……。

母屋の内の家族と奉公人の人数をあらため、これを盗賊の首領へ告げたのは、申すまでもなく引き込み女の初である。

その初が、うっかりと見のがしてしまったのは、名主屋敷の人びとが、

「雪坊」とか、「雪丸」

とか、よんでいる十歳の男の子であった。

雪丸という名は、ほかならぬ名主の本郷庄左衛門がつけた。

雪丸は、両親の顔も知らぬ〔身なし子〕だ。

生まれて一年ほどしたとき、雪丸は、角筈からも近い成子坂に捨てられているのを近くの人が拾いあげた。

これを聞いた庄左衛門が、

「それならば、わしのところで育ててやりましょう」

と、いい、拾われた日が雪の朝だったので〔雪丸〕と名づけた。

雪丸は、自分の身の上をわきまえていた。人びとの口から、いつしか耳へ入ってきたのであろう。

（名主さまには、大恩がある）

子供ながらおもいきめていて、使い走りにも骨身を惜しまずにはたらく。

こうした子供が、屋敷の人びとに愛されるのは当然であって、名主屋敷の塀際に小さな家をもらって住む奉公人たちは、

「今夜は、わしがところへ泊るがいい」

「それなら、明日はうちへ来いよ」

などと、さそってくれるので、月のうちの半分は、奉公人の家へ泊る。

引き込み女も、それは、よくわきまえていた。

母屋で、雪丸が寝場所にしている台所の隅の板敷きの小部屋を、引き込み女が仲間の盗賊と共にあらためたとき、雪丸の姿はなく、蒲団もたたまれていたので、これはまた、奉公人

の家へ泊りに出かけたのだと、引き込み女はおもいこんでしまったようだ。

何にせよ、犯行は急がねばならぬ。

盗賊たちは、母屋の中に設けてある金蔵へ主人を引き立てて行った。

本郷庄左衛門は、このあたりでも知られた資産家である。

この夜、盗賊どもが名主屋敷から盗み出した金は、三千両におよんだという。当時、江戸の庶民の暮しは、一年間で十両もあればじゅうぶんであったことをおもえば、三千両という金高がどれほどのものか、およそ知れよう。

この金の中には、名主が諸方からあずかっていた金も入っている。

盗み出した金を、盗賊どもが分担して背負い、屋敷から引きあげて行った。押し入って来てから半刻（一時間）もたたぬうちにである。

屋敷の人びとは、すべて、金蔵の中へ押し込められ、両手両足を縛られた上、猿ぐつわまで噛まされた。

そして尚、二人の盗賊が四半刻ほど、これを見張っていたのだ。彼らのやりくちは周到をきわめていた。

彼らは、あらかじめ代々木村の雑木林の中に、荷車を一つ隠して置き、これへ盗金を積み込むと同時に、盗み装束を着替えて農民の姿となり、逃走することになっていた。後にわかったことだが、彼らは途中から、多摩川岸へ出て、舟で逃げる手配もしてあったそうな。

代々木村の雑木林の中へ入り、
「これでよし、よし」
と、首領が心地よげにうなずき、
「お初、三年の間、苦労をかけたのう」
共に引きあげて来た引き込み女へ声をかけた。
「お初さんの引き込みに狂いはねえ」
「いつもながら、あざやかなものだ」
などと、盗賊どもはくちぐちにいいながら、盗金を用意の箱へ詰め直し、手早く荷車へ積み込み、着替えにかかった。
そのときである。
盗賊のひとりが、急に、
「むうん……」
妙な、うなり声をあげたとおもったら、くずれるように倒れ伏した。
「どうした？」
「おい、これ……」
別のひとりが手にした提灯を差しつけた、その一瞬、提灯が闇の中へ落ちて、
「あっ……」

これもまた、のけぞるように倒れてしまったではないか。
「おい、気をつけろ」
「油断するな」
盗賊どもは、わけがわからぬままに、あわてて脇差を引き抜いた。
彼らのうちの二人ほどは、まだ提灯を手にしている。
そのあかりの中に、何やら灰色の人影のようなものが浮きあがって見えた、とおもう瞬間に、
「わあっ……」
またひとり、盗賊が倒れた。
つづいて、また一人、二人と倒れる。
盗賊どもの狼狽(ろうばい)ぶりは言語に絶した。
こうした場合、提灯のあかりがあったほうがよいものか、どうか……。
二つの提灯のあかりで、彼らに襲いかかった者の姿を見きわめ、切りかかろうとするのだが、何分にも雑木林の中のことだけに足場が悪い。
相手が何人いるのか、それもわからぬうちに、また一人、叫びをあげて倒れた。
その叫びは、ほとんど恐怖の声といってよかった。
相手は、魔鳥のように襲いかかって来る。

灰色の、その人影は樹間を風のように飛びぬけ、自由自在に盗賊どもを襲う。
また一人、倒れた。
こうなると、もう盗んだ金どころではない。
「逃げろ」
たまりかねて叫んだ首領の横合いから躍りかかる灰色の影へ、
「うぬ!!」
首領は脇差を叩きつけたが、いたずらに闇を切ったばかりだ。
そして、つぎの瞬間には、首領自身が脇差を落し、呻き声をあげて倒れた。
「に、逃げろ」
盗賊どもは、それぞれ必死となって雑木林から走り出て行った。
灰色の人影は、これを追おうともせず、
「岩蔵、岩蔵」
と、声を投げた。
「はい、ただいま」
こたえる声がして、間もなく彼方の闇の中で、龕燈に火がついた。龕燈は忍び提灯ともよばれ、銅製筒状のもので、奥の蠟燭に火をつけると、これが中で回転し、反射鏡と共に外部を照らすようになっている。

「雪丸、その龕燈で、こちらを照らすがよい」
と、灰色の人がいった。
「はい」
岩蔵とよばれた若者の背後から、男の子があらわれ、龕燈を受け取った。
灰色の人の姿が浮きあがった。
六十前後の老人である。
灰色の単衣の裾をからげ、右手に、ふとい木太刀をつかんでいる。白い総髪をたばねて、うしろへむすんだ姿は、それこそ物語の中に出て来る仙人のようであった。
ともかくも、この老人がひとりきりで木太刀をふるい、八人もの盗賊を撃ち、気絶せしめたことになる。
その中のひとりが、息を吹き返し、
「ぎゃあっ……」
魂切るような叫びをあげ、逃げ去って行ったが、老人はあえて追おうともしなかった。
この老人の名を、日影一念という。
日影一念が、角筈の地へ来て住みついたのは、十五年ほど前のことであった。
一念は、名主屋敷の西側の、小川と木立をへだてた場所に、剣術の道場をかまえている。
道場といっても、別に流儀をうたうわけでもないし、土地をはなれたら、知る人も少ない。

一念の門人の大半は、このあたりの農家の若者たちだ。一念は、若者たちに剣術を教えもするが、読み書きも教える。角筈の村へ来て、日影一念といえば、知らぬものはない。

十五年前に、一念が名主の本郷庄左衛門を訪ねて来て以来、庄左衛門は一念の面倒を親切に見て、道場を建ててやったほどだ。

「一念先生のようなお人は、この世に数少ない。まことに立派なお人じゃ」

と、本郷庄左衛門は、

「あのようなお人には、いつまでも、いつまでも角筈の村にいていただきたいものじゃ」

心の底から、そういっている。

この夜、盗賊が押し入ったことを、日影一念に知らせたのは、孤児の雪丸であった。

雪丸は、この夜、七日ぶりで、母屋の自分の寝部屋で眠った。そして、小用に目ざめ、奉公人専用の厠へ行くため、台所の土間から外へ出たとき、引き込み女の初が盗賊どもをさそい入れている姿を見た。

このとき、雪丸が寝部屋へ引き返し、自分の蒲団をたたんだのは無意識の行動とはいえ、大人もおよばぬことだ。それから雪丸は、すぐさま裏庭へ出て、小川をこえ、日影一念の道場へ危急を知らせに走ったのは、結果としてもっともよかった。

もしも、そのとき、雪丸が主人の寝間へ急を告げに走ったとしたら、異変は、もっと血なまぐさいものになっていたろう。三人の下男の殺害だけではすまなかったにちがいない。

さて、知らせを受けた日影一念は、内弟子の若者で十七歳になる白根岩蔵と雪丸を連れ、裏手から名主屋敷へ近づいて行った。白根岩蔵は、すぐに飛び込まぬ師の一念を不審におもった。

一念は、すぐに岩蔵の胸の内を看てとったらしく、

「いま、入って行っては、かえって屋敷の内の人びとが危害を受けよう」

そういって、尚も、盗賊どものうごきを外から監視しつづけた。

そして、大金を盗んだ盗賊どもが、代々木村の雑木林へ入ったとき、はじめて一念は行動を起したのである。

日影一念は、用意の細引き縄で、盗賊どもを木の幹へくくりつけておき、

「見張りは、わしがする。岩蔵と雪丸は荷車に積んだ金を早う名主屋敷へとどけよ。そして、すぐさま、こちらへ人数をさしむけてくれ」

と、いった。

岩蔵と雪丸が、取り返した盗金と共に屋敷へもどって来たのを見て、人びとはびっくりした。

金蔵に押し込められている人びとを見張っていた二人の盗賊は、すでに引きあげた後である。この二人は例の雑木林へは立ち寄らず、別の道を逃げたことが後になって判明する。

一念が捕えた盗賊は、首領をふくむ七名であった。

名主・本郷庄左衛門は、これを、江戸の火付盗賊改方へ引きわたした。

盗賊改方は、幕府が随時に設ける一種の特別警察で、町奉行所とは別に、自在の活動をする。

盗賊改方の、きびしい調べによって、この盗賊どもは、かねて盗賊改方が捜査中の大盗・鶴瀬の伊平次一味とわかった。

この事件によって、日影一念の名は江戸にもきこえたようだが、一念は以前と少しも変わったところがなく、土地の若者たちを教えみちびくことに倦むことを知らなかった。

盗賊どもの自白により、逃げた者の半分ほどは盗賊改方が捕えたが、逃げた者の中には引き込み女の初もまじっていたそうな。

本郷庄左衛門は、殺された三人の下男たちを手厚く葬ってやり、日影一念には、

「何なりとしてさしあげたい。何ぞ、のぞみのことがおありか？」

たずねると、一念は、笑ったままこたえなかったが、名主は何としても一念の見事なはたらきにむくいたかったので、引き下らなかった。

すると一念は、

「わしのしたことは当然のことゆえ、何も申しあげることはないが……それほどまでに申されるならば、ひとつ、お願いがござる」

「おお、何でござる？」

「あの、雪丸、な……」
「雪丸が、何ぞ？」
「わしの手もとで、剣術をおぼえたいと、かねがね申しております。もし、よろしければ手もとへ引き取ってみたいとおもうが、いかがでござろう」
「ははあ……」
「ごめいわくでござろうか？」
「いえ、それはかまいませぬ」
「こちらに御用のあるときは、いつにても帰します。それで承知を願えましょうか？」
「はい、はい。そのほかに、もっと何か、のぞみのことを……」
「ありませぬ」

十年後

それから、十年の歳月がすぎた。

すなわち、安永六年（西暦一七七七年）夏である。

あの事件後、捨て子の雪丸は、かねての希望を達し、日影一念の道場へ住み込み、師の一念の身のまわりを世話しながら、剣の修行にはげんでいる。

雪丸も、いまは、二十歳の若者になった。

日影一念は、雪丸を手もとに引き取ってから、「成子」の姓をあたえた。

成子の姓は、雪丸が成子坂に捨てられていたことによる。

その成子雪丸が、この夜、十二所権現の社にあらわれた。

この社は、同じ角筈村にあり、祭神は、紀州の熊野権現と同じだ。

物の本に、

「……応永十年、社を再興し、あらためて十二所の御神を勧請したてまつり、田園等若干を

附す」

とある。

十二所権現の社は、現代にも残っている。

林立する高層ビルを眼前にのぞむ新宿中央公園の片隅に〔熊野神社〕として残存しているが、約二百余年前の宏大な杜にかこまれた社の景観とはまったくちがう。

成子雪丸は権現社の境内へ入り、拝殿の横手から、深い木立の中へ入って行く。

月のない夜であったが、雪丸は幼少のころから、このあたりへは数えきれぬほど来ているし、まるで、我家の庭を歩むようなものだから、提灯もいらぬ。

雪丸の腰には脇差が一振、筒袖の単衣に短かい袴をつけ、総髪を後ろへまわして束ねた姿は、年齢より上に見える。

「雪さん……」

深い闇の中から、女の声がした。

「お、来ていたか」

「あい」

松の老樹の蔭から、若い女が出て来た。

現代なら〔少女〕といってもよいほどで、齢は十六歳。名はさとといって、名主屋敷に奉公をしている市蔵・もと夫婦の二女であった。さとも提灯を持っていない。

「おさと。遅れてすまなかった」
「お師匠さまのおかげんは？」
「今日は大分によい。先ほども、重湯をさしあげたら、半分ほど、お口にされた」
「よかった。それはよかったこと」
「おれも、うれしかった。何しろ、このところ、何もあがらなかったので、心配でならなかったのだ」
重く、たれこめている闇の中で、雪丸とさとは抱き合い、たがいに唇を吸い合った。
雪丸とさとは、幼なじみだ。
雪丸が名主屋敷にいたころからの仲よしで、さとの両親も、
「さとは大きゅうなったら、雪丸の嫁にしましょうか」
「それがよいな」
などと、語り合っていたほどだし、何も隠れて忍び逢う必要はないのだが、人の目があるところでは、抱き合ったり顔を寄せ合ったりすることもならぬ。
ゆえに、十日に一度ほどは権現社の杜へ来て、ひそかに逢うことにしているが、それも、いまは、おもうようにならなかった。
雪丸の師・日影一念が、この夏のはじめから重病にかかり、寝ついてしまったのだ。
むろんのことに、雪丸は付ききりで看病をしている。

一念は、決して医師に診せようとしない。
名主の本郷庄左衛門が医師をさしむけてよこしても、
「せっかくながら……」
ていねいに、断わってしまう。
「おさと。明日は道場へ来て、いろいろと手つだってくれ、たのむ」
「これからは、毎日でも行きましょう」
さとが道場へ来て、洗濯や炊事をしたり、雪丸が名主屋敷へあらわれ、むかしのように用事をすることは、めずらしくない。
日影一念は、雪丸に対し、あまりきびしいことをいわぬ。ときには、微笑して、
「今夜は、さとに会うてまいれ。市蔵の家へ泊って来てもよいぞ」
などと、いうこともある。
それは、三年も前からのことだ。
少女といっても、当時の十六歳は、子が生まれてもふしぎはない年齢であった。
さとの父親の市蔵が、この春ごろに道場へ来て、日影一念に、
「あの、剣術の修行をしていると、嫁をもらえぬものでござりましょうか？」
「なぜじゃ？」
「でも、先生は、ずっと、お独りで……」

「わしはわしじゃ。人は、みな、ちがう」
「ははあ……」
「お前は、雪丸とさとのことを申しているのではないか、どうじゃ？」
「はい。そのとおりでござります。あの二人は、小せえときからの仲よしで、親の目から見ても夫婦にしてやるのが、いちばんよいとおもいまして……」
「それがよいのう」
「えっ。そりゃ、ほんとうで……？」
「うむ。ほんとうに、そうおもう」
雪丸とさとが夫婦になることについては、名主の本郷庄左衛門も承知をしてくれて、
「なれど、もう二年ほど待ったほうがよい」
と、いった。
二年たてば、雪丸二十二歳。さとが十八歳になる。そうなれば心身ともに成長するわけだ。
このように、二人は公認の仲であり、だれもが、それを祝福している。
（そのときが来るまで、何としても、お師匠さまに生きていていただきたい）
成子雪丸は、切に願っている。
願っているが、その一方では、
（だが、それは、かなわぬことやも知れぬ）

そうおもわざるを得ない。
医薬を絶っている日影一念は、日に日に痩せおとろえ、だれの目にも、
（これは、死病にかかられたのだ）
と、見える。
小鼻が落ちくぼみ、眼のまわりの隈が濃くなるばかりだ。
雪丸が、まだ名主屋敷にいたころ、本郷庄左衛門の知り合いの老人が重病にかかり、庄左衛門の長男・庄吉郎が見舞いに行き、帰って来ると、
「小鼻は落ちていたか？」
先ず、庄左衛門がたずねるのへ、庄吉郎が、
「はい。落ちていました」
こたえるや、庄左衛門が肩を落し、
「それでは、もはや長くあるまい」
つぶやいたのを、雪丸は、いまだにおぼえている。
果して、その病人は五日後に死んだ。
「さと。お師匠さまの小鼻も落ちている。おれは、それが心配でならぬ」
ささやきかける雪丸の胸へ、さとは顔を埋めた。
湯浴みをしてきたばかりの、さとの躰の甘い匂いが、雪丸にはこころよかった。

師の病患を案じながらも、恋人の躰の香りに酔っている、その矛盾を雪丸は別に感じてはいない。

いつであったか、日影一念が、雪丸と二人だけで夕飯をとっていたとき、

「剣の道も同じだが、人という生きもののなすことを、理屈で解いてはならぬ。人という生きものは、なまじ、頭のはたらきがあるだけに困ることがあるのじゃ」

つぶやくようにいったのを、雪丸はおぼえている。

それがどういうことなのか、いまの雪丸にはまだわからぬ。

「おさと。おれは、そろそろ、道場へもどらねばならぬ」

雪丸は腕にちからをこめ、さとのうなじへ唇を押しあてた。さとの躰が、わずかにふるえている。

成子雪丸が、さとへあたえる愛撫(あいぶ)は、現代の若者たちにくらべたなら、まことにつつましやかなものだった、といってよい。

しかし二人は、それで、じゅうぶんに満足をしている。

若者の性欲は強く激しい。だが、それだけに性欲の発散を押さえるちからも強い。

まして雪丸は、日影一念について剣を修行する身だし、心身のエネルギーは、そのほうへ転化している。青春の一時期に、本能的な欲望を押さえて生きるということは、雪丸のような若者にふさわしかった。雪丸は、まだ、女の躰を知らぬ。さとも処女であった。

それだけに、雪丸とさとの心は、しっかりとむすびついている。

「さと。では、途中まで一緒に行こう」

「あい」

二人は、名主屋敷の北面の畑道で別れた。

雪丸は、畑の道を西へ向う。

この畑は名主所有のもので、道の突き当りに小川がながれている。わけもなく小川を飛び越えた雪丸は、木立をぬけて、日影一念の道場へ入った。

道場の敷地も、名主・本郷庄左衛門の所有地である。

庄左衛門と一念との関係が、どのようなものか、だれも知らなかった。

折にふれて、日影一念が雪丸にだけ洩らしたところによると、一念は、上野国（群馬県）吾妻郡にある白根神社の神官の子に生まれたらしい。

一念を庄左衛門に引き合わせたのは、だれか知らぬが、庄左衛門は一念を一目見て、すっかり気に入ってしまい、世話をすることになったのであろう。

それは、日影一念にとっても同様で、本郷庄左衛門という名主を深く信頼すると共に、

「かような名主どのを頭にいただく、この村は住みよい。わしは年若のころから故郷を出て、諸方をへめぐり歩いて来たが、角筈の村ほど心にかなったところはない」

と、いい、

「名主どのの世話を受けて、生涯を終えたい」
心を決めたのだという。
雪丸が台所から、母屋の中へ入ると、納戸との境いの廊下へ、門人の白根岩蔵があらわれ、
「うふ、ふふ……」
薄笑をして、
「さとを抱いてきたな」
と、いった。
雪丸は、それにこたえず、
「お師匠さまに、お変わりはなかったろうな？」
「いまのところは、な」
白根岩蔵は、躰もがっしりとしており、顔だちもととのっていて、色白で両眼が黒ぐろと大きい。
名前は、いかにも武骨に感じられるが、声もやさしげだし、美貌である。
それに引きかえ、成子雪丸は、優美な名前が、そのまま容貌をあらわしているとはいいがたい。
さすがに筋骨はきたえられているけれども、細い躰つきだし、それに小柄なのだ。色も黒く、

「このように、猿のような面体をしていて、雪丸とは笑わせる」

などと、白根岩蔵は、雪丸にもいった。

十年前、名主屋敷へ盗賊どもが押し入ったとき、十七歳だった岩蔵は、いま二十七歳の剣士になっていた。そして、いまだに道場へ住み込み、剣の修行をつづけている。

岩蔵も雪丸も、十年前のあのとき、師の日影一念がただひとりで、あれだけの人数の盗賊どもを捕えたありさまを見とどけている。

まだ子供であった雪丸は、ただもう、呆気にとられていたにすぎない。

しかし岩蔵は、すでに修行中の身であったから、師の一念の、人間ばなれのした、すばらしいはたらきを眼前に見て、

「おれは何としても、お師匠さまの剣の極意を、わがものとしたい」

熱望して、師の手もとをはなれようとはしなかった。

名前も顔かたちも、対照的な雪丸と岩蔵だが、本郷庄左衛門は、いつであったか、ふと、妻のりよにこういったことがある。

「雪丸は成子坂に捨てられた子ゆえ、両親の素姓も知れぬが、どことなく、あの子には気品がある。岩蔵にくらべると、顔も姿も見劣りがするなれど、口をひらくと、まるでちがう」

「と、申されますのは？」

「さて、何というてよいやら……つまり、言葉づかいのよし悪しではなく、声が、声の調子

がまるでちがう。また、剣術が強い弱いではなく、岩蔵の声には土のにおいがこもっている。岩蔵には、どうも田畑をたがやして生きる男が似合うている……ように、わしはおもうのじゃ」

だが、白根岩蔵の剣は上達するばかりであって、雪丸が何度、立ち合っても岩蔵には勝てぬ。

つい先ごろ、江戸から来た五人の剣客が試合を申し入れて来たとき、ちょうど道場にいなかった日影一念にかわり、岩蔵が出て、たちまちに五人とも打ち据えてしまった。

このことを後で聞いた一念は、

「わしのゆるしを得ずして、他流の者と立ち合うてはならぬ」

きびしく、岩蔵をたしなめたものであった。

白根岩蔵は、自分の容姿に自信をもっているし、おそらく剣士としての自負も相当なものであろう。

それゆえ、ともすれば雪丸を見下す態度になるのだが、雪丸は、ふしぎに岩蔵を憎めなかった。

あるとき、日影一念が雪丸の給仕で夕餉の膳に向っていたとき、おもい出したように、

「お前と岩蔵は、生まれた年の星が合うているのじゃ。これより先も、たがいに争うたり、憎み合うことはあるまい」

と、いったことがある。

それがどういうことなのか、雪丸にはわからなかったが、岩蔵には何でも相談できるし、岩蔵も、いざとなると雪丸に協力してくれた。

五年ほど前に、あまり激しい稽古をつづけたものだから、雪丸が躰をこわしてしまい、一ケ月も寝込んでしまったことがある。

そのときの、白根岩蔵の心配は非常なもので、それこそ、

「親身もおよばぬ……」

看病を、してくれたものだ。

夜も眠らず、枕元に坐っていてくれた、あのときの岩蔵の姿をおもい浮かべると、雪丸の胸は、われ知らず熱くなってくる。

もっとも岩蔵は、だれに対しても同じなのではない。

きらいな相手だと見向きもしない。

いまの岩蔵と雪丸は、師の一念にかわり、門人たちへ稽古をつけるほどになっているが、きらいな相手だと、

「お前は、雪丸にきたえてもらうがいい」

見向きもせぬが、自分が好む相手だと一刻（二時間）もかけて、丹念に稽古をしてやったりする。

雪丸が帰って来たので、岩蔵は台所へ入り、
「いま、飯の仕度をするから、お師匠さまを看ていてくれ」
「わかった」
岩蔵は、炊事をすることが好きらしく、むしろ、雪丸が手を出すことをいやがるのである。
「お前がつくる飯や菜は、どうもまずい」
と、いう。
（それは、たしかだ）
雪丸も同感であった。
同じ魚、同じ野菜をつかっているのに、岩蔵がつくると、ほんとうにうまい。
この母屋は、道場と中庭をへだてたところにあり、日影一念の居間、納戸、台所の三部屋から成っていて、その居間が一念の病間ということになる。
岩蔵と雪丸は、むかしから、道場に寝起きしていた。
日影一念は、苦しげな息づかいをしながらも、よく眠っている。
まさに、小鼻は落ちくぼみ、顔色は鉛のように暗かった。
真夏の夜だが、南の小窓から涼しい風がながれ込んできて、しのぎやすかった。
成子雪丸は師の枕元へ行き、桶の水で手ぬぐいをしぼり、師の額にのせてあった手ぬぐいと取りかえた。

額にのっていた手ぬぐいは、高熱のため、湯気がたちのぼるかとおもうほどになっていた。
一念は長身だが、もともと、肉のうすい体質であった。
それだけに、病気が重くなり、食欲がおとろえると、骨と皮ばかりになってしまった。
その衰弱しきった師の寝顔を見つめているうちに、雪丸の口から、われ知らず、
「父上……」
という、つぶやきが洩れたのである。
いうまでもなく、日影一念は雪丸の父ではない。
捨て子の雪丸が、名主屋敷で育ち、一念の手もとへ引き取られ、今日に至るまで、一念は雪丸にとって、
（父のような……）
存在であったのか。
一念もまた、父がわりになったつもりで、雪丸に接してきたのであろうか。
日影一念という人物は、きわめて、口数が少ない。
むろんのことに、木太刀をとって門人を教えるわけだが、一念は、自分自身の行動と生活を門人たちが見て、得るところがあるならば、
「それでよし」
また、物たらぬとおもえば、

「わしの手もとをはなれよ」
口には出さぬが、これが一念の考え方なのであろう。
ともかくも、流儀もないのだから、評判にもならず、したがって門人の数も少ない。
十年前の事件では、一念の名が江戸までもきこえて、
「角筈の村に、稀代の剣客がいるそうな。会うてみたい」
申し入れて来た大名や旗本が多かったが、一念は、みな、ことわってしまった。
桶の水がぬるくなってきた。
（取りかえて来よう）
雪丸が、桶を抱えて立ったとき、
「雪丸……」
目ざめた日影一念が、声をかけた。
低いが、はっきりとした声で、
「雪丸。これへまいれ」
「はい」
「納戸の奥に、黒塗りの木箱がある。それを、此処へ持って来てくれ。そして、岩蔵もこれへ」
「承知いたしました」

台所と小廊下をはさんで、五坪の納戸がある。

日影一念は「納戸」とよんでいるけれども、単に衣類や器物を収納してあるだけではない。いや、一念の衣類などは、ごくわずかなものだし、すべてに欲がないから器物も少ない。しかし、納戸の奥の一段高くなった場所に、黒漆を塗った三尺四方ほどの箱が安置されてい、それが注連縄で囲ってある。

よほどに、大切な箱のようだが、岩蔵も雪丸も箱の中を見たことはない。

箱の下には足がついていて、厨子のようなかたちをしている。桜材のがっしりとした造りで新しいものではない。

日影一念は、毎朝、納戸へ入り、この箱に向って何やら祈りをささげる。病臥してからも、この日課に変わりはなかったが、今朝だけは、さすがに身を起すのが苦しかったらしく、納戸へは入らなかった。

そうしたわけで、岩蔵も雪丸も、ほとんど納戸へは入らぬ。納戸の掃除にも居間の掃除にも、日影一念は他人の手をわずらわさなかった。

住みこんでいる二人の門人は、居間と納戸をのぞいた場所を掃除すればよかった。

成子雪丸が、一念の手もとへ来てから間もなくのことであったが、居間と納戸を掃除しようとする雪丸へ、一念が、

「そこは、わしが掃除する。かまわぬでおけ」

「お師匠さまは、なぜ、御自分で掃除などなされますか？」
「わからぬかな、雪丸には……」
「はい」
「いまにわかろうが……わしはな、掃除をしているのではない。稽古をしているのじゃ」
「えっ……」
雪丸は、おどろいて、
「稽古と申しますと、それは、あの、剣術の？」
「うむ……」
日影一念は、微笑をして、
「よいか、おぼえておくがよい。わしの剣法は、相手を倒すためにあるのではないぞよ」
「……？」
雪丸には、わからなかったし、一念もまた、そのときは、それ以上のことを語らなかった。
ただ、掃除をしている一念の姿を見て、
「わしの吐く息、吸う息に気をつけておくがよい。それが稽古なのじゃ」
といった言葉が、ちかごろの雪丸にはようやく、わかってきたようだ。

秘伝の書

成子雪丸は、台所にいた白根岩蔵と共に納戸へ入り、黒塗りの箱を居間へ運んだ。
日影一念は臥床の上に半身を起していたが、
「そうじゃ。いま一度、納戸へ行ってもらいたい。刀箪笥の上段を開けると、お前たちの名をしたためた品が入っている。それを此処へ……」
二人は、いわれたとおりにした。
なるほど、刀箪笥の上段には二振の脇差が入ってい、その上に二人の名前を書いた檀紙がのせてあった。
岩蔵と雪丸は、おもわず顔を見合わせた。
二人とも、顔色が変わっている。
「お師匠さまは……」
いいかけて、雪丸は声をのんだ。

脇差を持って居間へもどった二人へ、一念が、
「そこへ坐るがよい」
「は……」
「二人とも、長い間、よう仕えてくれた。一念、礼を申す」
こういって、日影一念は深く白髪の頭をたれた。
「お師匠さま……」
「もはや、別れなくてはならぬ。その脇差は、わしの形見とおもうてくれ。岩蔵には、和泉守国貞。雪丸には越前守助広がきたえた脇差。こころよく、おさめてくれ」
二人の門人は声も出ない。
一念は淡々と、
「尚、刀箪笥の下段には、名主どのへの形見、備前重光の一振が入っている。これをおとどけするように……」
その声は落ちつきはらっていて、いささかも乱れはない。
むしろ、顔には血の色が浮きあがり、両眼は澄みきって、死を前にした人とはおもわれなかった。
その両眼を岩蔵に向け、さらに雪丸へ向けつつ、
「岩蔵は岩蔵……雪丸は雪丸……」

つぶやくように、日影一念がいった。
「岩蔵は岩蔵。雪丸は雪丸……」
たしかに、そうきこえた。
またしても、二人の門人は顔を見合わせた。
一念は、傍に置かれた黒塗りの箱の、蓋をはらい、中の物を手にとった。
このとき、白根岩蔵の両眼が張り裂けんばかりに見ひらかれた。
日影一念が箱の中から出したものは、細い巻物が一巻のみであった。
あとは、何も入っていないらしい。
その巻物は、かなり古びている。
巻物を表具してある布も色あせてい、ところどころに解れが見えた。
日影一念は、この一巻の巻物を胸に抱くようにして、
「岩蔵、雪丸……」
よびかけてきた。
白根岩蔵は、この巻物にこそ、日影一念の剣法の極意が……その秘伝が、
（したためてあるにちがいない）
と、直感した。
岩蔵のみではない。雪丸も同じ直感をおぼえたのである。

（あの秘伝書を、御師は、おれに下さるおつもりなのか……それとも雪丸に……いや、そのようなことはあるまい。何といっても、この白根岩蔵は、御師と生国を一にしているばかりでなく、いまは、もっとも古い弟子だ。雪丸よりも強い。御師の剣の極意を受けつぐ者は、おれのほかにはいないのだ）

そうしたおもいが一つの輝きとなって、白根岩蔵の両眼に凝っている。

岩蔵は息をのみ、袴をつかんだ両の拳が微かにふるえていた。

雪丸は、どうか……。

これは、いつもの雪丸と少しも変わらぬように見える。

一念が巻物を取り出した後で、雪丸は黒塗りの箱を片寄せた。

日影一念は、両眼を閉じたままで、

「わしは、間もなく死ぬる。この巻物は……」

いいさして、一念は沈黙した。

沈黙は、ごく短かい間であったが、白根岩蔵はわれ知らず膝をすすめ、身を乗り出すようにした。

雪丸は身じろぎもせず、師の顔に見入っている。

「この巻物は、わしの遺体と共に、土中へ埋めてくれよ」

いい終って、一念は巻物を抱いたまま、臥床へ身を横たえようとした。

成子雪丸が擦り寄って介添えをし、一念を仰臥させた。
岩蔵は、うごかなかった。
岩蔵の面上には、落胆の色が濃く浮きあがっていた。
雪丸が、ちらりと岩蔵を見やった。
岩蔵は唇をかみしめ、何もいわぬ。
そこで雪丸が、日影一念の耳もとへ口を寄せ、
「お師匠さまのおいいつけ、たしかに、うけたまわりました」
はっきりと、いった。
一念は瞑目したまま、うなずいた。
またしても、雪丸は岩蔵を見た。
師の一念は、自分と岩蔵の二人だけに後事を托したのである。
岩蔵も、師のたのみにこたえねばならぬはずだ。
雪丸は「岩蔵どの……」小声でうながしたが、岩蔵はこたえなかった。
そのとき、日影一念の口が、わずかにうごいて、つぶやきのような声が洩れたのに気づいた雪丸が、
「お師匠さま、何ぞ……？」
一念は、何かいっている。

両眼を閉ざしたまま、たしかに、何かいっている。
成子雪丸は、顔を、耳を師の口もとへ寄せた。
「岩蔵は岩蔵……雪丸は雪丸……」
少し前にいった言葉を、一念は、またも、くり返しているのであった。
一念は、何をいわんとしているのか。
雪丸は、岩蔵がしずかに立って、台所の方へ去った姿を、たしかに見ている。
白根岩蔵は、そのまま、何処かへ出て行ったらしく、夜半になっても帰って来なかった。
やがて……。
日影一念は、昏睡に落ちた。
雪丸は一念の枕もとにつきそい、一念が手づくりの大きな団扇で風を送りつつ、一睡もせずに朝を迎えた。
古風な燭台の灯が消え、朝の光りが部屋の内へながれ入って来た。
（岩蔵どのは、何処へ行ったのか？）
雪丸は、立ちかけて、
「あ……」
おもわず、声を発した。
ほんの少し、雪丸が眼をはなしていた間に、日影一念の相貌が一変している。

寝顔が、死相に変わっていたのだ。

「お師匠さま……」

よびかけて、雪丸は一念の脈をとった。

脈はとまり、心ノ臓もはたらきをとめていた。

一念は、あの巻物を胸に抱き、息絶えていた。

成子雪丸は、師の遺体に合掌したまま、長い時間をうごこうともしなかったが、ややあって立ちあがった。

先ず、このことを、名主の本郷庄左衛門へ知らせなくてはならぬ。

それにしても、

（何と、呆気ない……）

師の臨終であったろう。

覚悟はしていたが、死の前に、一念は、もっと何か、いいのこすことがあったのではないか。

この道場の跡をつぐ者は、白根岩蔵をおいて、

（ほかにはない）

と、雪丸は、かねてから考えていたけれども、一念は、ついに自分の後継者をえらばなかったのである。

名主屋敷へ一念の死を知らせておいて、駆けもどった雪丸は、師の遺体を清めようとして、愕然となった。

「ない……あの巻物が、なくなっている」

先刻、成子雪丸が師の一念の脈をとり、心ノ臓をあらためたとき、たしかに日影一念は、巻物を胸に抱いていたのである。

それが、名主屋敷へ一念の死を知らせに行った、わずかな間に消えてしまっている。

「岩蔵どの……岩蔵どの」

雪丸は、声を張り、よんでみたが、岩蔵のこたえはない。

白根岩蔵は、昨夜から帰って来ないのか、それとも……。

あの巻物について知っているのは、雪丸と岩蔵の二人のみといってよい。

少なくとも、昨夜、巻物を師の胸に抱かせたのは岩蔵と雪丸なのだ。

それがないということは、雪丸が名主屋敷へ駆けつけた間に、岩蔵が、いまは遺体となった師の胸の内から、巻物を奪い取って、

（逃げた……いや、まさかに岩蔵どのが……）

雪丸は、道場へ行って見た。

道場に接した一間に、岩蔵と雪丸は寝起きしている。

岩蔵の衣類、所持品などは、そのままになっていた。

だが昨夜、日影一念が形見として岩蔵にあたえた和泉守国貞の脇差がない。
一念が何年か前に岩蔵へ、あたえた大小の刀もなかった。
（はて……？）
母屋の方に、人の声がする。
名主の本郷庄左衛門をはじめ、名主屋敷の人びとが駆けつけて来たらしい。
庄左衛門は五十八歳になってい、髪も薄く、白くなっていたが、健康は十年前とほとんど変わらず、いそがしい日々を送っている。
妻のりよは、このところ体調をくずし、病床についていたが、知らせを受けると、庄左衛門と共にあらわれた。
奉公人の市蔵夫婦とさとも駆けつけて来た。
「おお、雪丸。岩蔵どのは何処に？」
母屋へもどった雪丸へ、本郷庄左衛門がたずねた。
「おりませぬ」
「いない？」
「はい」
「何処へ行ったのじゃ？」
「わかりませぬ。昨夜から姿が見えませなんだ」

雪丸は、巻物のことを、庄左衛門に語らなかった。

（岩蔵どのは、あの秘伝の一巻を何処かで読んでいるにちがいない。読み終えたなら、きっと帰って来るだろう）

そうおもったからだ。

あの巻物の内容は気にならぬ雪丸であったが、師の遺言だけは何としても、まもらなくてはならぬ。

名主の本郷庄左衛門は、日影一念の死を、かねてから覚悟していたようだが、

「いざ、こうなってみると、自分の片身を剝がれたようなおもいがして……」

がっくりと肩を落し、一念の遺体の前からうごこうともしなかった。

庄左衛門は何度か、医薬にかかることをすすめたが、

「むだでござるよ」

一念は断じて、これをうけいれなかった。

「寿命がきたのゆえ、これは、医薬もかないませぬし、また、それがしも、もはや、寿命に逆ろうてまで長生きはしたくないのでござる」

と、一念は庄左衛門にいったそうな。

二十名ほどいる門人たちも駆けつけ、角筈の村びとが、つぎからつぎへ弔問にあらわれた。

こうなったとき、日影一念には遺族というものがあるのか、ないのか。あれば急報しなく

てはならぬ。

「名主さまは、お師匠さまから何ぞ身寄りのお人のことについて、御存知でございましょうか？」

雪丸がたずねると、庄左衛門は哀しげに、くびを振り、

「あのお人は、そうしたことを一言も洩らさなんだわい」

「ですが……」

日影一念は、はじめて名主屋敷へあらわれたとき、上州・高崎城下の薬種問屋、近江屋彦兵衛からの紹介状を持って来た。

近江屋彦兵衛は若いころに、江戸の薬種問屋で商売をおぼえたとかで、本郷庄左衛門とは、そのころからの知り合いらしい。

もっとも、この近江屋彦兵衛は、それから間もなく病歿している。

そのときは、知らせをうけた日影一念が高崎城下へ駆けつけ、八日の間、不眠不休で近江屋彦兵衛の看病をしたということだ。

ゆえに、いまの近江屋は、養子に入った人が跡をついでいる。

これへ、一念の死を知らせたものか、どうか……。

かねて、日影一念は本郷庄左衛門に、

「このたび、あの世へ旅立つことになり、またも、いかい御世話に相なります。なれど、そ

れがしの死については、何処へもお知らせ下さるな。故郷にも無用でござる」
と、いったそうな。
「せっかく、そのようにいわれたのゆえ、一念先生のお言葉どおりにするつもりじゃ。それで、よいな？」
庄左衛門が、雪丸に念を入れた。
一念の通夜には、多勢の村びとがあつまった。
白根岩蔵は、ついに、姿をあらわさなかった。
見様によっては、
「いるのだか、いないのだか、よくわからぬ……」
ような日影一念であったが、こうして、いざ一念が死去してみると、その生前の影響は実に大きなひろがりをもっていたことが、よくわかった。
すでにのべたように、一念は黙々として門人を教え、道場の敷地の一角にある野菜畑の手入れにいそしんだ。
成子雪丸は、十歳の折に、日影一念の手もとへ引き取られたわけだが、一念は先ず、雪丸に鉢巻をしめさせ、二尺五寸もの大刀を抜き、これを雪丸に持たせ、
「そこに立て」
と、いった。

「よいか。その刀の切先を、わしの眼に向けよ。よし……それでよい。そのまま、わしの眼を見つめよ。しずかに、落ちついて見つめておればよい。よし、そうじゃ。そのままで、息を深く吸い込め。よいか、深く深く……よし。吸った息を腹の臍のあたりから吐き出すつもりで、吐いてみよ」

いいながら一念は、これも雪丸の眼を見つめつつ後退したかとおもったら、

「む!!」

低い気合声を発し、腰に帯びていた大刀をすらりと抜きはなち、するすると雪丸へ近寄り、どちらかというと緩慢に、振りかぶった大刀を雪丸の面上へ打ちおろした。

このときのことを、雪丸は後に、さとへ、

「何やら、強い酒にでも酔ったようで、おれは、ふらふらしていたようだ」

打ちおろされた一念の刀は雪丸の鉢巻を断ち切ったが、額には一すじの傷もつけなかった。

「おれは倒れなかったが、半分は気をうしなっていたような気が、いまでもしている。ただ、黙って道場から出て行かれるお師匠さまの後姿だけはおぼえている」

と、雪丸がいうように、日影一念の教導の仕方は先ず、このようなものであった。

一念が、岩蔵、雪丸をはじめ、門人たちをどのように教えたかを、長々と書きのべてみても、それは到底、一念の剣法を正しく伝えることにはなるまい。

真剣を持たせられ、一念の大刀の打ち込みを額に受けたのは一度きりの雪丸であったが、

白根岩蔵は、

「おれはな、毎日毎日、半月ほども、お師匠さまに打ち込まれたものよ」

雪丸へ、打ち明けたことがある。

このように、日影一念が門人に接する態度は、ひとりひとり、ちがっていたのだ。

一念の門人といえば、白根岩蔵のように、

「ひとかどの剣客になりたい」

との志望をもつ者や、身分の低い侍の子弟などもいたが、こうした門人たちの大半は、半年か一年もすると、もう道場へ姿を見せなくなる。

一念の教え方に物足りなさをおぼえるからであろう。

それに引きかえ、農家の子弟たちの大半は長つづきする。

剣術が上達して、相手を倒したいと、いうことよりも、一念の教えが、単に剣術のみにとらわれず、やがては農家の主人となるべき若者にとって、まことに有益だということがわかってくるからであろう。

日影一念が角筈村に住みついてから二十五年もたっている。

そのころ、はじめて入門した農家の子弟たちは、いずれも家の跡をつぎ、そろそろ孫の顔も見られようかという年齢に達していた。

彼らは、いずれも、

「あのころ、お師匠さまの教えをいただいて、ほんとうによかった。自分のすることが迷いをもたずに、はっきりとわかる」

と、いう。

彼らは一様に、剣術へ打ち込んでいたときと同様、農業に打ち込んで倦むことを知らぬ。

「長い間、この村のために、ちからをつくしていただき、名主として、かたじけなく、お礼を申しあげます」

と、名主の本郷庄左衛門が、通夜の席で、日影一念の遺体へ語りかけた。

角筈村の新旧の門人が、その家族と共にあつまったのだから、一念の通夜が、いかに盛大であったか知れよう。

納戸の刀箪笥の中には、名主へ形見として遺した備前重光の銘刀があるのみで、そのほかの刀剣類はすべて、門人たちへあたえた日影一念は、晩年になると、短刀一振も身につけていなかった。

そして、金十両余が、

「この金で、それがしの遺体の始末をしていただきたい」

という意味の遺書と共に、刀箪笥の底にあった。

衣類も、つぎはぎだらけのものが、わずかに遺されていたのみだ。後には何もない。

自分が死んだ後の、道場の始末について、一念は何も遺書に書いてはいなかったが、

「この道場は、ぜひとも、雪丸どのが跡をついでいただきたい」

その声が、通夜にあつまった人びとから起った。

白根岩蔵は、通夜にもあらわれず、翌日おこなわれた日影一念の葬式にも姿をあらわさず、その後、半月、一ケ月、半年を経ても帰って来なかった。

成子雪丸は、他人に疑惑を抱いたことが、ほとんどなかった。しかし、あの夜の事情を振り返ってみると、亡師・日影一念の遺体から、おそらく、剣法の秘伝書とおもわれる一巻を盗み奪って逃げたのは、どのように考えても、

（白根岩蔵どのにちがいない）

のである。

このことは、自分の胸ひとつにおさめ、だれにも語りたくはなかった雪丸であるが、

（恩師は、あの一巻を御遺体と共に埋めよ、と、いわれた）

ならば、その遺言は何としても、まもらねばならぬ。

それには先ず、白根岩蔵を探さねばならぬ。

そのためには、角筈村の道場を出て、諸方をめぐり歩かなくてはなるまい。

雪丸は、ついに決意をして、名主・本郷庄左衛門のみへ、すべてを打ちあけた。

「ほう……そのようなことがあったのか。少しも知らなんだ」

「名主さま。秘伝書のことだけは、だれにもおっしゃいませぬよう、お願いをいたします」

庄左衛門は、しばらくの間、雪丸の顔をながめていたが、
「よし、よし。わかりました。なれど、おぬし一人にての岩蔵探しは、手がまわりかねよう。わしのところの若い者を出すことにしよう」
「かたじけなく存じます」
こうして、とりあえず、名主屋敷から出た五人の若者と成子雪丸は、江戸を中心に、白根岩蔵の行方を探しまわった。
雪丸が秘伝書を取り返しに来ることは、岩蔵もわきまえているにちがいない。となれば、簡単に見つけられるような場所にはいないと看てよい。

この年は、白根岩蔵探索のうちに暮れて、翌安永七年となった。
成子雪丸は二十一歳。白根岩蔵は二十八歳となったはずだ。
この年の春となって、雪丸は岩蔵の故郷へ行ってみることにした。
岩蔵は、日影一念と同様、上野国吾妻郡出生で、草津温泉のあたりだそうな。
その旅から帰って来た成子雪丸が、本郷庄左衛門へ、
「亡き恩師さまの身寄りも、岩蔵どのの身寄りも絶え果てておりました」
と、告げた。
「さようか。人というものの墓は三代、四代もたつと無縁のものとなると、いつであったか、

一念どのがいうてござったが、はかないものじゃなあ」
日影一念の一周忌が、もう間近になっている。
名主・本郷庄左衛門が、成子雪丸に、一念の一周忌がすんだならば、
「ふたたび、道場をひらくようにしなされ。先夜、わしは夢を見てのう」
「どのような？」
「日影一念どのが夢の中にあらわれ、もはや、白根岩蔵のことをかもうな、と申された」
「さようで……」
「もっとも、これは、わしがそのようにおもうていたので、夢となってあらわれたのやも知れぬが……」
「はい」
「岩蔵が、すぐに見つかるというわけにはまいるまい、どうじゃ？」
「はあ……」
「村の者は、一日も早く、道場をひらいてもらいたいと、いい出ている」
「そのことでございますが……」
「ふむ？」
「どう考えても、私が道場を引きつぐことは、まだまだ、とても……」
「いや、そうでない。亡き一念どのの道場が消えてしまうことを、村の者たちは、さびしく

おもっているのじゃ。あの道場で木太刀の打ち合う音がきこえ、すこやかな若者たちの声がする。それが何よりもたいせつなことなのだ」
「はあ……」
「あの道場があるおかげで、この村には無頼の者どもが寄りつかなんだ。それは、おぬしも知っていよう」
「なれど、それは一念先生あってのことです。とても私には、人を教えるだけのちからがございませぬ」
「さようか。それならば、他の若者たちと共に、おぬしが稽古をしたらよいではないか」
「あ……」
と、雪丸が、夢からさめたような顔つきとなり、
「さようでございましたな」
「わかってくれたか」
「わかりました」
「よいか、一念先生の道場は、剣術の稽古をするだけのものではなかったのじゃ。それを、よう考えてみておくれ」
「はい、それにつけても、岩蔵どのがいてくれ、道場をまもってくれたなら、どんなにかよいものを……」

「岩蔵は、角筈村の小さな道場のあるじにおさまり、満足をしているような男ではない」
「そうでしょうか……」
「白根岩蔵には、岩蔵らしい望みがあればこそ、この村から出奔して行ったのじゃ」
「その望みというのは、何でありましょうか？」
「おのれの剣名を、天下にあげることではなかろうかの」
雪丸は黙っていたが、
（名主さまは、よく御存知だ）
そうおもった。
剣客が、自分の剣名を天下にあげようというのは、当然のことであろうが、成子雪丸には、そうした大望が少しもなかった。ただ、ひたすらに、日影一念の人柄を慕うあまり、手もとに引き取ってもらったのである。
「おれはな、雪丸。決して先を急がぬつもりだ」
と、白根岩蔵はいった。
「お師匠さまの剣法を、もっともっと、おれは、この身に吸い取ってしまいたいのだ。おれの名をあげるのは、それからでよい」
こうした岩蔵の胸の内を、亡き日影一念は知っていたか、どうか……。
口には出さなかったが、一念ほどの人物ゆえ、知らぬはずはなかったろう。

そして、大望を抱く岩蔵を、雪丸と同じように、ふところへ抱き取っていた……雪丸には、そのようにおもわれてならない。

ところで、成子雪丸が市蔵夫婦の娘さとと結婚をしたのは、日影一念の一周忌もすみ、秋風がたちはじめた或日のことで、夫婦かための盃は道場の内でおこなわれた。

名主夫婦に、その息子夫婦。奉公人たち、日影道場の旧門人たちで、いまは角筈の村民となっている人びともあつまり、質素だが、よろこびにあふれた祝宴は、翌日の早朝までつづいた。

これをみても、日影道場の再開を角筈の村びとが、どれほどよろこんでいたかが知れようというものだ。

雪丸も、これには感動したらしく、

「朝になるまで、みんなが祝ってくれようとはおもわなんだ」

両眼をうるませ、

「この道場が、この村にとって、どのようなものか、おれは昨日、はっきりとわかった」

さとに向って、そういった。

「さと。末長う、たのむぞ」

「私こそ、おねがいをいたします」

二十一歳と十七歳の新夫婦である。

新夫婦は、道場の母屋に住み暮すわけだが、故一念の居間はそのままにして、名主が寄贈してくれた立派な仏壇を安置し、

〔日影一念居士〕

の位牌を入れ、一念在世のままにしておいた。

夫婦は、かつての納戸に住み暮すことにし、五坪の板敷きに畳を入れ、さとが嫁入りのときに運んで来た道具類を置いた。

雪丸にとっても、さとにとっても、夢のような明け暮れがつづいた。

道場の稽古は、一日もやすまない。

「さと。おれはまるで、別の男になったような気がする」

眼をかがやかせて、雪丸がいった。

白根岩蔵の消息が、雪丸の耳へ入ったのは、そのころである。

その日。

雪丸は稽古の後に、裏手へ出て薪を割っていた。

日影一念の教えでは、薪割りも剣術の稽古であった。

呼吸をととのえ、薪割りを振りあげ、打ちおろす。薪が割れる。その光景は、さとがおもわず見とれてしまうほどで、薪の割れる音が一定の間隔をたもち、いささかも狂わぬ。

長い時間、薪割りをつづけても、若い夫の呼吸は乱れず、汗ばむこともなく、手もとも姿勢もくずれぬのに、いつもながら、さとはおどろくのである。

そこへ、名主の本郷庄左衛門と、若い奉公人の富太郎があらわれた。

「名主さま。どうなされました？」

庄左衛門の顔色が少し変わっているのに気づき、雪丸が、

「もしや、岩蔵どのが？」

「うむ」

「見つかりましたか？」

「この、富太郎が江戸で見かけたというのじゃ」

「それは、よかった。何よりです」

「見かけたが、見うしのうた」

「えっ……」

富太郎は、面目なさそうに眼を伏せた。

この日、富太郎は名主の使いで江戸へ行った。

江戸の上野・元黒門町にある薬種屋・長崎屋新兵衛方へ、名主の手紙を届け、その返事をもらって来た。

長崎屋新兵衛と本郷庄左衛門とは、遠縁の間柄だ。

長崎屋を出て帰途についた富太郎は、湯島の裏坂下から、湯島天神社の境内へのぼり、そこの茶店で茶をもらい、弁当をつかうことにした。

この前、長崎屋へ使いに出たときもそうだったし、名主もそのための茶代を富太郎へわたしてある。

裏坂下からは、男坂とよばれる急な石段と、女坂といって、ゆるやかにのぼる石段が、参詣の人びとを境内へみちびく。

若い富太郎は、一気に男坂を駆けのぼった。

のぼりきった、ちょうどそのとき、これは坂を下ろうとする侍が石段の上へあらわれた。

侍は、笠をかぶっていない。

「あっ……」

富太郎は、おどろきの声をあげた。

「おお、名主屋敷の富太郎か」

その侍には、坂をのぼって来る富太郎の姿が見えず、のぼりきったとき、まともに顔を合わせてしまっただけに、隠れることもならなかった。

その侍は、白根岩蔵であった。

岩蔵はにやりとして、すぐに富太郎へ背を向け、歩き出した。坂を下りずにである。

「あっ。もし……」

富太郎も、みなが岩蔵の行方を探していることを知っている。自分も江戸へ出て、何日も探しまわったものだ。

岩蔵はこたえず、足を速めた。

このときの白根岩蔵の足の速さを、

「まるで、天狗のようで……」

という表現で、富太郎は語った。

急な坂を下ったのでは、このような速度が出ないとみて、岩蔵は身を返し、茶店や楊弓場などの小屋が立ちならぶ境内の人込みの中へ、たちまちのうちに、まぎれ込んでしまった。

秋晴れの昼下りで、境内には参詣の人びとがあふれている。

「もし、待って下せえよ」

叫んで追いかける富太郎が、人込みを掻きわけ掻きわけ、切通しの坂へ飛び出したときには、白根岩蔵の姿は何処にも見えぬ。

「ああ、いけねえ」

あわてて身を返し、あちこちと探しまわったが、こうなってはもう、どうにもならなかった。

「岩蔵どのは、どのような風体をしていた？」

という名主の庄左衛門の問いに、富太郎はこうこたえている。
「何しろ、咄嗟のことで、よくおぼえておりませぬが、黒い羽織に、へえ、袴をつけて……」
「羽織、袴をつけていたとな」
「はい」
となれば、白根岩蔵の身なりが、ととのっていたことになる。
「髪は、へえ、総髪でございました」
「ふうむ。そうか……」
本郷庄左衛門は腕を組み、両眼を閉じ、かなりの長い間を沈思していたが、ややあって、
「これ、富太郎。このことは、雪丸どのの耳へ入れぬがよい。いや当分は、わしとお前とだけが知っていることにしておこう。よいか、わかったな」
庄左衛門は、雪丸に道場をつがせようと決めてから、名前に、かならず〔どの〕をつけてよぶようになった。
庄左衛門は、さらに、
「いまここで、江戸に白根岩蔵があらわれたことを雪丸どのが知ったなら、またも岩蔵を探しまわり、道場の稽古に身が入るまい」
「はい」
「お前は口が堅い男ゆえ、安心をしているが、かまえて他へ洩らすまいぞ」

「わかりましてございます」
「お前は、わしの使いで、たびたび、江戸へ行くから、その往き帰りに湯島の天神さまの近くを歩いてみるがよい」
「そういたします」
「こたびは出合いがしらであったゆえ、岩蔵に気づかれたが、もしも、このつぎ、岩蔵を見かけたなら、黙って、そっと後をつけ、行先をたしかめておくれ。わかったな」
名主の本郷庄左衛門は、富太郎が去った後も、思案にふけった。
亡き日影一念の道場は、いまの角筈村にとって、
「なくてはならぬもの……」
なのである。
一念の肉体は滅んでも、道場は生きている。日影道場は角筈村の中心といってよい。
村びとたちの、心の拠り所なのだ。黙々として生きていた日影一念の影響の大きさを、庄左衛門は、いまさらながら、おもい知らされていた。
それだけに、成子雪丸が道場をはなれることに庄左衛門は不安と危懼を抱いている。
（せめて、あと二、三年は道場をはなれてもらっては困る）
その一方では、かの秘伝書一巻を、ぜひとも取りもどしたいと考えている本郷庄左衛門は、
成子雪丸に、

「一念先生が亡くなられて一年。白根岩蔵は、その回忌にも顔を見せぬ。あれほどの恩を受けていながら、これは、ゆるしがたい。わしは江戸にも、いろいろと伝もあることゆえ、お上のほうから岩蔵の行方を探していただこうかとおもうのじゃ」

相談をしたことがある。

それは、富太郎が岩蔵に出合う前のことだが、もしも岩蔵が江戸にいるようならば、奉行所に届け出ておくことだけでもよいと考えたからだ。

だが雪丸は、

「いま少し、待ってあげて下され。私は、いまに岩蔵どのが帰って来るような気がしてなりませぬ」

と、庇うのである。

「一念先生の御遺言を忘れまいな」

「はい、忘れませぬ。近いうちに、また、岩蔵どのを探しに出てはなりませぬか？」

「いや、ならぬ、なりませぬ」

庄左衛門はあわてて、

「雪丸どのには、この道場と角筈の村をまもってもらわねばならぬ」

「そのように大それたことは、私にはできませぬ」

「できる。できますとも」

雪丸同様に、庄左衛門も、秘伝書のことは深く重く、気にかかっている。
あれほどに無口で、無欲な日影一念が、
「わしと共に埋めてもらいたい」
わざわざ、二人の高弟に遺言をしたというのは、よほどのことだと看てよい。
（そうじゃ。富太郎のほかに、もう二人ほど、口の堅い、しっかりした男をえらび、江戸市中を探らせてもよい。いや、そうしなくては、亡き一念先生に申しわけがたたぬ）
ようやくに、本郷庄左衛門の決意がかたまりかけてきたようだ。
（それにしても一念先生は、その秘伝書を、何故、雪丸なり岩蔵なりに、ゆずりわたしておかなかったのであろうか？）
庄左衛門の疑問は、このことであった。
本郷庄左衛門は、白根岩蔵が江戸にあらわれたことを、あくまでも成子雪丸の耳へ入れまいと決意した。
いや、決意しかけた……と、いってよい。
しかし、庄左衛門は、
（わしとしたことが、何ということを考えていたのじゃ）
はっと、気づいたのである。
雪丸が角筈村の道場をはなれることをおそれ、

（わしは、雪丸どのを騙そうとしていた……）

このことであった。

（このようなまねをして、名主の役がつとまろうか）

庄左衛門は、わが身を恥じた。

そこで、また富太郎をよびもどし、

「これは、やはり、雪丸どのの耳へ入れたほうがよい。お前も一緒に来ておくれ」

「はい」

すぐに庄左衛門と富太郎は道場へおもむき、岩蔵発見のことを雪丸に告げたのである。

発見したが見うしなったと聞いて、成子雪丸は落胆をしたようであるが、

「なれど、江戸にいることがわかっただけでも、よかったとおもいます」

と、いった。

「わしも、人を出して探させるつもりゆえ、雪丸どのは此処にいて下され。どうか、そうして下され。たのみます」

「はい」

雪丸は素直にうなずいた。意外のことだ。すぐにでも雪丸は江戸へ向うとおもっていただけに、庄左衛門はほっとして、

「そうして下さるか、ありがたい」

「岩蔵どのは、すでに秘伝の一巻に目を通し、すべてを胸の内へたたみ込んだはず」
「ふむ、ふむ」
「となれば、もはや、あの秘伝書にみれんはございますまい」
雪丸の声は、落ちついている。
さとと夫婦になってから、雪丸の様子が急に大人びてきつつある。
「岩蔵どのは、近いうちに、秘伝書を返しにまいるやも知れませぬ。いま、何やら、そのような気がしてまいりました。恩師の御遺言を忘れるような岩蔵どのではありますまい」
「そうかのう」
「そうおもいたいと存じます。それに、もはや富太郎に顔を見られたからには、岩蔵どのは少しも油断をいたしませぬ。つぎは、こちらが見出すよりも先に、岩蔵どのが、こちらを見つけ、姿を隠してしまいましょう」
「では、どうしたらよいのか？」
「はあ……」
しばらく、凝っと沈思した後に、雪丸はこういった。
「いま少し、このまま、待ってみたいと存じます」

岩蔵の道

どこかで、草雲雀が鳴いている。

初秋の朝方、透きとおった、さびしげな声で鳴く草雲雀は、蟋蟀のような虫の一種である。

白根岩蔵が、日影一念の道場に住み暮していたときも、草雲雀の声を聴くようになると、

「秋になったのだなあ、雪丸」

「草雲雀の声は、さびしげで、あまり好きではないな」

「お師匠さまは、お好きだぞ」

「そうか。少しも知らなんだ」

「去年……いや一昨年の秋であったか……そこの井戸端で水をつかっておられるとき、草雲雀の鳴き声に耳をかたむけておられたが、おれが傍を通りかかると、おれを呼びとめて、岩蔵、草雲雀の声はよいな。心が落ちついてくるような……と、そういわれた」

「ほんとうに？」

「ほんとうだとも」

成子雪丸とかわした会話が、いまも、はっきりと岩蔵の脳裡に残っている。

白根岩蔵は縁側に腰をかけたまま、いつまでも草雲雀の声を聴いていた。

ここは、江戸である。

江戸の、上野の山つづきの日暮里に道灌山という高処があり、遠いむかし、この山には、江戸城の出城が築かれていたそうな。

土地の古老たちが「城山」とよぶのは、そのためであろう。

当時の江戸城には、まだ徳川将軍が入っていない。城主は、かの太田道灌で、戦国の世もたけなわのころであった。

道灌山は見はらしもよく、物の本には、

「秋のころは松虫鈴虫、露にふりいでて清音をあらわす。よって雅客幽人ここに来り、風に詠じ、月に歌うて、その声を愛せり」

などと、しるしてある。

虫の声をたのしむ風流人が、月のよい夜は道灌山へあつまって来るのだ。

ところで、いま、白根岩蔵が身を寄せている場所は、道灌山から西へ下ったところにある、風雅な造りの家であった。

いや、家というよりも、やはり屋敷といったほうがよい。家自体は、さして大きなもので

はないが、敷地がひろく、二千坪ほどもあろうか。
竹林や木立に囲まれた母屋と、渡り廊下でむすばれている二間つづきの離れ屋に、岩蔵は暮していた。
この屋敷のあるじは浪人で、名を島田九兵衛という六十前後の老人だが、浪人にしては贅沢な屋敷に住んでいる。
九兵衛は、たしかに浪人であるが、金貸しでもあった。
（名主屋敷の富太郎と出合うたからといって、何も逃げるように、姿を隠さなくともよかったのだ）
白根岩蔵は、昨日、湯島天神の境内で出合ったときの富太郎の愕然となった顔をおもい浮かべ、苦笑を洩らした。
（やはり、いまになっても、名主の本郷庄左衛門さまは、おれのことを探しまわっているのだろうか？）
富太郎のみではなく、ほかにも数人が、江戸市中を探しまわっているのやもしれぬ。
そして成子雪丸も、
（さぞ、おれのことを恨んでいるだろう）
このことであった。
（当然だな、それは……）

何しろ、恩師の遺言にそむき、秘伝書一巻を、岩蔵は盗み奪って逃げたのである。これでは奉行所の手に捕われても文句はいえまい。

（だが雪丸は、大事にするつもりはあるまい。あの巻物さえ、おれの手から取り返し、一念先生の墓へ埋めることができれば、それで満足するにちがいない）

返してやっても、よいとおもう。

すでに岩蔵は、巻物の中身を何度も見ている。

だから返してもよいが、返しきれぬところもある。

その一は、あれほど物事に淡泊で、無口な日影一念が、わざわざ、雪丸と岩蔵をよび、この二人だけに、

「遺体と共に埋めよ」

と、命じたのだ。

ゆえに、ただの秘伝書ではあるまい。

なればこそ、岩蔵は、この巻物の検討を、さらに深くしてみたいと考えている。

また、恩師を、雪丸を裏切ってまで、おもいきって盗んだ秘伝書だけに、

（何やら、手ばなしてしまうと、さびしいような……）

おもいが強いのだ。

むろんのことに、こちらから返しに行くのは、はばかられる。

（おれは盗人なのだ……）

からである。

別に、敵もちのように逃げまわっているわけではないが、角筈村へだけは行きたくない。

秘伝書を返してやれば雪丸は岩蔵をゆるすであろうが、

（雪丸が、おれを恨み、烈しく怒っていることは間ちがいはない。あの雪丸に頭を下げてあやまるのも、気がすすまぬな）

むしろ、雪丸が自分を探し当てて、

「返せ」

「返さぬ。ほしければ、おれと立ち合って、勝ってみよ」

成子雪丸と久しぶりで、勝負をするのもよい。そのほうが、ずっと、おもしろい。

ところで、白根岩蔵は、一年前に角筈村を出奔してから何処へ行ったのであろうか。

岩蔵が江戸へもどって来たのは、つい三ケ月ほど前のことで、それまでは江戸をはなれていた。

むろんのことに、出奔するとすぐに、岩蔵は盗み奪った秘伝書をひろげて見た。

見たからには、角筈村の道場へ帰ってもよいと、いったんはおもったが、やはり、帰りきれなかった。

いま帰れば、成子雪丸や名主の本郷庄左衛門のみか、村びとたちにも、岩蔵は侮蔑の白い

眼で見られるにきまっている。
　また一つには、たとえ帰ったとしても……いや、師の日影一念が死去してしまったからには、岩蔵にとって、
（もはや、あの道場には用がない）
のである。
帰っても、すぐに、道場を出ることになろう。
いや、一念が死病にかかっているとわかったときから、
（お師匠さまが亡くなられたら、おれは道場を出よう）
決意をしていた岩蔵なのである。
いま一つ、白根岩蔵には道場へもどりきれぬ理由というか……むしろ、いましばらくは、かの秘伝書を、
（わが肌身につけていたい）
そのおもいが強い。
日影一念が遺した秘伝書には、
（大きな謎がある）
と、白根岩蔵は考えている。
（その謎を、何としても解いてみたい。いや、解くまでは、この一巻を手ばなせぬ）

秘伝書を雪丸に返してもよいとおもう一方では、この執着も強いのだ。
それに秘伝書をわがものにしていると、以前のように、日影一念と共に暮しているような、ふしぎになつかしいおもいがしてならぬ。
そのおもいは、日毎に強くなって行くようだ。
ところで、道場を出奔した岩蔵は、先ず上総、下総を目ざして江戸をはなれた。
上総や下総の国には、すぐれた剣客が多くいて、その評判は江戸にもきこえている。
そうした剣客と立ち合って、岩蔵は自分の腕を、ためしてみたかったのである。
この考えは以前から、岩蔵の胸の内にあたためられていたものといってよかった。
何しろ、旅費も少なかったので、江戸をはなれてしばらく旅をつづけていると、岩蔵は穢苦しい浮浪者同然の姿となってしまった。
その穢苦しい姿の白根岩蔵が、どこの道場をまわっても、ほとんど、連戦連勝なのだ。
ここで、ひとつ、ことわっておかねばならぬことがある。
それは、道場を出奔してからの岩蔵が、自分の名前を変えたことだ。それも当然といえよう。
「上野、高崎の浪人、大久保八郎」
と、岩蔵は名乗った。
いま、世話になっている島田九兵衛にも岩蔵は、大久保八郎で通しているが、この小説で

は、よほどの必要がないかぎり、白根岩蔵の名をもって書きすすめて行きたい。

諸方の道場を訪れ、

「御指南にあずかりたい」

と、岩蔵が申し入れる。

穢苦しい旅の剣客と看(み)て、

「よし、おもうさま、叩(たた)きのめしてやれ」

「かまわぬから、腕の一本も叩き折ってやろう」

おもしろ半分に道場へ通し、いざ立ち合ってみると、叩きのめされるのは道場側のほうで、道場主があわてて逃げ出してしまうところもあった。

こうした場合、引きあげようとする岩蔵を奥へ招じ、道場のほうから金を出すこともある。

道場の剣士たちが総くずれになったことを、内密にしてもらいたいからであろう。

これは、成子雪丸と同様に世間知らずだった白根岩蔵にとって、

(おもいがけぬこと……)

であった。

はじめはことわったが、何しろ、ふところはさびしい。自分の力量をためすだけでは空腹(すきばら)をみたすことができぬ。

そこで、われ知らず、そうした金を受け取るようになった。

また、岩蔵は、
「貴殿の御流儀は？」
と、尋ねられるのには、まことに困った。
何となれば、亡師・日影一念には流儀がないからである。
盗み奪った秘伝書にも、流儀について一行も一句も書きしるしてないのだ。
「まことに、ふしぎな剣法でござるな」
岩蔵に負けた剣客たちが、そういうのだが、岩蔵には、どこがふしぎなのかわからぬ。
「さようでしょうか」
「ふしぎだ。木太刀の構え方からして、ふしぎです」
「ははあ……」
岩蔵は、木太刀を正眼（せいがん）につけているつもりなのだが、その構え方が彼らの目には異様にうつるらしい。
ともかくも、何処の道場へ行っても負けない。
（おれは、これほどの剣客になっていたのか……）
いまさらながら、岩蔵は亡師の教えをありがたくおもった。
亡き日影一念が門人たちを教えるについて、それぞれに教え方がちがうことは、すでに、のべておいた。

たとえば一念が、白根岩蔵に稽古をつけるときは、
「わしを、お前とおもえ」
と、いう。
つまり、一念にかぎらず闘う相手を自分とおもって打ち込めというのだ。
岩蔵に対しての、一念の教え方は、すべて、この一事につきる。雪丸に対しては、また別の教え方をするのであった。
そこで岩蔵が、
「自分を打ち込む」
気がまえになり、一念と相対する。
すぐにというわけにはまいらぬが、一年、二年とたつうちに、師の一念が自分に見えて来るようになった。
自分が自分を見る。
なるほど、ふしぎなことであるやも知れぬが、少年のころから日影一念のみを師として仕えてきた岩蔵にとっては、さして、ふしぎだとはおもえない。
よけいな言葉を口にせぬが、木太刀を構えた一念に、
「わしを、おのれとおもえ」
そういわれつづけて、一年もすると、自然に一念の顔が自分の顔に見えてくるようになっ

た。

　すると、すかさず一念が、

「それ、打ち込め」

　と、声をかける。

「やあっ!!」

　その声にさそい込まれるようにして、岩蔵は打ち込むのだが、いうまでもなく、岩蔵の木太刀は一念の稽古着の端にさえふれなかった。

　二年、三年するうちに、それでも木太刀の切先が一念の稽古着を擦るようになったのである。

　その他、ほかにも一念独自の稽古を受けた白根岩蔵だが、師が亡きのち、ひろい世の中へ出て、これほどに自分の剣術が通用するとはおもわなかった。

　しかも、金が入る。

　たいていの者なら、ここで驕りと慢心がきざしはじめるところだ。しかし、岩蔵は自信を得たが、慢心はしなかった。

　慢心と自信の差は、紙一重なのである。

　白根岩蔵は、十数年を日影一念に仕えて、片ときもはなれず、暮してきた。

　一念の日常は岩蔵の日常であり、一念の質素な生活感を岩蔵は共に味わいつくしてきてい

る。

いま、はじめて、ひろい世の中へ出て、

（このおれを、これほどまでに育てて下された……）

日影一念の、あの暮しぶりをおもい返せば、驕りたかぶることなど、岩蔵は考えてもみなかった。

立ち向う相手を自分の影と見て、これへ打ち込むことは、とりも直さず、自分の懈怠、間隙を、

「打ち据えることなのじゃ」

と、日影一念は岩蔵に洩らしたことがある。

それは、こういうことにもなる。

自分に懈怠や隙があるからこそ、相手に勝てるという、一種の逆説のようなものでないか……。

いまの白根岩蔵は、亡師がいう、この〔真理〕を、はっきりとつかめていない。

（つかめるまでは、おのれの剣を磨くよりほかに道はない）

と、岩蔵はおもいきわめている。

ために、旅をつづけながら、つぎつぎに新しい相手と立ち合い、打ち勝ちながらも、岩蔵は驕り、たかぶることがなかった。

こうして上総、下総の諸道場をまわるうち、岩蔵は、下総・佐倉十一万石の城下外れに無外流の道場をかまえる笠井次郎右衛門のもとへあらわれ、試合を申し入れた。

例によって、笠井道場の門人たちは、岩蔵に歯が立たなかった。

ところが、道場主の笠井次郎右衛門と立ち合うや、先ず、笠井が岩蔵の胴を打ちはらって勝った。

「さ、いま一度」

笠井がすすめて、今度は、岩蔵が笠井の面をとった。

そして三本目は、またしても笠井の胴がきまった。

「おそれ入りました」

岩蔵は、謙虚に頭をたれた。

笠井と立ち合って、負けたときの二本は、笠井の顔が自分の顔に見えなかったのである。

「ま、今夜は泊って行かれるがよろしい」

笠井次郎右衛門は五十そこそこの年齢に見えたが、温厚な人物らしく、その夜、酒をすすめられた岩蔵の顔が、たちまちに赤くなったのを見て、笠井は笑いつつ、

「これまで、いずこの道場に？」

問うてきたので、岩蔵は少し迷ったが、日影一念のもとで修行したことを告げるや、

「ほう。さほどの御仁が江戸の近くにおられたとは、少しも知らなんだ」

「日影先生は、もはや、亡くなられまして……」
「さようか。それは、お気の毒な……」
「しばらくの間、ここにとどまり、笠井先生の御指南を受けることはなりませぬか？」
「ふうむ……」
しばらく考えていた笠井が、
「ここに、とどまられることはかまわぬが、せっかくに志をたてて旅に出られたのだから、いま少し、諸方の道場をまわられてみたらいかがじゃ!?」
「はあ……」
「貴公が、ぜひ稽古をつけていただいたらよいとおもう剣客が、二人ござる」
白根岩蔵が、このようなことをいってもらったのは、このときが初めてであった。
「一人は……」
いいさして、笠井次郎右衛門は、しばらく沈黙をしていたが、
「さよう。この御仁が道場をかまえていたならば、ぜひにも貴公を……とおもうのだが、残念ながら、いまは道場を閉じ、江戸の隅田川のほとり、鐘ケ淵とやらいうところに隠居をされてしもうた……」
「何という御方でありましょうか？」
「それがしと同じ無外流にて、秋山小兵衛と申される」

むろんのことに、岩蔵は、その名前を耳にしたこともない。

「いま一人は、大坂の天満に、これも無外流の道場をかまえる柳嘉右衛門という御仁で、この人と私とは親しくしているゆえ、貴公が柳道場を訪ねるとあらば、添書してあげましょう」

笠井次郎右衛門は、白根岩蔵がいたく気に入ったようである。

五日後になって……。

岩蔵は、笠井の紹介状を得て、勇躍、大坂へ出発した。

笠井は、岩蔵を自分の門人ということにして、いろいろと旅行のための手つづきをとってくれた。

笠井の門人には佐倉藩の藩士が多い。

何でも佐倉藩では、笠井を武芸指南役として召し抱えたいようなのだが、いまのところ、笠井次郎右衛門は、

「かたじけないが、いまのところは、自由気ままにしていたいので……」

ことわりつづけているそうな。

そういうわけで、笠井が岩蔵のために種々の便宜をはかってくれるのに都合がよかったことは事実だ。

当時の日本は、徳川将軍の独裁政権のもとに、諸国の大名が、それぞれの国を治めるとい

う、いわゆる封建の時代であるから、日本は、いくつもの国々にわかれていたのだ。ために、日本国内を旅行するといっても、現代のごとく簡単にはまいらない。

たとえていえば、現代のわれわれが外国へ旅するような手つづきが必要であった。

岩蔵は例により、高崎浪人の大久保八郎の名前で、笠井から身分を保証してもらった。もしも岩蔵が、円満に角筈村を出て旅をするのだったら、この保証をし、手つづきをとってくれるのは名主・本郷庄左衛門にほかならないのだ。

そのかわり、岩蔵の身もとを保証した笠井次郎右衛門は、岩蔵の言動のすべてについて責任を負うことになるし、岩蔵も、これを裏切ってはならない。

むかしは、このように連帯の責任が非常に重かったのである。

さて……。

白根岩蔵は、寄り道をせず、東海道を大坂へ向って急行した。

途中、旅の景観をたのしみつつ、岩蔵は胸を躍らせていた。

旅籠へ泊ると、飯盛女といって、女中兼用の娼婦が岩蔵を誘惑したが、岩蔵は目もくれなかった。

白根岩蔵は、三十に近くなるというのに、まだ、一度も女体を知らぬ。

現代の人びとからみると奇異におもえるだろうが、当時、剣の修行をしているような男にとっては、少しもふしぎではなかった。

日影一念の角筈村は、甲州街道第一宿の新宿が目と鼻の先にある。新宿には、娼婦を置いた旅籠屋が四十軒もあって、夜毎、遊客でにぎわう。岩蔵も雪丸も、村の若者にさそわれることもないではなかったが、遊びに出かけたことはない。行ったとしても、これを咎めるような日影一念ではなかったろうが、二人とも全く興味を抱かなかった。

激しい稽古と研鑽に明け暮れる剣客にとって、しかも、岩蔵や雪丸のように女を知らぬ男ならば、女などという生きものは、さして必要でないといってよい。

もっとも、いまの雪丸はちがう。いまの成子雪丸は、さとという相愛の妻を得たからである。

ともあれ、白根岩蔵は大坂へ到着し、江戸とはまたちがう商業都市の活気に瞠目しつつ、天満の柳道場を訪ねた。

柳嘉右衛門は、笠井次郎右衛門より七つ八つは年上に見えた。

笠井からの添書を見た柳は、先ず、数人の門人と岩蔵を立ち合わせた。

岩蔵は、五人の門人のうち、四人に勝ったが、そのうちの一人に負けた。一本勝負であった。

柳は、みずから木太刀をとって岩蔵に向うことをせず、

「ゆるりと、あそんで行かれよ」

こういって、岩蔵を道場へ泊めてくれた。
岩蔵も、むりに柳との立ち合いをのぞまなかった。
信頼する笠井次郎右衛門の引き合わせによって、会うことを得た柳嘉右衛門なのだ。
柳には柳の考えがあるに相違ない。
その夜、岩蔵は奥の部屋へよばれ、柳の酒の相手をした。
岩蔵の酒量は相当なものになっていた。
そして、この年も暮れようとしていた。
その夜、柳嘉右衛門は、おもいがけぬことをいった。
十一年前、角筈の名主屋敷へ押し入った盗賊どもを、日影一念が捕えた事件を、柳が知っていたのだ。
「日影一念殿という御仁は、よほどに、すぐれた御仁らしいな。そのとき、諸方からの、召し抱えようというさそいに見向きもしなかったそうな」
「はい。よう御存知(ごぞんじ)で……」
「江戸からのうわさが耳へ入った。いまだに忘れぬ」
「盗賊どもが押し入った夜、私は一念先生のおそばにおりました」
「ほう、さようか」
「そのころ、十七歳でございました」

「なるほど」

柳嘉右衛門の道場には、大坂町奉行所の与力や同心の門人が多く、道場だけでも百坪ほどあり、門がまえも堂々たるものであった。

大坂の柳嘉右衛門といえば、江戸の剣術界にもきこえた人物だということが、後になって、岩蔵にもわかってくる。

柳も、どちらかといえば口数が少ない。

岩蔵がはなすことを、にこにこしながら聞いてくれて、ことに、日影一念のことにふれると、

「ふむ、ふむ……」

眼に光りが加わってきて、力強く相槌を打ちながら、

「それから、一念殿は、どうなされたか？」

岩蔵のはなしを、うながすようにした。

柳嘉右衛門は、どうやら、岩蔵が気に入ったらしい。

翌日になると、若い内弟子をひとり、岩蔵につけてくれ、

「せっかく、大坂へまいられたのゆえ、諸方を見物されるがよい」

と、いってくれた。

柳が、岩蔵について、どのように考えているのかわからなかったが、五日ほど、諸方の見

物をした岩蔵を居間へよび寄せ、
「間もなく、年が明ける。ま、大坂にいて、ゆるりと正月をすごされるがよい」
「何から何まで、おそれいります」
「なれど、おぬしは、やはり江戸へもどられるがよいとおもう」
「江戸へ、でございますか？」
「さよう。拙者が、よき人を引き合わせよう。その人の世話を受け、江戸において剣名をあげるがよい。おぬしなれば、江戸へ出ても、ひとかどの剣客となれよう」
結局、岩蔵は柳嘉右衛門から直接の稽古を受けぬまま、柳道場にとどまっていたが、年が明けて、今年の春もすぎてから、江戸へもどったのである。
その折、柳が添状（紹介状）を岩蔵へもたせ、
「上野の山内から日暮里へ出て、そのあたりで、島田九兵衛殿と尋ねればわかるはず」
と、いった。

白根岩蔵は、このようにして、島田九兵衛の食客となった。
それから三ケ月がすぎ、湯島天神の境内で、岩蔵は名主屋敷の富太郎に目撃されたことになる。
島田九兵衛という老人は、浪人だというが大小の刀など腰に帯したことはない。

頭は、すっかり禿げあがっていて、丸坊主であった。
小柄な、痩せた老人なのだが、細面の顔には何処となく気品のようなものがただよっていて、これが金貸しをしている人物とは、おもわれなかった。
家族はいない。妻もなく、子もないらしい。あるいは、別の場所にいるのやも知れぬが、白根岩蔵には、そうした気配が感じられなかった。
九兵衛は六十を二つ三つはこえているらしいが、血色もよく、背筋も正しく、病気で寝込むようなことは、ほとんどない。
家族はいないが、奉公人は、かなりいる。番頭が二人いて、このうちの年嵩の辰四郎という五十男は自宅から、島田九兵衛の屋敷へ通って来る。
そのほかに二人ほど、若い者がいるほかに、下男、飯炊きなどをふくめて男の奉公人が八人。女中は、いずれも中年女ばかりで、これが五人。合わせて十三人もの奉公人が九兵衛に仕えているのであった。
屋敷内は、いつも、しずかだし、とても金貸しの居宅とはおもわれなかったが、九兵衛も奉公人もなかなかにいそがしく、三日に一度は、九兵衛が駕籠をよび、供をつれ、朝から夜に入るまで外出をしている。ときには夜半近くなって帰ることもあった。
大坂の柳嘉右衛門がいうには、
「島田九兵衛殿は、ただの金貸しというようなものではない」

のだそうな。

大身旗本や、大きな商家の財政顧問のようなこともしているし、したがって、江戸では顔がひろい。

「ま、当分は、ゆるりとしていなされ」

と、島田九兵衛は白根岩蔵に、

「わしが、よう考えて、いまに、きっと身が立つようにしてあげましょう」

初めて訪ねて来た岩蔵に、九兵衛は自信ありげに、そういった。

柳嘉右衛門と九兵衛の間柄がどのようなものなのか、岩蔵は知らぬが、添書一通を読んだだけで、自分をこれほど大事にしてくれるというのは、よほどの信頼が双方にあると看てよい。

奉公人たちも、主人にいわれたのかして、白根岩蔵を「先生」と、よび、たいせつにあつかってくれる。

居心地が、まことによかった。

大坂から江戸へ到着して以来、白根岩蔵は島田屋敷にいて、ぼんやりと無為の日々をすごしていたわけではない。

岩蔵が大坂を発つにあたり、柳嘉右衛門は、

「当分の間、おぬしが稽古をするために……」

といい、江戸の、ある道場主への添書をくれた。
その道場は、江戸の浅草・元鳥越町にある牛堀道場である。
主は牛堀九万之助といって、当年四十二歳。
牛堀は奥山念流の達人で、上州・倉ケ野の出身である。生涯、妻をめとらずに剣の道へ没入し、
「独自の境地をひらいた」
と、物の本にある。
権兵衛という老僕と二人暮しの牛堀九万之助は、
「よう、まいられた」
訪ねて来た白根岩蔵を、こころよく迎えてくれた。
佐倉の笠井次郎右衛門。
大坂の柳嘉右衛門。
そして、江戸の牛堀九万之助と、岩蔵にとっては、
（願ってもない……）
人格の立派な剣客が、それまでは見ず知らずだった岩蔵を気に入って、それぞれに便宜をはかってくれる。
（おれは、何という、しあわせ者だろう）

岩蔵は、そうおもわざるを得なかった。
だが、もしも、この人びとの耳へ、
（おれが、亡き恩師の秘伝書を盗んで逃げたことがきこえたなら、何としよう）
岩蔵は、たちまちに、見捨てられてしまうであろう。
（やはり、雪丸に会い、秘伝書一巻をいさぎよく返したほうが、よいのやも知れぬ。雪丸ならば、おれを咎めまい。きっと、わかってくれよう）
そうおもう一方では、秘伝書を返したくない気もちが強い。
秘伝書の内容はさておき、この一巻を所持していると、
（お師匠さまが、いまでも、おれを見まもっていて下さるような気がする。おれの運が向いてきたのも、この秘伝書が、おれをまもっていてくれるような……）
などと、岩蔵は勝手な理屈をつけてみたりする。
それほどに、いまの岩蔵にとって、この秘伝書一巻への、ふしぎな愛着は、
（ぬきさしのならぬもの……）
と、なってきつつあるようだ。
牛堀九万之助も、柳嘉右衛門と同様に、何故か、みずから木太刀をとって岩蔵に稽古をつけようとはせぬ。
つけてくれなくとも、岩蔵にはわかる。

牛堀道場の門人たちの中には、岩蔵が三本の勝負のうち、一本は打ち込まれる相手が四人ほどいた。

剣客・大久保八郎

白根岩蔵が、ぼんやりと、草雲雀の声を聴いていると、
「入ってよろしいかな？」
渡り廊下から声をかけ、この屋敷の主・島田九兵衛があらわれた。
「あ、これは……」
「今日は、牛堀道場の稽古はおやすみか？」
「なまけております」
「なまける……それはよいことじゃ。人という生きものは、なまけることを知らねばなりませぬ」
「は……」
岩蔵は、いささか面映ゆかった。
昨日、湯島天神の境内で、名主屋敷の富太郎に見つけられてしまっただけに、何となく今

日は、外出をするのがためらわれたのである。

縁側から部屋へもどった岩蔵は、島田九兵衛に上座をすすめ、その前に坐った。

「ときに、大久保どの」

「はい」

はじめのころは、大久保八郎の偽名をよばれても、何やら他人のことのようにおもえたものだが、いまは、もう慣れた。

「前に、ちょっと申しあげておいた、御老中・田沼様の御下屋敷でおこなわれる試合の日取りがきまりましてな。来る十月十八日でござるが、むろんのことに、あなたは出場なされような？」

「そ、それは、まことでありましょうか？」

白根岩蔵の声は、感激にふるえていた。

現・徳川将軍は、十代の家治である。

その徳川家治から深い信頼をうけている田沼主殿頭意次は、幕府の最高権力者である老中のひとりだが、その威勢は、

「飛ぶ鳥をも落す勢い」

などと、評判をされている。

田沼意次は、むかし、三百石の幕臣にすぎなかったが、いまは遠江（静岡県）相良三万七

千石の大名となっていた。異常の立身出世というべきであろう。

老中の田沼意次といえば、金権政治、賄賂政治の巨魁のようにいわれているが、意外なことに、武術を奨励することに熱心なのだそうな。

田沼意次の妾腹の娘で、家臣の佐々木勝正の養女となった三冬は、市ケ谷の長延寺谷町にある井関忠八郎の一刀流をまなんだ女流剣士だという。

ところで……。

幕府政治の最高責任者として、日々の政務に多忙をきわめる田沼意次だが、年に一度か二度、日本橋・浜町の下屋敷（別邸）へ諸方の剣客をあつめ、試合をおこなわせる。

牛堀九万之助も、この試合に出場したことがあるらしい。

田沼老中が主催する、この剣術試合は、江戸の剣術界では、よく知られていた。

有能な人材なのに、めぐまれぬ境遇にあるものへは田沼老中が手をさしのべ、いろいろと援助をするということだ。

無名の剣客にとって、このような機会は、めったにあるものではない。

そうした剣客たちのほかにも、江戸の諸道場から推薦された剣士たちが出場する。

いずれにせよ、いまを時めく老中・田沼意次の目にとまれば、

「よいことはあっても、悪いことはない」

のである。

牛堀九万之助も以前に、この試合で勝ちをおさめたのを、田沼意次が心にかけていたらしく、翌年に田沼が援助をして、道場の構えも大きくなり、門人の数も増えたという。

それだけに試合出場をのぞむ人びとが多く、したがって人選も大変らしい。

だが、白根岩蔵の大久保八郎は、江戸の島田屋敷へ来てから半年もたたぬのに、早くも出場をゆるされた。

これは、牛堀九万之助が推してくれたことにもよるが、それよりも、島田九兵衛のちからがあってのことといってよい。

島田九兵衛は、それこそ、ただの金貸しではない。

島田の手で、どれほどの金がうごいているか、それはわからぬが、何しろ、諸方の大名へも金を融通しているとのことだし、時折は、田沼意次に招かれ、その屋敷へおもむくこともある。

田沼老中は、身分の上下や有名無名を問わず、有能な人物ならば身近に引きつけて、いろいろと意見を聞き、幕府政治の参考にしている。

してみると、島田九兵衛は田沼老中の、隠れたる〔政治顧問〕のような立場にあるのか……。

いまの白根岩蔵には、くわしいことは何もわかっていないが、おぼろげながら、

（島田九兵衛殿という御仁は、おれなどのおもいおよばぬちからを持っておられるらしい）

と、わかる。

「六十をこえた……」

と、九兵衛はみずからいっているし、見たところは、平凡な老人にすぎず、刀も腰に帯していない。

それでいて、どこかに侵しがたいところがあるのは、やはり侍の家に生まれ育ったからであろう。

「田沼様御屋敷の試合に出られるときまったなら、また稽古をなさるがよろしい」

と、九兵衛がいった。

「はい。そういたします。いろいろと、おはからい下され、かたじけのうございます」

「何の、何の……」

島田九兵衛は、白根岩蔵の生い立ちについて、どれほどのことをわきまえているのであろうか。

岩蔵は、大久保八郎の偽名で通しているが、亡師・日影一念について、一言も語っていない。

江戸へ来れば、角筈村は目と鼻の先である。なればこそ、名主屋敷の富太郎と出合ったりするわけだから、すべてに注意をしなくてはならぬ。

少年のころから日影一念に仕えて来た岩蔵は、いわば「世間知らず」といってよかった。

だから、去年の夏に道場を出奔して、下総・佐倉の笠井次郎右衛門の道場へ立ち寄り、おもいもかけぬ笠井の親切なはからいを受けたとき、われ知らず、

「私の師は、日影一念先生と申されまして……」

打ちあけてしまったものだ。

ゆえに笠井は、岩蔵を大坂の柳嘉右衛門の許へさしむけた折、その添書の中で、日影一念の名にふれていたものとみえ、柳は岩蔵に一念のことについて語り、岩蔵も、それにこたえている。

では、柳嘉右衛門も、江戸の島田九兵衛へあてた添書の中に、日影一念の名をしるしたか、どうか、それはわからぬ。

封をした添書の中身を、ひそかに見るような白根岩蔵ではないからだ。

その岩蔵が、一念の秘伝書を盗み奪って逃げた……というのだから、人間というものの生態は、

「矛盾している……」

のである。

いや、人間と、人間の世の中は、矛盾のかたまりといってよい。

人間の心身には、善と悪とが同居しており、ときにふれて、双方があらわれ、人間そのものを表現するのだ。

そもそも岩蔵は、秘伝書の一件について、自分がしたことを、
（悪いことをした……）
とおもってはいるが、内心では、恩師であり、一つには、
（おれの父のような……）
とも感じていた日影一念ゆえ、
（おれがしたことを、お師匠さまは、きっと、ゆるして下さるにちがいない）
その、あまえがある。
成子雪丸は、そうした岩蔵の胸の内に、おぼろげながら理解をもっていたからこそ、
（岩蔵どのは、きっと、秘伝書を返しに来る）
とのおもいを、捨てきれない。
そのとおりであった。はじめ、白根岩蔵は秘伝書の中身を読んだなら、何らかの方法で、これを雪丸へ返すつもりでいた。
それを返せなくなったのは、日影一念の秘伝書が、あまりにも不思議なものだったからである。
秘伝書のことはさておき、島田九兵衛は大坂の柳嘉右衛門からの添書を読んだのみで、
「大久保どのは何処（どこ）のお生まれか？」
とか、

「何処の道場で修行をされたのか？」

などという質問を、いっさいしなかった。

亡き日影一念ほどの無口ではないが、島田九兵衛も些細なことに、まったくこだわらぬ。

柳嘉右衛門が添書の中で、岩蔵のことをどのようにしるしていたのか、それはわからぬが、岩蔵が外から見たところでは、さほどに厚味のある手紙ではなく、ごく簡単に岩蔵の〔大久保八郎〕を紹介しているにすぎぬようであった。

（これほどの、うすい添書で、先方が果して、おれの世話をしてくれるのだろうか？）

大坂から江戸への道中で、白根岩蔵は不安をおぼえたほどであった。

その岩蔵の不安が、杞憂であったことは、すでに読者もおわかりであろう。

いずれにせよ、よほどに双方の信頼が深くなければ、添書を書く方も受ける方も、このようにはまいらぬ。

角筈を出奔してより一年余。いまのところ、白根岩蔵は、

（おれは、まったく、めぐまれているようだ）

おもわざるを得ない。

いまの岩蔵は、角筈にいたころの岩蔵ではない。

この一年余の間に、岩蔵にとっては、わが胸におさめきれぬほどの世の中を見てきた。

そして、すべてが、よいほうに、よいほうに向っている。

（ああ。人と人との信頼というものは、こうしたものなのか……）

深く、心をうたれた。

これよりの自分は、恩をうけた笠井、柳の両先生や島田九兵衛の期待にそむかぬような剣客とならねばならぬと、岩蔵は決意をした。

しかも、来る十月十八日には、老中・田沼意次が主催する試合に出場できるというではないか。

「では、そのおつもりで、な」

島田九兵衛が離れ屋から立ち去ったあとで、白根岩蔵の晴れやかだった顔に翳りがさしてきた。

岩蔵は立って縁側へ行き、あたりを見まわした。

人の気配はない。

部屋へもどり、身のまわりの品々をおさめてある戸棚を開け、亡師の形見の脇差と、桐箱へおさめて二重に布で包んだものを出して来た。

桐箱は、岩蔵が大坂滞在中に造らせたもので、中には、かの秘伝書一巻がおさめられている。

岩蔵は、先ず、和泉守国貞一尺五寸余の銘刀を抜きはらい、凝っと見入った。

「お師匠さま……」

声にならぬ、つぶやきが岩蔵の唇を微かにうごかした。
ひろい庭に、日がさしてきた。
その強い日の光りには、まだ、夏の名残りが感じられる。
向うの竹林の前を、白いものがはらはらとたゆたっていた。秋の蝶である。
国貞の脇差を鞘におさめてから、岩蔵は布包みをひらき、桐の箱を出した。
出したが、蓋を開けようとはしなかった。これまでに何十回、何百回となく中身をあらためた秘伝書なのである。
白根岩蔵は、秘伝書を抱くようにして、瞑目した。
（この上、恩義を受けた方々を、騙しているわけにはまいらぬ）
このことであった。
自分は、大久保八郎ではなく、白根岩蔵であることを、いまは何よりも島田九兵衛に告げておかねばならぬ。
それでないと偽名のままで、晴れの試合にのぞまなくてはならぬ。これは実に心苦しいことであった。
だが、もしも、真実を告げたなら、島田九兵衛のみか、笠井・柳両先生の信頼をも失ってしまう。九兵衛は田沼主催の試合に出ることを禁ずるやも知れぬ。
（いや、それにきまっている。そして、おれは、この屋敷から追い出されてしまうだろう）

はじめは、さほどの呵責もなく、ついた嘘が、しだいにふくらみ、こうなってくると、ぬきさしならぬものとなってきた。

恩人を騙してまで、嘘をつらぬき通すか……または、秘伝書を雪丸に返し、その了解を得て、真実を恩人たちへ打ちあけるか……。

田沼屋敷の試合出場が決まったと島田九兵衛から告げられ、岩蔵の苦悩は急に深いものと変わったのである。

白根岩蔵は、深い嘆息を洩らした。

両眼は、まだ見ひらかなかった。

日影一念が、

「わが遺体と共に埋めよ」

遺言をした秘伝書一巻の不思議、その謎は、いかに考えても容易に解けぬ。

眼をひらいた岩蔵は桐箱を置き、またも国貞の脇差を取りあげ、脇差の鞘の外側に差し込んである小柄を引き抜いた。

小柄は細く小さな刃物だが、現代のナイフのように便利なもので、使用の範囲がひろい。

紙を切ったり、封を切ったり、また髪をなでつけることもあるし、万一のときには、これを手裏剣のかわりに敵へ投げ打つこともある。

岩蔵の手の中の、小柄の切先が、わずかにふるえ出した。

結局、白根岩蔵は何もせず、小柄を脇差の鞘の外側へおさめた。

だが、おさめるまでの間、引き抜いた小柄の切先を、にらむように見つめていた、その岩蔵の両眼の光りの底に、いま一つの不気味な光りが加わり、唇は血がにじむほどにかみしめられていた。

岩蔵は小柄をもって、何をしようとしたのか……。

いずれにせよ、このときの彼が、よほどに何事かを、異常なまでに、おもいつめていたことはたしかである。

「もし……」

渡り廊下から、女中の声がした。

夢からさめたような顔つきになり、白根岩蔵が、

「あ、何ぞ？」

「お昼餉を、もってまいりました」

「さようか……相すまぬ」

桐箱を布で包んでいる岩蔵の前へ、女中が昼餉を運んで来た。

この女中は、名を喜乃という四十女で、顔が似ているというのではないが、角筈村の名主屋敷にいたさとを、ふとおもい起させるような喜乃であった。

（さとは、雪丸と仲ようしていたが、いまはどうしているだろう。うまく、雪丸と夫婦にな

れればよいが……）

焙ったばかりの干魚、大根の味噌汁に漬け物。これだけの昼餉だが、当時は、これが普通である。

しかし、十何人も奉公人を使っている島田九兵衛の生活にしては質素なものといえる。九兵衛は三食ともに、奉公人と同じものを食べているからだ。

喜乃が膳の傍に坐り、食事の給仕をする。むだ口をきかず、岩蔵が黙っていれば、喜乃もまた、いつまでも黙っている。

喜乃は、岩蔵の身のまわりを世話してくれ、したがって一日のうち、顔を合わさぬことはない。いまでは岩蔵も一言二言、喜乃にはなしかけることもあるし、そうすれば喜乃も一言二言の返事はする。

（おれの母親が生きていれば、喜乃さんより三つ四つほど年上になろうが……）

ふと、そのおもいが連想をよんで、

「喜乃さんに、子供は？」

岩蔵が問いかけると、いつもなら返事をする喜乃がこたえなかった。こたえぬということは、返事を拒否していることなのだから、岩蔵は問いを重ねるような、おろかなまねはしなかったが、

（何やら、事情があるらしい）

と、わかった。

喜乃は、いつも無表情な顔をしているが、このときも、眉の毛ひとすじ、うごかさなかった。

十月十八日。

浜町の田沼家・下屋敷での試合にえらばれた剣客は五十二名である。

試合は、当日の五ツ半（午前九時）からはじまり、昼の休憩の後、九ツ半（午後一時）から再開されることになった。

老中・田沼意次の下屋敷は宏大なもので、中の屋敷は、さほどに大きなものではなかったが、ひろびろとした敷地の一角に、三十坪ほどの道場が設けられている。

この道場は、田沼家の家来が稽古をするためのものであろう。

田沼意次は、前日の夕刻前に、江戸城での政務を終えると、神田橋御門内の上屋敷（本邸）へは向うことなく、そのまま、下屋敷（別邸）へ来たのだそうな。

白根岩蔵の大久保八郎は、牛堀九万之助にともなわれ、田沼家・下屋敷へおもむいた。

島田九兵衛は、こうした場所へはあらわれぬ。

「勝ち負けなどを考えずに、おやりなさるがよろし」

九兵衛は、こういって、岩蔵を送り出したが、武術の試合へのぞむ者が勝負のことを考え

ぬわけにはいかない。

つまり、九兵衛は、

「無心になれ」

と、いいたかったのであろうが、これは、なかなかにむずかしいことだ。

岩蔵の相手は、湯島五丁目に大道場をかまえる一刀流の金子孫十郎信任の高弟・田村邦四郎に決まっている。

田村は、金子道場の四天王などとよばれるほどの手練者で三十一歳。八百石の旗本・田村三左衛門の三男に生まれ、家の跡目は兄がつぐわけだから、

（何としても一流の剣客となり、自分の道場をかまえたい）

その希望に燃えている。

岩蔵と田村邦四郎の試合の、審判をつとめるのは、ほかならぬ田村の師・金子孫十郎であったが、

「金子先生は、わしもよく知っているが、まことに立派な方ゆえ、いささかも案ずることはない」

牛堀九万之助は、そういって、

「だが、おぬしの流儀を何といって披露したらよいか……」

「前に申しあげましたように、年少のころから、さまざまの流儀の師について修行をいたし

ましたので……」
「うむ。そこで、な……」
「はい？」
「面倒ゆえ、わしの流儀の奥山念流ということにしておいたが、それでよいか？」
「結構に存じます。まことに、かたじけないことでございます」
大坂の柳嘉右衛門が、牛堀九万之助へあてた添書で、白根岩蔵のことをどのように書きしたためたものか、岩蔵は知らぬ。
だが、柳は、故日影一念のことを知っているはずであった。
しかし、牛堀九万之助は、岩蔵の前で日影一念の名を口にのぼせたことはない。
いずれにせよ、岩蔵の剣法に流儀はない。これは嘘でもいつわりでもない事実だ。
（強いていうなら、一念流か……）
と、岩蔵は、時折、そうおもっては苦笑を浮かべることがある。
岩蔵にとって、流儀などは、
（どうでもよい……）
ことにちがいないけれども、江戸で、自分の剣名をあげるとなると、流儀なしではどうにもならぬ。
（牛堀先生が、このようにいって下さるのだから、これからおれの流儀は奥山念流というこ

とにしようか……）

いや、田沼家の試合に、奥山念流・大久保八郎と届け出たからは、江戸にいる以上、これを取り消すわけにはまいらぬだろう。

十月十八日の早朝に、島田屋敷を出た白根岩蔵は、先ず牛堀道場へおもむいた。

牛堀九万之助は岩蔵のほかに、門人の鳥飼松之助（とりがいまつのすけ）をともない、浜町の田沼家・下屋敷へ向った。

朝の大気は冷え冷えとして、早くも冬の到来を感じさせる。

雲ひとつなく晴れわたった朝空であった。

当時の陰暦十月十八日は、現代の十一月中旬とおもえばよい。

「大久保殿の御武運を祈り申す」

鳥飼が岩蔵へ、ささやいた。

「かたじけなく存じます」

「拙者は、大久保殿に分（ぶ）があるとおもいます」

「いや、そのような……」

二人の前を、牛堀九万之助の、肩幅のひろい背中がゆっくりと歩んでいる。

鳥飼松之助は二十三歳の若者で、微禄（びろく）の御家人の息子だが、決して世辞をいうような男ではない。

牛堀道場へ稽古に通う岩蔵が、よく鳥飼の相手をしてやるので、鳥飼は岩蔵に感謝の念を抱いている。したがって、今日の試合に岩蔵が勝つことを念じていてくれるのであろう。

三人が下屋敷へ到着すると、田沼家の家来たちが丁重に案内をしてくれた。

つぎからつぎへ、諸方の剣客たちがあつまって来る。

今日は晴天なので、試合は邸内の、道場前の広場でおこなわれることになった。

老中・田沼意次の、剣客たちへ対する心くばりは、実に念の入ったものであった。試合場の広場をはさんだ両側に設けられた出場剣士の控所には、真新しい畳を敷きつめ、まわりには幔幕を張り、湯茶、弁当の接待にもぬかりがない。

試合場の正面に、田沼意次の席が設けられてあるが、一段高い場所ではなく、地面に床几（腰かけ）を置いてあるのみだ。

その床几も格別に立派なものではなく、審判をつとめる金子孫十郎と同じ物である。

田沼意次は、どちらかというと細身の小柄な人物で、顔も細面の、いかにもやさしげな顔貌をしている。顎が長く、しゃくれ気味で、眉毛は黒くふとい。

このとき、田沼老中は五十九歳になっていた。

紋服をつけて威儀を正してはいるが、顔には微笑が浮かび、もし、この人に町人の姿をさせたなら、それはそれで、ぴたりと似合うような、いかにも気やすげな感じで、これが、

「飛ぶ鳥を落す勢い……」

の、幕府最高の権力者だとはおもえぬ。
牛堀九万之助は、
「試合が終っても帰らずに、最後まで見ていなさい」
岩蔵にいい残して、控所から出て行った。
牛堀は、田沼老中の背後にならぶ家臣たち、著名な剣客たちの中に入り、試合を見ることになっているらしい。鳥飼松之助は、控所に残り、岩蔵につきそっていてくれる。
「私のことはよいから、試合を見てはいかがだ」
しきりに、岩蔵はすすめたが、松之助は、
「いえ、大久保殿の試合が終るまでは、つきそっているようにと、牛堀先生から命じられているのです」
「それは、どうも……」
「どうか、勝って下さい」
「それは、わからぬ」
「いや、大丈夫です」
松之助は、自分が試合をするかのように興奮している。
試合が、はじまった。
鳥飼松之助は幔幕の外へ出て、試合の進行ぶりをたしかめては、また、もどって来た。岩

蔵と田村邦四郎の試合は、午前中の最後になっている。これが終ると、昼の休憩となり、午後から試合が再開される。岩蔵は、自分でも、ふしぎなほどに落ちついていた。

多勢の剣客がたむろしている控所の雰囲気の物々しさは、いうまでもない。

岩蔵は、袋の中から木太刀を出し、ふところの布でぬぐいをかけた。

どれほどの時間がすぎたろう。

空は晴れわたり、日ざしがあたたかくなってきた。

鳥飼松之助が、白根岩蔵へ近寄って来て、

「二番後です」

と、告げた。

「さようか」

「そのときは、お知らせにまいります」

「かたじけない」

「では……」

また、松之助が幔幕の外へ出て行った。

そのとき、岩蔵のとなりにいた剣客のひとりが、

「拙者、一刀流の川野令吉と申す。御尊名、御流儀は？」

声をかけてきた。

「は。奥山念流、大久保八郎と申します」
岩蔵は、すらすらとこたえた。
「さようでござるか……」
川野令吉という剣客の声が、少し上ずっていた。
川野は肥っていて、よほど酒をのむらしく、顔が酒焼けをしている。
青空に雲が一つ、浮かんでいた。
風が出てきて、その雲が、ゆっくりとうごきはじめるのを、岩蔵はながめている。
木太刀の打ち合う音や、気合声が、絶えず、この控所へきこえてきた。
鳥飼松之助が控所へ入って来て、
「大久保殿。こちらへ……」
と、いう。
うなずいた岩蔵は、木太刀をつかみ、立ちあがった。
「このつぎです。お仕度は、よろしいですか？」
「はあ、よろしい」
松之助は、幔幕の一隅へ岩蔵をいざなった。ここが、試合場への出入口だ。
岩蔵は、すでに袴の股立ちをとり、鉢巻をしめ、襷をかけ、出場の仕度を終えている。
勝負が終った。

試合場のどよめきがきこえる。
こちら側の剣客が負けたらしく、蒼ざめた顔をうつむけ、幔幕の中へもどって来た。
間もなく、呼び出しの声がきこえた。
「一刀流、田村邦四郎」
田村が出て来た。
「奥山念流、大久保八郎」
呼ばれた白根岩蔵の傍から、鳥飼松之助が幔幕を引き開けてくれた。
それへ目顔でうなずき、岩蔵は試合場へ出て行った。
かねて牛堀九万之助に教えられたとおり、岩蔵は先ず、正面の田沼意次へ向って一礼する。
田村も同様だ。
それから、二人の剣客は向き合った。
田村邦四郎の背丈は、六尺を越えていよう。堂々たる体軀であった。
この日の白根岩蔵は、島田九兵衛が用意してくれた紋つきの小袖と袴を身につけていた。
紋服も袴も、木綿である。それも新調ではない。九兵衛自身が前に着ていたものを、洗い張りをし、女中の喜乃が縫い直してくれたものだ。
「わしの着古したものだが、このほうが、なまじ新しいものより、躰になじむ」
ことに試合をするのだから、仕立ておろしの小袖よりも、やわらかく肌になじんだものの

ほうが、躰もうごきやすいということなのであろう。
いまも島田九兵衛は、木綿の衣類を好んでいるようである。
こうしたわけで、小袖の紋は島田九兵衛の紋・三ツ星であった。
牛皮の鍔をはめた赤樫の木太刀を持ち、白根岩蔵は試合場の中央へすすむ。
向う側からは、田村邦四郎がすすんで来て、双方の間合いがぴたりときまる。
立ちどまった両者は礼をかわし、腰を落して両膝をひらく。
二人が木太刀を向け合ったとき、審判の金子孫十郎が前へ突き出した白扇を颯と引いた。
これを合図に立ちあがった二人は、ぱっとはなれる。
はなれたとおもった瞬間であった。
「やあ!!」
凄まじい気合声を発し、田村邦四郎が岩蔵の面上をめがけて、猛然と打ち込んできた。
息をのんで見まもっていた鳥飼松之助は、
(あっ……)
おもわず、両眼を閉じた。
松之助の目には、田村邦四郎の巨体が、白根岩蔵の体軀へ被いかぶさるように見えた。
試合場に大きなどよめきが起った。
おそるおそる、松之助は目をひらいた。

岩蔵と田村の躰は、入れかわってい、岩蔵は木太刀を正眼につけており、みごとに田村の打ち込みを躱したらしい。

この、田村のような奇襲を、岩蔵は数え切れぬほどに体験をしてきた。

その相手は、亡き師・日影一念であった。

いうまでもなく、そのたびに岩蔵は一念の木太刀に打ち据えられている。

立ちあがって、飛びはなれた途端に打ちかかるのは、打つほうにもそれだけの自信がなくてはならぬし、これを受けるほうにも層倍の力量がなくては、打ち込まれてしまう。

飛びはなれて、間合いをはかって、これから勝負という、その寸前に打ちかかって来る。

これは、飛びはなれた反動を利用して打ち込むわけだから、相手の力量をはかる以前のものといってよい。

白根岩蔵の大久保八郎は、田村邦四郎の木太刀が唸りを生じて自分の左頬をかすめるのを感じつつ、田村の斜め左へ飛びぬけていた。

田村は、日影一念ではない。

一念のときは、いかに飛びぬけても、肩や腕を打ち据えられていたものだ。

岩蔵に躱され、飛びちがって振り向きざま、またも、すかさずに打ち込もうとして、木太刀を振りかぶったが、

「む……」

一歩出た右足を引き、振りかぶった木太刀を、これも正眼につけた。

打ち込みかねたのだ。

それにしても、田村邦四郎の闘志は、まことに旺盛なものといわねばなるまい。

どよめきがしずまり、岩蔵と田村は正眼に木太刀をつけたまま、じりじりとまわりはじめ、約三間の間合いをたもち、両者の位置が入れかわった。すなわち、二人が飛びはなれたときの位置にもどったのである。

二人は、凝っと、うごかなくなってしまった。

これを見ている人びとのためいきのようなものが、たとえようのない一つの重苦しい音響となって試合場をみたし、また、しずかになった。

鳥飼松之助が、後に、

「半刻もたったかとおもわれました」

と、牛堀九万之助に告げたそうだが、その長い長い対峙の後に、またも攻勢に出たのは田村邦四郎であった。

田村は少しずつ間合いをせばめつつ、木太刀を上段に構えた。

上段の構えというのは、よほど、力量の差がないと危うい。

満身の気力で相手を圧倒しつつ、迫り寄って、上段の太刀を打ちおろす。

田村は、この上段の木太刀にすべてをかけたといってよい。

田村の裂帛の気合声と共に、試合場の空気が烈しく揺れうごいた。
白根岩蔵は気合声をたてなかった。
声をたてぬ岩蔵の躰が、襲いかかる田村の巨体へ、矢のように疾りかかるのを牛堀九万之助は見た。
異様な物音がした。
田村邦四郎の手をはなれた木太刀が、宙に躍った。
岩蔵は飛びはなれ、腰を沈めて木太刀を脇構えに移している。
審判・金子孫十郎の白扇は岩蔵の方へあがり、その勝ちをしめしていた。
田村の右腕が、見る見る赤くなってきた。
白根岩蔵の一撃を受けたからだ。
岩蔵は、勝った。

この日、白根岩蔵は全試合が終るまで、田沼邸内にとどまり、鳥飼松之助と共に牛堀九万之助を元鳥越の道場へ送ってから、島田屋敷へ帰った。
牛堀九万之助は、
「ようも、田村邦四郎に勝てたものだ」
むしろ、呆れ顔にいったところをみると、田村は相当な遣い手なのであろう。

老中・田沼意次は、この日の勝利剣客へ対し、金十両の賞金と時服をあたえた。負けた剣客へも、時服のみが贈られたという。

「向後も、精進をおこたらぬように……」

と、田沼老中は最後に短かい言葉で、剣客たちをはげました。

白根岩蔵は、牛堀道場で祝盃を受けてから、道灌山下の島田屋敷へ帰った。

すでに夜となっている。

屋敷の門の両側には高張提灯が立っていた。

玄関の灯も、あかるい。

門内へ入って行くと、

「大久保さま、お帰りでございます」

下男のだれかが、大声でいった。

すると、島田九兵衛が急ぎ足で玄関へあらわれ、

「めでたい、めでたい」

両手をあげ、岩蔵を迎えてくれた。

岩蔵が試合に勝ったという知らせが、すでに届いていたものとみえる。

奥の、ひろい座敷には、質素だが心のこもった宴席が用意され、奉公人一同も、そこへ居ならび、岩蔵の勝利を、祝ってくれるというのだ。

岩蔵は、感動した。
添書ひとつで身を寄せた自分に、島田九兵衛は、
（かほどまでに、親身となっていて下されたのか）
このことである。
女中の喜乃も、席にならんでいて、祝いの酒を岩蔵の盃へついだとき、わずかに微笑を浮かべ、頭を下げた。岩蔵はうれしかった。
「なかなかに、はげしい試合であったそうな」
島田九兵衛の耳へは、岩蔵の試合ぶりまで入っている。
「無我夢中でありました」
「それがよい。それでのうてはなりませぬ」
宴が終り、いったん、離れ屋へ引きあげた岩蔵は、ついて来た女中の喜乃へ、
「すまぬが、あるじどのへ、ちょっと、お目にかかりたいのだが……」
「はい、御都合をうかがってまいりましょう」
「たのみます」
喜乃は、すぐにもどって来て、九兵衛の返事を岩蔵につたえた。
島田九兵衛の居間へ行き、白根岩蔵は、あらためて礼をのべ、田沼老中から贈られた金十両と時服を出し、

「これは、いまの私には、どのようにあつこうてよいかわかりませぬ」
「さようか。よろし。私が、あずかっておきましょう」
即座に、九兵衛がいった。
いまの岩蔵は九兵衛に小遣をもらっているし、衣食住に全く不自由はない。
そこへ、二人の番頭が入って来た。
二人は、部厚い帳面や書類を抱えている。
これから九兵衛は二人を相手に、何やら仕事をはじめるらしい。
それと看て、岩蔵は居間を出た。
「いずれ、ゆるりと語り合いましょうな」
九兵衛が、居間を出て行く岩蔵の背へ声をかけた。
「は……何から何まで、かたじけなく……」
「いや、何の……」
離れ屋へもどり、喜乃の介添えで着替えをすますと、
「お風呂の仕度が、できておりますよ」
「さようか。では、いただこうかな」
「さ、どうぞ」
喜乃が、湯殿へ案内をしてくれた。

湯殿は、ひろびろと造られている。取り替えたばかりという浴槽は檜造りで、その香りが湯けむりと共にたちのぼっている。

（ああ、おれは何と、めぐまれた男なのだろう）

つくづくと、そうおもわずにはいられなかった。

角筈村を出てから今日まで、出合う人びとのほとんどが岩蔵に好意を寄せてくれ、その好意を受けるたびに環境がよくなり、しかも今日は、晴れの試合にも勝てた。

（このままで、よいのだろうか……）

岩蔵は、不安になってくる。

（だが、おれは、恩恵を受けた方々を偽わっている。これでよいのか……いや、よいはずはない）

そこへ、おもいがおよぶと、今日の勝利も素直によろこべぬ。

せめて、島田九兵衛のみへは、すべてを打ちあけてしまいたい。

そうしたなら、どれほど、

（気が楽になることか……）

自分の嘘を隠すために、また新たな嘘をつく。そうした嘘を重ねて行ったなら、

（おれは、どうなってしまうことか……）

岩蔵は熱い湯にひたり、両眼を閉じた。こうしたとき岩蔵の脳裡に浮かぶのは亡師・日影

一念と、成子雪丸の面影にきまっていた。

入浴を終えた白根岩蔵が、離れ屋へもどったのは五ツ半（午後九時）ごろであったろうか。

湯殿の窓から、小さな坪庭をへだてて、島田九兵衛の寝所の窓が見える。

窓には雨戸が締められているが、その隙間から灯は洩れていない。

しかし、寝所の向うの居間の灯は消えていなかった。

おそらく九兵衛と二人の番頭が、まだ居間にいて、帳面や書類を検討しているにちがいない。

「ほかに、御用はございませんか？」

離れ屋へもどった岩蔵へ、女中の喜乃が、いつものように尋ねた。

「いや、別に……今夜は、いろいろと面倒をかけてしまった」

「おめでとうございました」

「いや……何事も、この家のあるじどののおかげです」

喜乃は一礼し、去って行く。

岩蔵は、敷きのべられた蒲団へ身を横たえた。

枕元の〔有明行燈〕の淡い灯影の中で、岩蔵は目を閉じたが、どうも寝つけなかった。

いうまでもなく、当時は電灯などというものはない。そこで小型の〔有明行燈〕のような

淡い照明を絶やさぬようにしてあるのだ。
「ああ……」
蒲団の中で、岩蔵は深いためいきを吐いた。
何度も、寝返りを打つ。
この一年余の出来事、自分の姿……そして、角筈村の人びとや日影一念の顔がおもい起されてくる。
その上に今日は、晴れの試合に打ち勝ったという興奮もあり、勝った自分に酔いきれぬ不安もあって、いつになく、岩蔵は眠れなかった。
（眠らなくては……）
おもえばおもうほどに、寝つけない。
こうしたときの時間は、おもいのほかに速くすすむ。
そのうちに……。
岩蔵は、ようやく、うとうととしかけた。
だが、深い眠りへ落ち込む前に、はっと目ざめた。
目ざめた岩蔵の顔が、しだいに引きしまってきた。
（外に、妙な……？）
気配がする。

雨戸の外の庭の闇の中に、すぐれた剣客の感能のみが知る物の気配がするのだ。
白根岩蔵は半身を起し、枕元の脇差を手につかんだ。
（だれか……だれかが、庭にいる……）
この時刻に、もし人が庭にいるとなれば、怪しむべきことといってよい。
岩蔵は立ちあがり、音もなく、庭に面した雨戸へ近づいて行った。
（たしかに、だれかが、この離れ屋の近くにいる）
このとき岩蔵は、
（雪丸が、秘伝書を取り返しに来たのか……）
先ず、そうおもった。
けれども、よくよく考えてみれば、
（雪丸が、無断で他人の屋敷へ忍び込むはずはない）
のである。
（では、何者か？）
他におもい当るふしはなかった。
白根岩蔵は帯をしめ直し、脇差を帯してから次の間へ身を移した。
次の間をぬけて、廊下へ出る。
廊下には、母屋と離れ屋とをむすぶ〔渡り廊下〕への戸口があった。

渡り廊下へ出れば、雨戸が閉めてあるわけではない。
岩蔵は、少し考えてから、次の間の裏側についている掃き出しの窓の戸を開け、するりと外へ出た。ここは庭ではなく、石畳を敷きつめた通路になっている。
身を沈めて、岩蔵は離れ屋の裏側へ、まわった。
息をつめ、あたりの気配に神経をくばりつつ移動する岩蔵の目の前に、離れ屋の縁側に面した庭の一角があらわれてきた。
（いた……）
岩蔵は身を伏せた。
果して、庭の一隅に、怪しい者が潜んでいた。
それも、一人ではない。
少なくとも三人はいる。
闇に慣れた岩蔵は、その曲者たちが、自分の離れ屋を目ざしていないらしいことを知った。
彼らは、いましも庭からうごき出したところだ。
彼らは、母屋の方を目ざし、接近しつつある。
（はて？）
これは、どうしたことなのか。
母屋の灯は、すべて消えていた。

有明行燈の灯影など、外から見れば、消えているも同然といってよい。
曲者たちは、渡り廊下を右に見て、左へまわって行く。
もはや、うたがいもなく母屋を目ざしている。
と、また二つの人影が、母屋の方からあらわれた。
合わせて五人である。
彼らは、ひとかたまりとなり、何やらささやき合っていたようだが、また、母屋へ向ってうごきはじめた。
（あのやつどもは、この家のあるじどのを襲うつもりなのか？）
どうも、そうらしい。
岩蔵は、寝間着の裾をたくしあげた。
五人の曲者は、湯殿の外側から、島田九兵衛の寝所へ近づきつつある。
（さて、どうしたらよいか？）
大声をあげ、彼らに近づいて、追いはらうことはわけもないが、それでよいのかどうか、だ。
このとき、白根岩蔵が想起したのは、十余年前に角筈の名主屋敷へ盗賊どもが押し込んだとき、日影一念がとった行動であった。
あの一念と同じようには、

（到底、かなわぬこと……）

であるにせよ、五人の曲者のうちの一人だけは捕えておかねばなるまい。

また、名主屋敷のときとは情況がちがう。

あの折、雪丸の急報により、日影一念が異変を知ったのは、盗賊どもが屋敷内へ潜入した後であった。

それにしても、

（この曲者どもは、盗賊なのか？）

島田九兵衛が〔金貸し〕であれば、それも不思議ではない。

土蔵も邸内にあるし、岩蔵は見たことがないけれども、母屋の内には金蔵もあると看てよい。

（屋敷内に、手引きをした奉公人がいるのだろうか？）

それも、まだ、わからなかった。

闇の中のことゆえ、はっきりとはわからぬが、曲者どもは足ごしらえも厳重に、いずれも身軽な姿をしているようだ。

（もはや、様子を見てはいられぬ）

岩蔵は決断をした。

曲者どもが屋内へ入ってから、自分が出て行ったのでは遅いのである。

そうなると、屋内で怪我人がでる。何が起るか知れたものではない。
白根岩蔵は、寝所へ近づきつつある曲者の背後へ微風がながれるように接近し、いきなり、曲者の一人の肩を軽く叩いた。
曲者は愕然と振り向き、その瞬間に岩蔵の拳を胸下にくらって、
「うわ……」
前のめりになった、その襟元を引き、岩蔵が右へ躰を入れ替えながら、念のために頸部を手刀で打ち据えた。
これがすべて、一瞬の内におこなわれた。
よろめくこやつを蹴飛ばしておいて、
「おのれら、盗賊か!!」
大声を張りあげた。
同時に飛び込んだ岩蔵が、国貞の脇差を抜き打った。
「わあ……」
一人が、横ざまに倒れる。
岩蔵は抜き打つと共に、刃を返しておいたから、こやつは失神したにすぎない。
曲者どもは、岩蔵の奇襲に仰天してしまった。
「逃げろ」

だれかが叫ぶと、岩蔵へ立ち向うこともせず、三人とも、いっせいに逃げ出した。その速いことは、さすがの岩蔵が呆れたほどである。

岩蔵は、追うのをやめた。

曲者二人は、まだ気絶をしたままであった。

母屋の雨戸が数ケ所で開き、奉公人の声がきこえはじめた。

島田九兵衛が、寝所から庭へ姿をあらわしたとき、曲者二人は下男たちによって縄をかけられ、居間の前庭の大銀杏の根元に引き据えられており、奉公人たちの提灯が、そのまわりを囲んでいた。

曲者は二人とも、黒ずんだ着物の裾を高くからげ、腰には脇差一振を帯し、黒足袋はだしであった。

布で面体を隠していたのだが、これは下男たちが拐り取ってしまった。

二人とも小柄で、猿のような顔をしている。

九兵衛は、白根岩蔵から様子を聞きながら、さも興味ありげに曲者たちの顔をながめていた。

「それはそれは、まことに、御苦労をかけましたな」

九兵衛は、岩蔵へ軽く頭を下げ、

「それにしても、この二人を生け捕って下されたのは、さすがに大久保どのじゃ。九兵衛、

感服いたしてござる」
「いえ、残る三人は取り逃してしまいました」
奉公人たちは、感嘆の眼ざしを岩蔵へ向けている。
「これ、二人の者」
と、九兵衛が曲者たちへ、
「お前たち、だれにたのまれたのじゃ？」
返事は、なかった。
二人とも、うなだれたままである。
「いわぬなら、それもよし」
九兵衛は、ひとりうなずいていたが、下男たちへ、
「この二人を、押し込めておきなさい」
おだやかにいった。九兵衛は落ちつきはらっている。
曲者二人が引き立てられて行った後、岩蔵は、
「では私、これにて……」
「おお。明日は牛堀道場へお出かけか？」
「いえ、このような、物騒なことがありましては……」
「いや、わしのことなら大丈夫じゃ。大久保どのは牛堀先生へ、あらためて、今日の御礼を

のべにまいらなくてはいけませぬ」
「はい。なれど……」
「こちらのことは案ずるにおよばぬ。だが、大久保どの」
九兵衛は、にっこりとして、
「昼のうちは大丈夫なれど、夜が物騒じゃ。どうか、早めに帰って来て下され」
と、いうではないか。
（あるじどのは、おれのようなものを、たよりにして下さる）
岩蔵は、うれしくなった。
「承知いたしました」
「あの曲者どもは、町奉行所で調べてもらいましょう」
幕府の老中と親しいほどの島田九兵衛だから、町奉行所の手を借りることなど、わけもないのであろう。

翌朝、まだ暗いうちに目ざめた白根岩蔵は、牛堀道場へおもむくための身仕度をしていると、九兵衛の老番頭・駒次郎が離れ屋へあらわれた。
この老人は通いの番頭で、近くの千駄木町に家をもち、妻子もいるそうだが、たまたま昨夜は九兵衛との相談が長引き、屋敷に泊ったのである。

「大久保先生……」
と、駒次郎は白根岩蔵のことをよんで、
「昨夜は、どうも大変なおはたらきで、一同、恐れ入りましてございます」
まんざら世辞でもなく、駒次郎は岩蔵の腕前を見て、びっくりしたらしい。
「いや、相手が弱すぎたのでありましょう」
「なかなか……」
くびを振った駒次郎が、抱えて来た包みを出し、
「これは、あるじから牛堀先生へ、お届けをしてくれとのことでございます。中に、あるじの手紙が入っておりますそうで」
「さようか……」
島田九兵衛は、まだ牛堀九万之助（くまのすけ）に会ったことはないが、岩蔵が道場へ通うようになったと聞き、すぐさま駒次郎を牛堀道場へさしむけ、しかるべく挨拶（あいさつ）をしてくれた。
この包みの中には、おそらく、岩蔵が昨日の試合に勝ったことへの礼状と、御礼の品が入っているのであろう。
「かたじけのうござる」
岩蔵は、その包みへ向い、頭を下げてから、
「昨夜の曲者どもは、いかが相なりましたか？」

「きびしく、閉じ込めてございます」
「今日は、町奉行所へ引き渡すとか、あるじどのに聞きおよびましたが……」
「はい、はい」
「私からも、昨夜の様子を申しのべなくてはなりますまい。今日は外出をせぬほうがよいのでは？」
「いえ、おかまいなくと、あるじは申しております」
「さようでござるか」
「昨夜の様子は、つぶさに、大久保先生よりあるじがうけたまわっておりますゆえ、何事も、あるじより申しのべれば、じゅうぶんでございます」
岩蔵にしてみれば、先ず何よりも、町奉行所の役人へ自分から様子を語らねばならぬと考えていたのだが、どうやら、その必要はないらしい。
岩蔵は、ほっとした。
自分にも後ろめたいところがあるのだから、なるべくならば、町奉行所などへは関わりたくない。
島田九兵衛も、おぼろげながら、岩蔵の、そうした胸の内を見とおしているのではあるまいか。
「あるじどのは？」

「まだ、ぐっすりと眠っておられますよ」

牛堀九万之助は、岩蔵が届けた包みを奥の居間でひらき、手紙も読んだが、その後に道場へあらわれ、いましも稽古をはじめようとしていた岩蔵をよび、

「島田九兵衛殿より、おぬしの身柄について、くれぐれもよろしくとたのまれた」

「さようでございましたか」

「立派な人らしいな」

「はい」

「おぬし、九兵衛殿の御恩を忘れてはなるまいぞ」

「決して、忘れませぬ」

つぎつぎに道場へあらわれる門人たちが、岩蔵の昨日の勝利を祝ってくれた。

岩蔵は昨夜の異変を、牛堀九万之助へは語らなかった。

昨夜、島田九兵衛に、

「このことは他言無用」

念を押されていたからである。

この日、岩蔵は早めに稽古を切りあげ、まだ空が明るみを残しているうちに、島田屋敷へ帰った。

屋敷内は、別段に平常と変わりはない。
島田九兵衛も二人の番頭を連れて外出をしている。
「曲者どもは、どうなりましたか？」
岩蔵が、女中の喜乃へ尋ねると、
「町奉行所から人が来て、引き取って行きました」
「さようか……」
屋敷内は、格別に警戒をしているようでもなかった。
着替えをすませた岩蔵は裏手へ出て、物置小屋へ入った。
小屋の屋根に音がする。落葉が降り落ちてくるのだ。
物置小屋の中には、薪のほかに、さまざまな木材が入っている。その中から長さ四尺ほどの桜材をえらび、離れ屋へもどると、岩蔵は短刀を出して、削りはじめた。
少し削ると、手ごろな棍棒になった。
縁側で削っている岩蔵を、庭の向うへ姿を見せた喜乃が凝っと見まもっている。
目をあげた岩蔵がそれに気づくと、喜乃はわずかに頭を下げてから、母屋の方へ去って行った。
夕餉のときに、岩蔵が喜乃へ、
「あるじどのは、もう、お帰りか？」

「今夜は、遅くなるとのことでございますよ」
とのことだ。
「夜遅くまで、何処におられるのか知らぬが、危いことだ。昨夜の今夜なのだからな」
急に、岩蔵は気になりはじめた。
他人のことで、このように心配するのは、日影一念が重病にかかって以来のことだといってよい。
夕餉の後、入浴をして、喜乃が夜具を敷きのべ、
「おやすみなさいまし」
去った後で、白根岩蔵は身仕度にかかった。
岩蔵は角筈を出奔したとき、身につけていた股引を取り出した。洗いざらしの木綿製のもので、ところどころに岩蔵が自分で針を持ち、つくろったあとがいくつもある股引であった。
股引をはき、帯をしめ直した。寝間着には着替えず、しっかりと裾をからげて帯へはさんだ。
脇差と、先刻の棍棒を傍へ置き、行燈の火を吹き消し、有明行燈のあかりのみにしておき、岩蔵は蒲団の中へ入った。
入ったが、ぐっすりと眠るつもりはない。
奉公人たちも、今夜は格別に戸締りを厳重にし、眠るのも交替にするらしい。

それにしても、あるじの島田九兵衛は、大胆な老人といわなくてはなるまい。

先刻、夕餉のときに岩蔵は、喜乃へ、

「昨夜のようなことが、前にもあったのだろうか？」

訊いてみたが、喜乃は、

「さあ……」

くびをかしげたのみである。

（あれほどのお人ゆえ、いざというときの逃げ道は、用意してあるにちがいない）

それにしても、油断は禁物だ。

当分の間、岩蔵は危急にそなえ、自分なりの警戒をするつもりであった。

夜半に近くなり、島田九兵衛が屋敷へ帰って来た。

通いの番頭・駒次郎は千駄木の自宅へ帰ったらしく、別の番頭で邸内に部屋をもらい、起居している伊助が九兵衛の駕籠へ附きそっていた。

門のあたりで声がする。下男が二人ほど、門の外と内に詰めていて、あるじを迎えたのであろう。

岩蔵は、うとうととしながらも眠りこけるようなことがなく、朝を迎えた。

すぐに寝間着に着替え、蒲団へもぐり込み、半刻（一時間）ほど、ぐっすりと眠った。

若い岩蔵にとって、これほどのことならば、たとえ一ケ月つづいても、大丈夫なのである。

顔を洗い、湯殿で、音がせぬように水を浴びてから離れ屋へもどった。
朝餉の膳を運んで来た喜乃が、
「昨夜は、御苦労さまでございました」
深く頭をたれたのは、岩蔵が密かに見張りをしていたことを知っていたのか……。
岩蔵は、口ごもりつつ、
「だれにも、いわぬように……」
「はい。心得ております。ですが先生……」
「あ……？」
「おかげさまで、私、安心して、眠りましてございます」
「さようか……」
「ありがとうございます」
「いや、別に……」
喜乃は、岩蔵が棍棒を削っているのを見かけて、すべてをさとったのであろう。
ところで……。
この日、牛堀道場へおもむいた白根岩蔵に、おもいがけぬことが待ち受けていた。
牛堀道場へ到着した白根岩蔵が、控え所で稽古着に着替えていると、鳥飼松之助が顔を見

せ、
「牛堀先生が、およびです」
と、告げた。
「わかりました。先生は道場におられますな？」
「いえ、いま、お居間のほうへ……」
「さようか」
「稽古着のままで、よろしいそうです」
「はい。では……」
すぐに岩蔵は、牛堀九万之助の居間へおもむいた。
「おはようございます」
「おお。ま、入れ」
「は……」
「島田九兵衛殿へ、よろしゅう、つたえてくれたか？」
「昨夜は、お目にかかりませんでしたので、今朝がたに、おつたえいたしました」
「うむ。ところで、明日は躰があいているかな、どうじゃ？」
「私の？」
「さよう」

「稽古のほかには、別に……」
「それはよかった。実は、な……」
「はい？」
「神田の紺屋町に、奥山念流の道場をかまえる水野鉄斎という人がおられて、わしも、親しくいたしておってな」
「はあ……」
「鉄斎殿の本名は、百助といわれて、当年六十二歳になられる」
いったい、牛堀九万之助は何をいい出すつもりなのか……。
「おぬしは、よう知らぬとおもうが、江戸で奥山念流の水野道場といえば、流儀は同じなれど、この九万之助の道場とはくらべものにならぬと申してよい」
「……」
まだ、九万之助の胸の内がわからぬ。
「門人には旗本の子弟も多く、先ずは立派な道場なのだが……」
いいさして、九万之助は沈黙したが、すぐに、
「その水野鉄斎殿は、一昨日の試合場にもまいられ、はじめから終りまで、つぶさに試合を見て行かれたが、その折、おぬしの試合ぶりを見て、何とおもわれたか、おぬしに会いたい、会わせてくれぬか、と、いうてよこされたのだ」

「牛堀先生にでございますか？」
「さよう。どうだ。会うてみる気があるか？」
鉄斎・水野百助については、白根岩蔵は何も知らぬ。
水野鉄斎は、上州・前橋在の出身だそうな。ならば、同じ上州出身の牛堀九万之助（うしぼりくまのすけ）とは同郷といってよい。しかも鉄斎は、農家に生まれたというから、それが江戸で、名の通った道場をひらくまでには、相当の苦労を重ねたにちがいない。
また、鉄斎の修行も一通りのものではなかったろう。
（水野鉄斎先生は、おれと同じ、百姓の出なのだ）
牛堀九万之助の言葉を聞き、岩蔵は、先ず、その一事に親近感をおぼえたのである。
それにしても、水野鉄斎が岩蔵に会いたいというのは、
（いったい、どのようなことなのだろう？）
どうも、わからぬ。
牛堀九万之助も、
「それは、わしにもわからぬことだ」
といったが、どうも何かを知っているらしい。
「どうだ、会ってくれるか？」
「何のことか、ようわかりませぬが、私も、ぜひ、お目にかかりたいとおもいます」

「そうか、よし。それでは明日、稽古を終えた後で、此処に残ってくれ。それでよいな？」
「何事も、牛堀先生に、おまかせをいたします」
この日、島田屋敷へ帰っても、何故か、白根岩蔵は興奮がさめなかった。
（百姓の家に生まれても、水野先生のように、江戸で、立派な道場をひらいた方もおられるのだ）
このことが、岩蔵の胸を躍らせる。
島田九兵衛は、この日、外出をしなかったらしい。
そこで、九兵衛の居間へ行き、
「ただいま、もどりました」
挨拶をすると、九兵衛は書類を見ていた眼鏡をはずし、岩蔵の顔を見つめ、無言のまま、軽く頭を下げた。何か、それが、いつもとはちがう。その頭の下げかたには、あきらかに感謝の念がこもっている。
もしやすると、女中の喜乃が、昨夜の岩蔵が曲者侵入にそなえて身仕度をし、ろくに眠っていないことを、九兵衛へ告げたのであるまいか。
「実は、本日、牛堀先生より、かようなことをうけたまわりまして……」
と、岩蔵が、水野鉄斎に面会することを告げるや、
「それは何より。顔がひろくなって結構なことじゃ」

島田九兵衛は、大いによろこんでくれた。

白根岩蔵は、この夜も昨夜と同様に身仕度をして、曲者にそなえた。

岩蔵のように、剣術に鍛えぬかれた若い肉体は、こうした夜が、たとえ一ケ月つづいたとしても平気である。

無事に朝を迎え、ひと眠りした岩蔵が洗面をすませて離れ屋へもどると、女中の喜乃が、

「旦那様が、これを、お召しになるようにと……」

稽古着のほかに、田沼邸での試合の折に身につけて行った木綿の紋付きをそろえてくれた。

岩蔵が、水野鉄斎と面会することを考えてのことであろう。

「これは、おそれ入る」

「今夜は、おもどりになるまで、奉公人一同が総出で、お屋敷をまもっておりますゆえ、どうか、ごゆるりとなさいまして」

「おお。さようか」

気にかかっていただけに、岩蔵はほっとした。

これも、岩蔵のすることを無にしてはならぬという、島田九兵衛の心くばりらしい。

稽古着は、毎日のように、喜乃が洗ってくれる。

「ちょっと、髪を……」

こういって、喜乃が、岩蔵の背後へまわった。
喜乃は、岩蔵の総髪の髷を、うまく結いあげてくれる。島田九兵衛も、自分の髪の手入れを喜乃にさせているらしい。
髪といえば、角筈の日影道場にいたころ、白根岩蔵と成子雪丸は、たがいに髪を結い合ったものだ。そのことをおもうにつけ、
（今回も、水野鉄斎先生に対し、おれは、大久保八郎の名前で通さなくてはならぬのか……）
気が重くなってくるのを、どうしようもなかった。
島田九兵衛は、今日も外出をしないようだ。
岩蔵は九兵衛に挨拶をして、牛堀道場へおもむき、稽古に熱中した。
牛堀道場では、七ツ（午後四時）をまわるころには、すべての門人の稽古が終る。夏の季節は稽古の時間が延びるのだ。
稽古を終え、裏の石井戸の傍で水を浴びてから、岩蔵は紋服に着替え、道場に接した控え所で待っていると、七ツ半ごろになって、老僕の権兵衛が、
「先生が、よんでいなさる」
と、迎えに来た。
牛堀九万之助は、母屋の居間にいて、

「さ、こちらへまいるがよい。間もなく、水野鉄斎殿が見えるであろう」
そういったとき、母屋の玄関に、訪う人の声がした。
供も連れずに訪ねて来たのは、水野鉄斎であった。
六十二歳になるという水野鉄斎だが、十歳は老けて見える。
顔色が、灰色に沈みきってい、鼻下と顎の白い髭に埋まった唇は白く乾いていた。
長身の体軀だが、肉が落ちて、
（まるで、亡くなられる前の、日影一念先生そのままだ）
と、白根岩蔵は感じた。
ただ、鉄斎の両眼のみは光りを帯びていて、岩蔵へ向ける眼ざしは、いかにもやさしげである。
白い髪は後ろへたらしたままで、これも日影一念そっくりなのだ。
老僕の権兵衛が、手料理を運んで来た。
豆腐とか芋とか、干し魚を焙ったものとか、鶏肉を入れた味噌汁とか、格別の馳走ではないが、なかなかにうまい。
水野鉄斎は、ほとんど箸をつけなかったが、味噌汁のみを、
「これはよい」
きれいに、たいらげた。

酒は一口ものまぬ。

「いや、もう、のめぬようになってしもうて……」

と、鉄斎は苦笑を洩らした。

鉄斎は何やら重い病気にかかっているらしい。

岩蔵は、鉄斎の問いかけにこたえ、胸の底に疚しさをおぼえながらも、牛堀九万之助へ語ったとおりのことをはなした。

鉄斎は、あまりにくどい質問はしなかった。

白根岩蔵が、一所懸命に修行を積み、いずれは江戸で道場をかまえたいという希望を聞いたとき、水野鉄斎は、さも、うれしげに笑った。低いが、子供のように無邪気な笑い声なのだ。

水野鉄斎が牛堀道場にいたのは、半刻（一時間）にみたなかった。

何のために会いに来たのか、それも、はっきりとはしないのだが、さも、満足そうに鉄斎は帰って行った。

牛堀九万之助が鉄斎を見送りに立ったとき、岩蔵も立ちあがりかけたが、九万之助は、

「ここにいるように……」

と、目顔で示した。

やがて、居間へもどって来た牛堀九万之助が岩蔵に、

「見たか？」
「は？」
「鉄斎殿が、重い病にかかっておられることをじゃ」
「はい。そのように、私は見受けました」
「ま、今夜は、ゆるりとのもう。実は、おぬしにたのみがあるのだ」
「……？」
牛堀九万之助のたのみというのは、白根岩蔵にとって、それこそ、（夢にも想わぬ……）ことであった。
これは、九万之助のたのみというよりも、ほかならぬ水野鉄斎が、牛堀九万之助を通じてのたのみだったのである。
その、たのみごとは何か……。
何と、鉄斎は、
「大久保八郎殿を、自分の跡つぎとし、わが道場をゆずりたい」
と、いい出たのだ。
はじめ、岩蔵は九万之助が冗談をいっているのか、と、おもったが、そうではなかった。
鉄斎も九万之助も本気なのだ。

岩蔵は、頭へ一度に血がのぼり、咄嗟に言葉も出なかった。
「どうだ。たのみをきいてくれるか？」
「……」
「不承知か？」
「なれど、牛堀先生。私ごときに……」
「謙遜しているのか？」
「は……」
「いや、そうではあるまい」
「……」
「謙遜を口に出す者の腹の底には、強い自信があるものだ。ちがうか？」
困った。
こたえるすべもない。
ずばりと、九万之助に指摘されると、
「そうではありませぬ」
と、いいきれぬものが、このときの白根岩蔵にはあった。
「ま、よい」
笑いながら、牛堀九万之助が岩蔵の盃へ酌をしてくれて、

「さ、もっと、のまぬか」
「はあ……」
酒は喉を通ったが、味がしなかった。
「なれど、何故に水野先生は、私ごときものを？」
「そのことは、鉄斎殿に尋ねるがよい。おぬしは鉄斎殿に好意を抱いた、とわしは看たが、ちがうか？」
「おっしゃるとおりでございます」
「ならば、鉄斎殿の養子になったつもりで、道場を引き受けてあげるがよい。鉄斎殿の余命は、この後、いくばくもないのだ。それは、おぬしもわかったはず」
ここで、九万之助は、はなしを中断して権兵衛をよび、味噌汁をあたためなおさせた。水野鉄斎が、ほとんど食べなかったので、九万之助も岩蔵も腹が空ききっている。
食事を終えてから、牛堀九万之助は、またも、酒の仕度をさせ、
「のみ直しだ」
「いただきます」
酒の味が、岩蔵の舌へもどってきた。
牛堀九万之助によれば、
「鉄斎殿も、おのれの死を覚悟している」

とのことだ。

鉄斎に、妻子がいないことは、すでにのべた。はじめのうち、水野鉄斎は自分の死後のことは、いっさい念頭に置かず、世を去るつもりでいた。

子がなければ、門人のうちから後継者を選べばよいわけだが、水野道場の場合、これが、なかなかにむずかしい。

水野道場の門人の中には、大身（たいしん）の旗本の子弟が多い。

剣術の力量も同じような門人が、二派に別れている。水野鉄斎としては、自分の死後、この二派の確執が深くなることをおそれていた。

それならば、鉄斎自身が、後継者を選ぶべきだが、いまのところ、

「これぞ……」

と、おもう門人がいないというのである。

（ま、よいわ。近く、この世を去るわしゆえ、後のことは、どうにでも好きなようにせよ）

諦観（ていかん）していた折も折、田沼邸の試合で、白根岩蔵を見たのであった。

岩蔵の大久保八郎が試合に勝った瞬間、水野鉄斎は直感的に、

（これだ!!）

われ知らず、膝（ひざ）をたたいていた。

（この男に、わが道場をゆずりわたそう）

水野道場には、諸家の奉公人で、身分の低い門人が、近ごろは少なくない。彼らは、それぞれの主人の理解のもとに、勤務の余暇を利用し、稽古に通って来る。

身分が低いだけに、彼らは熱心に稽古をする。

水野鉄斎が世を去るにあたり、もっとも心にかけているのは、この身分の低い若者たちのことだ。

大名家に奉公をする足軽もいる。旗本屋敷の中間もいる。彼らが、道場の中で、他の門人たちから軽く見られていることも、鉄斎は知っていた。

鉄斎が育てあげて、道場をゆずりわたすつもりでいた二人の門人は、一人が死んでしまい、一人は旗本の養子となり、いまは幕府の御役目についている。

これが、一昨年から去年にかけてであり、水野鉄斎にしてみれば、

（おもいもかけぬこと……）

であったのだ。

一人は病死してしまったのだから仕方もないし、一人は旗本の三男として、出世をしたことになるのだから、これをとどめるわけにもまいらぬ。

その間にも鉄斎の病気は重くなる一方であった。おそらく、躰の何処かに癌ができていたのであろう。

水野鉄斎は、

「大久保八郎殿が道場を引き受けてくれるならば、道場の運営はすべて、大久保殿におまかせいたす」

と、牛堀九万之助にいったそうな。

田沼邸の試合に初出場して勝利を得たといっても、白根岩蔵の大久保八郎は、江戸の剣術界においては、まったく無名の一剣客にすぎぬ。

このような男を、前もって、門人のだれにもはかることなく、水野鉄斎は自分の後継者に決めようとしているのだ。

当然、門人たちの中というよりも、その大半が、これに反対をするだろうが、そのような門人は、

「わが道場より去るがよい」

鉄斎は、そこまで考えぬいてのことであった。

その後で、新しい道場主の大久保八郎を、頭にいただく門人たちのみが残ればよい。

おそらく、身分の低い門人たちは、

「ほとんど、残るものとおもわれます。その数は三十人ほどなれど、大久保殿は先ず、ここのところより始めていただきたい」

鉄斎は、自分が苦労して、ここまでにした道場だけに、自分が「これぞ!!」と見込んだ人物が後継者となってくれれば、うれしいのが当然であろう。

「そうなってくれれば、もはや、この世に何一つ、おもい残すことはござらぬ」
牛堀道場を去るとき、見送りに出た牛堀九万之助へ、水野鉄斎は、
「大久保殿が、拙者の胸の内をわかって下され、道場を引き受けてもよいとおもわれるならば、明後日の朝、拙者の道場へまいられ、様子を見ていただきたいと存ずる」
こういった。
「どうだ、行ってみるか？」
と、牛堀九万之助。
「私で、かまわぬでしょうか？」
「おぬしが決めることではないか」
「牛堀先生は、何とおもわれますか？」
「さようさ……おぬしは、まだ若い。やり直しはいくらでもきく。せっかくに鉄斎殿が見込んでくれたのだから、おもいきって、引き受けてみたらどうだ」
「はあ……」
「ま、今夜、ゆっくりと思案してみよ。おぬしが世話になっている島田九兵衛殿にも相談をしなくてはなるまいし、な」
「そのつもりでおります」
「わしは、おぬしならば、何とか、やって行けるようにおもう」

「さようでしょうか？」

牛堀道場を出てから、島田屋敷へもどるまで、白根岩蔵は自分の、あまりの運のよさに呆れるほどであった。

島田屋敷へ帰ると、九兵衛は今日も屋敷内に引きこもっていた。

すぐに九兵衛の居間へ行き、挨拶をして、今夜の一件を報告すると、

「おやりなされ、おやりなされ」

島田九兵衛は双手をあげて賛成をしてくれた。

「およばずながら島田九兵衛、何かとちからになれましょう。やってみて、どうしてもいかぬとなれば……さよう、牛堀先生のいわるるとおり、また何度でも、やり直しをなさればよい」

「かたじけなく存じます。そのようにいっていただくと、何やら元気が出てまいりました。これからも、何かにつけて、御相談をいたしますが、かまいませぬか？」

「よいとも、よいとも」

離れ屋へもどると、女中の喜乃が、盆の上へ雑炊の仕度をしてあらわれた。

「夜も更けました。いかがでしょう？」

「いただきます。どうも、腹が空いて……」

「何ぞ、よいことがあったのではございませぬか？」

「え……」
「お顔に出ておりますよ」
「さあ……よいことか、どうか、まだ、わからぬ」
雑炊を食べ終え、喜乃が引き下ってから、岩蔵は、今度も例の身仕度にかかりつつ、
（そうだ。水野道場へ移るようなことになれば、島田九兵衛殿の身辺を、おまもりすることができなくなる……）
ことに、おもいあたった。道場主ともなれば、この屋敷から通うわけにはまいらぬ。
（そのことについては、何ぞ、よい法を考えなくてはなるまいが……いま一つ、もはや、この上、島田九兵衛殿を偽っているわけにはまいらぬ。何も彼も九兵衛殿だけには打ちあけてしまわぬと、これより先、何事も相談をすることもかなわぬ。九兵衛殿は、むろんのことに怒られようが、そうなったら、水野道場を引き受けることなど、とても、おれにはできぬ）
ついに岩蔵は、決意をかためるにいたった。
（秘伝書を奪って逃げたことも、何も彼も、打ちあけてしまおう）
このことであった。
この決意は、朝になっても変わらなかった。
喜乃の給仕で朝餉を終えてから、岩蔵が、
「あるじどのは、まだ、おやすみであろうな？」

「はい。明けがた近くまで、起きておいでのようでございましたから……」
「うむ。あるじどのが、お目ざめになったら、知らせていただきたい」
「道場のほうへは？」
「それが、すんでからにします」
島田九兵衛が目ざめたのは昼近くなってからで、入浴の後に、朝昼兼帯の食事をした、そのとき、喜乃が岩蔵のことをはなしたらしい。
離れ屋へ、岩蔵の昼餉を運んで来た喜乃が、
「お昼を、おすませになったら、いつでも、よろしいときにと、あるじが申しております」
「さようか。かたじけない」
岩蔵は箸をとったが、食べるものは味がしなかった。
これから九兵衛に告白することをおもうと、胸が重苦しくなり、食欲も失せて、ようやくに一杯の飯を食べ終えた。
その岩蔵の様子を見て、喜乃は何もいわずに、膳を片づけ、立ち去った。
こうした場合には、よけいなことを決して口に出したりすることがない喜乃であった。
ゆっくりと茶をのみ、いくらか気がしずまってから、白根岩蔵は、島田九兵衛の居間へおもむいた。
「今日は、稽古をやすまれたそうですな？」

「いえ、これより……」
「道場へまいられるか？」
「は……」
「それならば何の御用か、早速に、うけたまわりましょう」
「は……」
「どうなされた？」
「このように、身内もおよばぬ御世話になりながら……私は……あの、私は……」
とぎれとぎれにいいながら、胸が一杯になり、われにもなく岩蔵は、男泣きに泣き出してしまった。
その態を、島田九兵衛は微かな笑みをたたえ、凝っと見まもっていたが、ややあって、
「さ、泣くのはおやめなされ」
「は……見ともない姿を、お目にかけまして……」
「何、かまわぬ。男というものは、泣くべきときには泣くものでござるよ」
と、九兵衛の口調があらたまった。こうなると姿は町人でも、島田九兵衛は侍そのものになる。
「申しにくいことなれば、今日でなくとも、後にゆるりとうかがおうか？」
「いえ、決心してまいりましたゆえ、ぜひともお聞き下さい」

「では、申されるがよろしい」
「実は私、以前は角筈村に道場をかまえておられた、日影一念先生の許で、長らく修行をいたしておりました」
「うむ。そのことは、大坂の柳嘉右衛門殿の添書にも、したためてありました」
やはり、そうだったのである。
「いえ、そのことのみではありませぬ」
「そのほかにも、何ぞ？」
「私は、名前を偽っておりました。私の、実の名は、白根岩蔵と申します」
九兵衛は、銀の煙管へ煙草をつめながら、
「この世に、偽名、変名のことは、よくあることじゃ」
事もなげにいうではないか。
「そ、そればかりではありませぬ」
「まだ、ござるのか？」
「は、はい」
「それは？」
「私は、あの……盗みをはたらいたことがございます」
「ほう……これは、よくあることだとは申せぬな」

「実は……」

と、白根岩蔵は、亡師の遺言にそむき、秘伝書一巻を盗んで逃げたことを包み隠さず、九兵衛へ打ちあけた。

打ちあけ終えると、岩蔵は、重い苦しい荷物をおろしたような解放感にひたり、しばらくはぼんやりとして、九兵衛の顔をながめていた。

「これ……これ、大久保殿。いや、ちごうた。白根岩蔵殿」

九兵衛によびかけられ、岩蔵は、はっと夢からさめたようになった。

九兵衛は、笑っている。

怒ってはいないのである。

「ようも、素直なこころになり、打ちあけなされた」

「は……これまで、みなさまを騙してまいって、まことに申しわけ……」

「たしかに、よいことだとは申せませぬな。なれど、いまこのとき、すべてを打ちあけられたこころに免じ、これまでのことは忘れましょう。なれど、九兵衛は忘れても、他のかたがたはいかがなものか……」

「さっそくに手紙を書き、大坂の柳先生、佐倉の笠井先生に、お詫びを申しあげ、牛堀先生には今日にも打ちあけます」

「待たれよ、白根殿」

ぽんと灰吹きへ煙管を落した島田九兵衛が、
「このことは、二、三日の間、九兵衛が思案してみましょう」
と、いったのである。
「では、私を、おゆるし下さいますか？」
「ゆるすもゆるさぬもない。いまさら、仕方のないことじゃ、この上は、その秘伝書とやらを、一時も早う、返すがよろしいな」
「はい。そういたします」
それから間もなく、白根岩蔵は牛堀道場の稽古に出て行った。
牛堀九万之助から、
「今日は遅いな」
声をかけられたときは、さすがに後ろめたい気がしたけれども、島田九兵衛へ打ちあけただけに、岩蔵の胸の閊えは軽くなっていた。

再会

この年も押しつまった、十二月十日の午後も遅くなってから、角筈村の旧日影一念道場を訪れた女がいる。

齢のころは四十三、四というところか。

「私は、以前、こちらにおいでの白根岩蔵さまのお使いでまいった者でございます」

と、女はいった。

この女は、島田九兵衛の屋敷にいて、岩蔵の身のまわりを世話している女中の喜乃であった。

折しも、成子雪丸は道場にいなかった。名主の本郷庄左衛門が風邪をひいて寝込んだので、その見舞いにおもむいていたのだ。

道場には、三人ほどの門人がいて、まだ稽古をしていたが、喜乃は母屋へ向った。

喜乃のおとなう声を受けて、あらわれたのは、雪丸の妻さとである。

さとは、すぐさま、名主屋敷へ行き、雪丸に知らせようとしたが、喜乃は、
「それにはおよびませぬ」
「なれど……」
「いえ、成子雪丸さまが、もしも御不在の折は、このお手紙をあなたさまへおわたし下さるようにと、白根岩蔵さまは申されてでございました」
喜乃はそういって、一通の手紙をさとの前へ置き、
「よろしゅうおつたえ下さいませ。では、これにて……」
「まあ、それでは、あるじに叱られまする」
「いえ、さようなことはございませぬ」
「それで、いま、岩蔵さんは何処においでなので？」
「そのことも、お手紙にしたためてあるとのことでございます」
喜乃は、はやばやと辞去した。間もなく、雪丸がもどって来て、
「何、岩蔵どのからの手紙だと……」
さすがに、顔色が変わった。
雪丸は、一気に手紙を読み終え、二度三度と読んだ。
さとが、もどかしげに、
「な、なんと、書いてありますか？」

「やはり、私がおもうていたとおりだ」
うれしげに、雪丸がいう。
「では、やはり江戸に？」
「島田九兵衛という人の屋敷に住み暮しているらしい。この手紙を届けてくれたのは、その屋敷の女中どのらしい」
「それで？」
「秘伝書一巻を、返したいといってよこしたのだ」
「まあ、よかったこと」
手紙は短かいもので、明後日の七ツ（午後四時）に、熊野権現（くまのごんげん）の境内で秘伝書を返したいから、雪丸ひとりで受け取りに来てくれと、したためてある。
恩師・日影一念の遺言にそむき、秘伝書を奪って出奔しただけに、成子雪丸にも角筈村の人びとにも、
「顔向けがならぬ自分となってしまった……」
と、白根岩蔵は素直な手紙を書いてよこした。
「よいか、さと。この手紙のことを、だれにもいうてはならぬぞ」
「でも、名主さまにだけは、申しあげぬと……」
「それはそうだが、秘伝書がもどってからでよい」

名主の本郷庄左衛門は、いまも、奉公人の富太郎や、そのほかにも二人ほどを交替で江戸へさし向け、岩蔵を探させているのだ。

ゆえに、名主の耳へだけは、このことを入れておかねばならぬ。

「あれから岩蔵どのの身には、さまざまな事が起ったらしい。この手紙には書いてないが、明後日、権現さまの境内で会うたとき、くわしく語るつもりなのだろう」

「ともかくも、これで、お前さまも安心ができて、ほんとうによかった……」

「さと。この手紙を読んでごらん。岩蔵どのは、ずいぶんと苦しみ悩んでいたらしい。私も、きっと、そうだとおもっていた。岩蔵どのは悪人ではないのだ」

うなずきつつ、さとが手紙を読みはじめた。

雪丸が道場へ行くと、門人たちは稽古を終えたところであった。

この三人は角筈村の農家の二男、三男で、毎日、家の仕事の暇を見つけては道場へ来て、熱心に稽古をする。

この道場は、いまもって、日影道場とよばれているし、

「一念先生の道場」

と、いう人もいた。

成子雪丸の名は、この道場と一つになってはいない。

しかし、見ようによっては、雪丸が日影道場に溶け込んでいるからこそ、日影一念の名が

消えずに残っているわけで、いうまでもなく、雪丸には何の不満もなかった。
名主をはじめ、村の人びとは、成子雪丸夫婦が生活をするための助力を惜しまぬ。それは、日影一念が生きていたころの生活が、そのままに、いとなまれているといってよかった。
門人たちが道場の清掃をすませてあったから、雪丸は戸締りをして母屋へもどった。
「お前さま……」
台所から出て来たさとが、
「さっきの、お女中のことなのだけれど……」
「どうした？」
「いつか、どこかで、見たような人のようにおもえてなりませぬ」
雪丸夫婦には、まだ、子が生まれていなかった。
「その、お女中は、どのような……？」
「品のよい、しっかりとした物腰の、四十を二つ三つは越えて見えました」
「ふうむ……」
白根岩蔵が喜乃へ自分の手紙を托し、雪丸のもとへ届けさせたということは、よほどに岩蔵は、その女を信頼しているからにちがいない。
そして、雪丸とさとのこともはなしておいたのであろう。
もしも、旧日影道場が残っていて、そこに成子雪丸がいたなら、さとと夫婦になっている

やも知れぬ。そのことも喜乃へ、あらかじめ語っていたものか……。

ともかくも、さとから見た喜乃の態度には、いささかの戸惑いもなかった。

その喜乃を、さとは、前に何処かで見たような気がするというのだが、雪丸には別に関心もない。

だれかに似たような顔貌の人びとに出合うことは、少しもめずらしいことではない。

それよりも、雪丸は、

（明後日が待ち遠しい）

そのおもいで、胸の内は一杯であった。

白根岩蔵は、江戸の、島田九兵衛という人の屋敷にいるそうだが、その島田屋敷が江戸の何処にあるのか、そこまでは手紙にも書いてなかった。

（角筈へ来るのは気が重いだろうに……私のほうから、江戸へ行ってもよかったのだ）

雪丸は、これまで、岩蔵に対して憎悪の念を抱いたことは一度もなかった。

むしろ、自分が信じていたとおりに、岩蔵が秘伝書を返しに来ることを、よろこんでいたのである。

「今夜は、何やら気が昂ぶって、寝られそうにもない」

雪丸は、夕餉の膳に向ったとき、さとにいった。

「よかったこと。これで、その巻物を一念先生の御棺の中へ入れることができますね」

「そのとおりだ」
翌朝になると、雪丸は、両眼を腫らしていて、
「やはり、あれこれと、さまざまなことがおもい起されて、よう眠れなんだ」
苦笑を浮かべた。
「何やら、しきりに寝返りを打っていましたけれど……」
「さとの眠りを、さまたげてしまったかな」
「いえ、私は、よく眠りました」
この日、朝のうちは晴れていたが、午後になると厚い雲が空を覆い、夜に入って雨がふりはじめた。
「明日も雨か……もしも、雨になったら、岩蔵どのを此処へ連れて来よう」

翌日も、雨であった。
強い雨ではなく、霧のようにけむる雨で、朝から冷え込みが強い。
この日は八ツ半（午後三時）ごろに、門人たちの稽古が終った。成子雪丸は雨仕度にかかりながら、
「たぶん、岩蔵どのを此処へ連れて来ることになろう。そのつもりで、酒の仕度をしておいてくれ」

さとへ、そういった。
さとも、そのつもりでいるらしい。
「では、行って来る」
「待っています」
雪丸は簑をまとい、饅頭笠をかぶり、高下駄をはき、脇差を腰に帯して道場を出た。道場から熊野権現社までは、目と鼻の先だ。雪丸が境内へ入ったとき、岩蔵は、まだ姿を見せていなかった。
先ず、拝殿にぬかずいた雪丸は、横手へまわり、拝殿の屋根の下へ入って笠をぬいだ。
拝殿の正面の彼方に、石の鳥居が雨にけむって、ぼんやりと見える。
さいわいに、境内へ入って来る人影はない。もしも村のだれかが入って来て、雪丸がいるのを見つけたなら、
「雪丸先生。何をしていなさる?」
問いかけてくるにきまっている。
この場へ白根岩蔵があらわれることを知ったなら、村の人びとは黙ってはいまい。われ知らず雪丸は、身を屈めて、あたりへ目をくばった。
(何も悪いことをしているわけではないのに……)
人の目をはばからねばならぬ自分に、雪丸は苦笑を洩らした。

このとき、人影が一つ、鳥居をくぐってこちらへ向って来た。雪丸は身を引き、松の木立の中へ入った。

人影は岩蔵ではなく、このあたりの農婦で、雪丸も顔見知りの中年女であった。

農婦は拝殿にぬかずいてから、雪丸には気づかず、境内を出て行った。

「雪丸……雪丸」

どこかで、岩蔵の声がした。

拝殿の裏の本社のあたりから、その声はきこえてきたようだ。

「岩蔵どのか？」

「此処だ、此処だ」

本社の横手に、白根岩蔵があらわれた。

岩蔵は雨合羽を着て、小袖の裾を端折り、草鞋ばきである。笠はぬいでいた。

「雪丸。よう来てくれたな」

岩蔵の声が微かにふるえている。

「岩蔵どのこそ、よう来てくれました。久しぶりです」

「おぬしも元気そうで、何よりだ。さとどのと夫婦になったらしいな」

「はい」

「よかった。そうおもっていた」

突然、白根岩蔵が片膝をつき、頭をたれた。
「すまぬ。すまなんだ」
呻くような、岩蔵の声である。
「岩蔵どの。亡師の秘伝書を、たしかに持参されたのでしょうな？」
「申すまでもない」
「それならば、もはや何も、いうことはありませぬ」
「ゆ、ゆるしてくれるか……」
「亡き一念先生も、おゆるし下さるでしょう。さ、立って下さい、岩蔵どの」
「おぬしに、そういわれると、まことに、はずかしくて……」
口ごもりながら岩蔵は、ふところをさぐり、油紙に包んだ秘伝書一巻を取り出し、雪丸へわたし、
「この中の、桐の箱の中へおさめてある。見とどけてくれ」
「それにはおよびませぬ。ともかくも、此処では落ちついてはなしもできぬ。道場へまいりましょう」
「いや、それは……」
「かまいませぬ。ちょうど今日は稽古も早く終ったので、さとがいるだけです」
「いや、さとどのに会うのも気が引けてならぬ。ともかくも箱の中をあらためてくれ」

「さほどに申されるなら……」
本社の屋根の下ゆえ、雨に濡れることもないので、雪丸は油紙をひらき、中の桐箱の蓋をはらい、
「たしかに」
と、うなずいた。
「秘伝書を見ぬのか？」
「はあ」
「何故だ？」
「別に、見たいともおもいませぬ」
桐箱を油紙で包み、これを雪丸は、ふところへしまい込んだ。
白根岩蔵は、むしろ茫然となって、雪丸を見つめていた。
「岩蔵どの。さ、道場へ……」
「いや、それだけは、ゆるしてもらいたい」
「さとが邪魔ならば、名主屋敷へ行かせてもよい」
「名主さまに、お変わりはないか？」
「いま、風邪をひかれて……」
「それはいかぬな。おぬしとおれが会っていることを、名主さまは御存知なのか？」

「明日、知らせます」
「そうしてくれるか。ありがたい」
岩蔵は、雪丸が強くさそっても、道場へ来ることを拒み通した。
「つぎは、ゆっくりと語り合いたい。くわしいことは、そのときに……」
と、白根岩蔵は、島田九兵衛の屋敷の所在を雪丸に知らせ、
「おもいがけぬことから、おれは或る道場をゆずり受けることになってな」
「えっ……それは、めでたい。岩蔵どのの望みが適ったことになる。一念先生もあの世で、きっとよろこばれるでしょう」
秘伝書を返せば、成子雪丸は自分をゆるしてくれるやも知れぬ、と、おもっていた白根岩蔵だが、
（以前と少しも変わらぬままに、おれをゆるしてくれようとは……）
予想外のことであった。
ゆるしてはくれても、きびしく咎められるにちがいないと考えていたのだ。
「その道場は、江戸の、神田の紺屋町にあって、奥山念流の水野鉄斎という御方のものなのだが、その水野先生が、ぜひとも、おれに道場を引き継ぐようにと申されてな」
「それはよかった。何よりのことではありませんか」
雪丸は、江戸の剣術界のことなど、まったく知らなかったし、また知ろうともおもわぬ。

「おれの、どこを気に入られたのか知らぬが……」
いいさして岩蔵が、
「あ、こうしてはいられぬ。その水野鉄斎先生のいのちは、明日をも知れぬのだ」
「御病気なのですか？」
「十日ほど前に寝込まれたが、病は以前から重かった」
「それでは、引きとめることもならぬ」
「いずれ、水野道場のほうへ来てくれ。その折に、くわしくはなすが、道場を引き受けるにしても、いろいろと、むずかしいことがあってな」
白根岩蔵は、笠をかぶりながら、
「江戸での、おれの名は大久保八郎という。これだけは忘れずにいてくれ。よいか」
「はあ……」
「それでは、これで……」
「もう行きなさるか、名残り惜しい」
「何の、角筈から江戸までは、ひとまたぎではないか。落ちついたなら、また、あの女中に手紙をもたせてよこすから、待っていてくれ」
「わかりました」
「なあ、雪丸。その秘伝書の中身は、おれも見たのだ。おぬしも見せていただくがよい」

「いや、私は別に、見たくもありませぬよ」
「ま、見るがよい。きっと、おどろくぞ」
いうや、岩蔵は身を返し、本社裏の木立の中へ入って行った。木立をぬけたところに、権現社の裏門がある。
雪丸は正面の鳥居をくぐり、道場へ帰って来て、待っていたさとへ始終を告げ、居間の仏壇の前へ秘伝書を置き、
「お師匠さま。岩蔵どのが、この一巻を返しにまいりました。これにて、何とぞ、おゆるし下さいますよう」
生ける人に語りかけるようにいい、深く、頭をたれた。
雪丸が秘伝書の中身を見たくないと、岩蔵にいったのは、亡師・日影一念から「見るように……」と、いわれていなかったからである。
日影一念が死にのぞみ、この秘伝書を白根岩蔵と自分に見せなかったのは、それだけの理由があるからだ、と、成子雪丸はおもっている。
その理由とは何か……。
一念は生前、岩蔵と雪丸のことを「わが子も同様である」と、いって憚らなかった。その二人に秘伝書を見せなかったのは、
（お師匠さまの、深い慮りがあるからだ）

と雪丸は信じていた。

それだけで、雪丸にはじゅうぶんであったが、岩蔵は不満のあまり、秘伝書を盗んで逃げた。

成子雪丸の、こうした性格は生得のものといってよい。人の世の年月のながれに逆らおうとはせぬ。ただ一つ、少年のころに、名主の本郷庄左衛門と日影一念に願い出て、一念の門人にしてもらったことだけが、

「私の、わがままであった」

さとへ、語ったことがあった。

それとても、名主に反対をされたわけではなく、こころよく、ゆるしを得たのである。

「さと。岩蔵どのは江戸で、大久保八郎と偽名を名乗っているそうな。何やら面倒な、苦労もあるらしい。近いうちに、また手紙をよこすというていた」

秘伝書を仏壇の中へおさめた雪丸は、

「私は今夜、ここで眠る」

と、いった。

雪丸夫婦は旧納戸を改造して住み暮し、仏壇のある亡師の居間は以前のままにしておいたのだが、

「まさかに、この秘伝書が消えてしまうわけでもあるまいが、明日になるまでは、おまもり

をしなくては、安心ができぬ」

「はい」

日影一念の墓は、この道場の敷地内にある。

墓には〔日影一念〕の四文字がきざまれているのみだ。これは一念が生前、本郷庄左衛門にたのんでおいたので、そのときは庄左衛門が、

「何をいいなさる、一念先生。わしより先に、先生が亡くなると決まったわけではありますまいに」

笑い出すと、一念は、

「いや、そうでない。決まっております」

断言をしたという。

翌朝は雨も熄(や)み、空は晴れわたった。

成子雪丸は朝餉(あさげ)をすませてから、秘伝書を抱き、名主屋敷へ行き、本郷庄左衛門の病間へ入り、

「昨夜、岩蔵どのが秘伝書を返しにまいりました」

と、告げた。

「ええっ。まことか、それは……」

「これが、その秘伝書でございます」
本郷庄左衛門は、雪丸が秘伝書の中身をあらためようともせぬことを、意外におもったが、
（いかにも、何事にも欲がない雪丸どのらしいわえ）
むしろ、うれしくなって、
「わしも明日には床ばらいができよう。二、三日のうちに、この秘伝書を一念先生の御棺の中へおさめましょうな」
「はい。それまで、秘伝書を、おあずかり下さい」
「いや、それはならぬ。お前さまが、おまもりするのが順当じゃ」
「さようですか……では、そういたします」
そこで、この夜も、成子雪丸は亡師の居間へ眠ることにした。
この居間へ盗賊が入るはずもないのだが、そうせずにはいられない雪丸であった。
同じ夜……。
白根岩蔵の大久保八郎は、神田・紺屋町の水野道場で、水野鉄斎の看病をしている。
水野道場も、母屋が別棟になっていて、道場と母屋は渡り廊下でむすばれていた。母屋は小さいが道場は七十坪もあり、門人の数は百十六名といわれる。
母屋は四部屋で、ここに水野鉄斎は中年の女中・伊佐と共に暮しており、そのほかに下男がふたりいた。

いま、鉄斎は病間で、よく眠っている。
枕頭につめきっているのは岩蔵と、牛堀道場の鳥飼松之助だ。ここに松之助がいるのは、師の牛堀九万之助から、
「しばらくの間、大久保八郎のそばについていてやれ」
と、命じられたからである。
水野鉄斎が、
「わが道場を、大久保八郎殿へ、ゆずりわたす」
門人の総員をあつめ、白根岩蔵の大久保八郎を引き合わせ、同時に発表をしたのは半月前のことであった。
その翌日から、八十名の門人が稽古をやすんでしまった。
むろんのことに、この発表に不満を抱く門人たちであって、これは、水野鉄斎が予想したとおりになった。
前に、水野道場の門人たちが二派にわかれていることをのべておいたが、稽古をやすんだ八十名は、ほとんど、この二派の門人たちで、
「何者とも知れぬ、素姓もわからぬ者を道場主にいただくことはできぬ」
その不満が一つになり、二派が合流するかたちで、水野鉄斎に、
「おもいなおしていただきたい」

と、せまったが、鉄斎は、これをはねつけた。

「鉄斎先生は、どうかしていなさる」

「このままで、すませるわけにはまいらぬぞ」

彼らは、毎日のようにあつまっては、今後の方策を論じあっているらしい。

水野道場にて

水野鉄斎道場の門人は、二派にわかれているといったが、その一派の頭に立つ者の名を、阿部又七郎という。

阿部又七郎は、二千石の旗本・阿部平内の三男で、年齢は三十歳。

いま一つの派を束ねている者は、神保左門といい、これは千二百石の旗本・神保市太夫の二男。二十八歳であった。

阿部と神保は、約十年ほど前に、前後して、水野道場へ入門して来た。

それまでは二人とも、他の道場をまわっていたらしいが、水野道場へ入ってからは腰を落ちつけた。

折しも、そのころに、水野鉄斎が目をかけていた二人の門人が死んだり、道場を去ったりしたので、水野鉄斎も阿部と神保を懸命に鍛えたし、阿部と神保も必死に修行をつづけ、いまは、この二人に勝てる門人は一人もいない。

阿部と神保は互角の腕前で、二人とも、それぞれに、
（この道場を、ゆずり受ける者は自分をおいて、ほかにはない）
おもいこんでいたのである。
両者の父兄も、
「なにともして、剣の道で身が立つようにしてやりたい」
というわけで、水野鉄斎が道場をひろげたり、改築をした折には、相当の費用を出しているし、水野道場の後援を惜しまなかった。
両家の跡目をつぐのは長兄だから、阿部も神保も養子の口がかからぬかぎり、いつまでも父兄にたよっていなくてはならぬ。武家の二、三男以下は、いわゆる厄介者といわれるほどで、身分が低い家ならば尚更のことだし、高ければ高いで父兄の心配が大きい。
だが、阿部と神保は剣をまなび、ひとかどの者となったのだから、これは父兄たちが熱心になるのも当然であったろう。
阿部・神保の両家は、共に裕福の家柄だ。
水野鉄斎も、二人の後継者を失ってからは、
（阿部か神保の、どちらかに、道場をゆずるより仕方もあるまい）
それには、何らかの方法を考えなくてはならぬ。
そのうちに病気は重くなるばかりで、鉄斎は気力ひとつで寝込みもせずにやって来たが、

ついには、

（わしが死んだ後は、どうにでもなれ）

なかば、すべてをあきらめかけていたときに、田沼屋敷の試合で白根岩蔵を見たのだ。

そこで、また、鉄斎の胸の内には新たな希望が生じた。

（この人物ならば、わが道場の建て直しが、きっとできるにちがいない）

このことであった。

水野鉄斎も、門人たちの大半が阿部又七郎派と神保左門派にわかれていることを、知らぬわけではない。

はじめのうち、鉄斎は、阿部と神保に大きな期待をかけていた。

ところが、やがて、この二人は、自分たちの剣が上達するにつれ、高慢な性格を次第にあらわしてきたので、鉄斎は嫌気がさしてきはじめた。

そのころ、鉄斎も若いころとはちがい、気が弱くなってきていたのやも知れぬ。

三ノ輪の外れに小さな道場をかまえていたときの鉄斎は、門人も二十名ほどで、彼らと共に朝早くから夜に至るまで稽古をつづけ、倦むことを知らなかったものだ。

それで鉄斎は、満足していたのだが、自分の名が江戸の剣術界にも知られ、門人の数が増え、いまの場所へ道場を移してからは、その運営についても、おのずから三ノ輪の小道場とはちがってくる。

どうしても、後援者が必要となってきた。
五十をこえてからは、若いころの、それこそ命がけの修行が躰にあらわれ、無理がきかなくなったのを気力でおぎなってきたのだが、阿部・神保その他の父兄からの後援を拒むこともならず、
「牛堀さんが、うらやましい。わしは、手をひろげすぎた」
一、二度、牛堀九万之助に洩らしたことがあった。
牛堀九万之助は、浅草・元鳥越の小さな道場をひろげようとはせず、門人をえらぶのにも、自分の道場に、
「ふさわしくない」
そうおもえば、入門をゆるさぬ。
牛堀道場の門人たちは〔派〕をつくったり、下の門人をあつめて〔頭〕になったりする者は、一人もいない。
いまや、自分の死を目前にひかえた水野鉄斎が、白根岩蔵の大久保八郎をえらび、
（わが道場の建て直しを……）
と、決意したのは、たとえ、門人の数が少なくなってもよいから、三ノ輪のころの気風を取りもどし、
（真の剣士を生み出す道場にしてもらおう）

これが、鉄斎の最後の念願となったわけだ。
さいわいに、大久保八郎が引き受けてくれたので、鉄斎は自分の決意をあますところなく語るや、
（大久保殿は、面を輝かせて、同意してくれた……）
のである。
阿部・神保両派の門人八十名は、道場へ出て来なくなったが、これは覚悟の前であった。後は、大久保八郎にすべてをまかせ、自分は、おもい残すことなく、あの世へ旅立てばよい。
重病の中で、水野鉄斎は安らかに眠っている。
寝ついてから、水野鉄斎は医者にも躰を診せたが、それも一、二度のことで、
「もはや、これまで。医薬の手を借りたところで、墓へ入る日が少し延びるだけのことじゃ」
薬ものまなくなってしまった。
「今日は、まことに、よくお寝みですな」
鳥飼松之助が、岩蔵にささやいた。
「まことに、な。重い病にかかっておられるようには見えぬ。安らかなお顔だ」
「さようで……」

夜が更けていた。

女中の伊佐は、いつも次の間にひかえているのだが、いま、台所へ入り、岩蔵と松之助のために夜食の饂飩を煮ていた。

二人の下男は、道場に付随している一間で寝起きしていたが、下男のひとりの作造が台所へ来て、伊佐に、

「いま、道場のほうへ、坪内さんが見えて、こちらの大久保先生に、ぜひとも会いたいといっていなさるのだがね」

と、顔を顰めて見せた。

坪内さんと作造がいったのは、水野道場の門人のひとりで、坪内惣市のことだ。

四十歳の坪内は御家人（身分の低い幕臣）で、道場では、かの阿部又七郎の〔ふところ刀〕などと、よばれている。つまり、阿部派の〔参謀〕というところなのであろう。

女中の伊佐も、二人の下男も、坪内惣市が嫌いだ。坪内は阿部の威勢を借り、目下の者に対しては横暴な男であった。

「こちらへは来ないのかえ？」

「そうだよ、お伊佐さん。道場のほうへ来てくれというのだ」

「あいつは、鉄斎先生のお見舞いもしないやつなのだから……」

「ともかくも、そういってくれないか」

うなずいた伊佐が、病間の次の間へ岩蔵をよび出して、このむねをつたえると、
「よろしい」
そのまま、渡り廊下から道場へ向った。
坪内惣市は、道場の中央へ坐り込み、入って来た岩蔵を睨みつけた。
坪内は、ひとりで来たらしい。小肥りの躰から酒の匂いが発しており、岩蔵が前へ来ると、立ちあがって大刀を腰に差し込みつつ、
「阿部又七郎殿の代りにまいった」
「さようか……」
「これを、ごらん下され」
坪内は、懐中から一通の書状を出し、岩蔵へ突きつけ、
「この場でごらん下され。すぐに返事をいただきたい」
白根岩蔵は、阿部又七郎からの書状を一読して、坪内惣市へ、
「たしかに、うけたまわった」
「では、承知なされたのですな？」
「御念には、およばぬ」
「なれば、このことを阿部殿へ申しあげる。ごめん」
坪内は水野鉄斎の容態を尋ねようともせず、肩を怒らせ、すぐさま引きあげて行った。

向うの戸口の透き間から、心配そうに様子をうかがっていた二人の下男へ、岩蔵は微笑してうなずき、渡り廊下へ出た。

渡り廊下には鳥飼松之助が待っていて、

「どうなさいました？」

「阿部又七郎と神保左門が、明後日に、当道場へ門人をあつめ、その前で、私と試合をしたいと申し入れてきた」

「やはり、そのようなことを、たくらんでいたのですな」

「当然のことだろう。水野先生の旧門人が、私の腕をためさずに納得できようはずもないではないか、鳥飼殿」

「なれど……それだけにてすみましょうか。あの者たちは、もっと深いたくらみが……」

「このことは、水野先生のお耳へ入れてはならぬ」

「愚かな者たちめが……」

と、松之助は舌打ちをして、

「水野先生が、これぞと見込まれた貴方に勝てるとおもっているのでしょうか。あの者たちは、田沼様御屋敷での、貴方の試合ぶりを見ていないから、そのようなばかげたことを……」

「もう、よい」

「ならば当日、道場へ残った三十六名の門人たちをも、あつめなくてはなりますまい」

「そのつもりだ」
「では明日、稽古の折に私から申しつたえましょう」
「たのみます」
「いかがでしょうか、牛堀先生に立ち合っていただいては……」
「ふうむ……」
暗い渡り廊下での立ちばなしである。
風は絶えているが、それだけに寒気はきびしかった。
暫時、白根岩蔵は考えていたが、ややあって、
「そうだな。牛堀先生が御迷惑でさえなければ……」
「これより、牛堀先生にお知らせをしてまいります」
「いや、明朝でよい。私を水野先生に引き合わせて下されたのは牛堀先生ゆえ、黙っているわけにはまいるまい」
「そのとおりです」
病間へもどると、水野鉄斎は依然、安らかに眠っている。
伊佐が、煮込みの饂飩を次の間へ運んで来た。

翌朝、まだ暗いうちに、朝餉も口にせぬまま、鳥飼松之助は浅草の牛堀道場へ駆けつけ、

阿部又七郎が、岩蔵の大久保八郎へ突きつけた挑戦状を見せ、
「大久保殿は、稽古をやすむわけにはまいらぬので……」
「それでなくてはならぬ」
牛堀九万之助は満足げにうなずき、
「これは水野道場にとって大事の試合だ。よし、私が立ち合おう」
「かたじけのう存じます」
「あは、は、は……何だ、鳥飼。お前は、まるで大久保門下になったような口ぶりではないか」
「とんでもないことでございます」
「怒るな、冗談をいったまでではないか」
「しばらくの間、大久保殿につきそっているようにといわれたのは、先生ではありませぬか」
「そうであった。あは、はは……」
「また、お笑いなさる」
「怒るな。久しぶりで、いっしょに朝飯を食おう」
「いただきます」
松之助が水野道場へもどると、白根岩蔵は残った門人たちを相手に激しい稽古をつづけて

いた。

稽古に熱中しているときは忘れているが、岩蔵は、夜になると、島田九兵衛屋敷のことが気にかかってならぬ。

九兵衛の身に何やら危険がせまってはと、それが不安であった。この間の曲者どもは、単なる盗賊とも思えなかった。金よりも命を……九兵衛の命をねらって潜入したようにおもわれてならぬ。

九兵衛は、

「わしのことは、いささかも心配はいらぬゆえ、おもう存分に水野道場の建て直しをなされ。大丈夫、大丈夫」

そういってくれているし、屋敷の警備にも、念を入れるようになったことだけは事実だ。また、三日か四日に一度は、島田屋敷から喜乃が訪ねて来て、岩蔵と九兵衛との連絡をとってくれる。先日、角筈の成子雪丸へ手紙を届けてもらったのも、この連絡の日にたのんだのである。

岩蔵は喜乃へ、自分の本名を打ちあけておいた。これからは何かと、雪丸との連絡をたのみたかったからだが、むろんのことに、秘伝書の一件や、九兵衛に打ちあけたような、くわしいことを語ってはいない。

島田九兵衛は、岩蔵の偽名について、こういった。

「わしも偽名については、いろいろに思案をしてみたが、さして、気にすることはないようにおもう。岩蔵どのは、すでに、この九兵衛へ、すべてを打ちあけられたのだし、いまは大久保八郎の名をもって、諸方に知られるようになったのだから、それでよいとおもいますよ」

白根岩蔵は、鳥飼松之助から報告を受けるや、稽古を中断し、このとき道場にいた門人二十一名をあつめ、明日の試合の事を告げ、

「当道場に残った人びとも、他に用事がなくば、道場へあつまり、見とどけるように」

と、いった。

門人たちにざわめきが起り、その中から、

「もしも、大久保先生が負けられたときは、どうなりますか？」

率直に、問いかけた者がいる。

「当道場の門人に、主の私が負けたとなれば、いたしかたもあるまい。私は、この道場から出て行くつもりだ」

「それは困ります」

「ほう……」

この男は、三千石の大身旗本・織田主税助に奉公をしている足軽で、玉井与平治という若者だ。

「もしも、お負けになったとしても、大久保先生は水野先生のお目がねに適って、道場を引きつがれたのですから、出てお行きになることはございませぬ」

居合わせた門人たちは、与平治の、あまりにも率直な質問におどろきもし、呆れもしたが、この与平治の言葉を聞くと、いっせいに賛同の声をあげた。

彼らは、阿部や神保の〔派〕に入るために剣術の稽古をしているのではない。あくまでも水野鉄斎について修行をしたいからこそ、道場へ通って来るのだ。

その鉄斎が再起不能となれば、鉄斎がえらんだ後継者のもとで修行をつづけることに、少しも、うたがいを抱いていなかった。

「うけたまわった」

ていねいな口調でいった岩蔵が、頭を下げた。

（この人びとは、本物だぞ）

おもわぬわけには行かなかった。

「では、負けても私は、当道場から出て行かぬことにする」

岩蔵が、こういうと、門人たちは歓声をあげた。

「では、稽古をつづけよう」

岩蔵は木太刀をつかみ、

「つぎは、玉井与平治」

「はいっ」

与平治は、うれしげに中央へ出て来た。

この日、午後から稽古に来た門人たちへも、白根岩蔵は同様のことを告げておいた。

門人たちは、ここ数日の、岩蔵の稽古ぶりを見て、岩蔵を深く信頼するようになってきた。

それが、鳥飼松之助にも、はっきりと看て取れる。

稽古が終り、岩蔵と松之助は、伊佐の給仕で夕餉を終え、いつものように水野鉄斎の枕頭へ詰めた。

鉄斎は午後に一度目ざめ、重湯を啜ったそうだが、またも深い眠りに入っている。

「今日は、重湯を少し、あがられたそうな」

「よろしゅうござった」

枕頭で、岩蔵と松之助がささやきかわした。

道場に残っている門人たちは、少しでも鉄斎の食欲が出るようにと、魚介やら野菜やらを入れかわり立ちかわり、台所へ運んで来てくれる。自分の乏しいふところをはたいて卵を買いもとめて来る者もいたし、彼らの主人が「水野先生の御見舞いに」と、もたせてよこしたりするのだ。

このような道場の雰囲気は、かつての、角筈村の日影道場を岩蔵に想起せしめた。そして、

（ああ、この道場は、まことによい道場だ）

おもわざるを得ない。

（そうだ。いまの門人衆だけで、おれには充分だ）

阿部又七郎と神保左門に負けるつもりはないが、勝負の事ほど、わからぬものはない。たとえば田沼邸での試合で自分が勝った田村邦四郎にしても、剣の力量は、

（おれより、上だ）

いまもって岩蔵は、このおもいを捨てきれない。

ただ、あのときの田村は、あまりにも岩蔵を侮りすぎたので、敗北をまねいたのだ。

たとえ、阿部と神保に負けても、この門人たちが望むかぎり、道場を出て行くまい、と、岩蔵は決意をかためた。

「もし……」

次の間の襖を細目に開け、女中の伊佐が、

「牛堀先生が、お見えでございます」

「何、先生が……」

おどろいて、白根岩蔵が次の間へ行くと、いましも牛堀九万之助が入って来たところであった。

岩蔵は両手をつかえ、

「本日は勝手な御願をいたしました。明朝、私が、お迎えにまいるつもりでおりました」
そのための町駕籠の手配もしてあった。
「何の。今夜は此処へ泊めてもらおう。そのほうがよい」
「おそれいります」
明日の試合は、四ツ半（午前十一時）に始まることになっていた。
白根岩蔵は先ず、神保左門と闘い、その勝敗如何にかかわらず、つぎに阿部又七郎と立ち合う取り決めになっている。
牛堀九万之助も、明日の試合のことを、水野鉄斎には告げぬほうがよい、との意見であった。
道場での稽古は、一日もやすむことなく、つづけられているのだから、明日の試合の物音が鉄斎の耳へ入ったとしても、それとはわからぬ。
死にのぞんでいる鉄斎に、よけいなことを告げたところで、何になろうか。
依然として、水野鉄斎は昏々と眠りつづけている。
「このように、安らかな鉄斎殿の顔を、見たことがない」
牛堀九万之助が、つぶやくように、
「すべてを、大久保八郎の手へゆだねて、いまは何ひとつ、おもい残すことがなくなったのであろう」

「私は、この道場を、水野先生の名をもって、まもりたいと存じます」
「おぬしの名は、その陰に隠れてか!?」
「はい」
角筈の成子雪丸も、いま尚、日影道場の名を残している。白根岩蔵は、自分もこれにあやかりたいと念じている。
また、水野道場は、それにふさわしいような気がする。
「よくも、そこまで、心を決めた。たのむぞ」
「およばずながら、一所懸命、無我夢中で、やってみるつもりでおります」
「おお……」
何度もうなずく牛堀九万之助と白根岩蔵を、感動の面持ちでながめていた鳥飼松之助が、
「大久保殿。明日は大事の試合がござる。おやすみ下さい」
すすめると、牛堀九万之助も、
「そのとおりだ。私と松之助がつきそっているゆえ……」
「いえ、大丈夫です」
「今夜は、この九万之助のいうことを聞きなさい」
「は……では、お言葉にあまえまして……」
二人に一礼し、岩蔵は次の間へ引きとった。次の間には毎夜、岩蔵と松之助の夜具が用意

されてい、二人は交替で眠ることにしている。
女中の伊佐は、二人が夕餉をすませた後は、台所のとなりの小部屋へ入って眠るのを常とした。
伊佐の年齢は、島田屋敷の喜乃より二つ三つは年上のようにみえた。
伊佐は、水野道場に岩蔵を訪ねて来る喜乃と気が合うらしく、伊佐の小部屋で長時間を語り合っているようだ。
夜具の中へ身を横たえたとき、白根岩蔵は、
（今夜は、眠れそうにもないような……）
気がしたけれども、両眼を閉じると、たちまちに深い眠りへ引き込まれて行ったのである。
翌朝、白根岩蔵は、鳥飼松之助に起されるまで目ざめなかった。連日の看病と稽古と、睡眠不足で、さすがに疲れが出たものとみえる。
目ざめは、爽快であった。
「鳥飼殿。水野先生に、お変わりはなかったか？」
「一度も、お目ざめにならず、よく寝こんでおられましたが、先程、お目ざめになり、重湯を少しあがられました。牛堀先生をごらんになり、にっこりとして、うなずかれたようです」

「それはよかった」

朝餉は、牛堀九万之助が伊佐に命じてつくらせた白粥である。これに梅干をそえ、半熟の卵が粥の上へのせてあった。

岩蔵は、湯殿で水を浴びてから、朝餉の膳についた。

たとえようもなく旨かったが、岩蔵は一杯半にとどめておいた。

伊佐の給仕で、三人が朝餉を終えたのは五ツ（午前八時）ごろであったろう。

いつもなら、すでに、道場の朝稽古は始まっているのだが、今日は、まだ一人も門人があらわれぬ。

伊佐が、三人の髪をととのえてくれた。

試合は四ツ半（午前十一時）だが、四ツ（午前十時）をすぎると、門人たちがあつまってきはじめた。

今日も寒気はきびしかったけれども、空は雲ひとつなく晴れわたっている。

この日の試合を見とどけるためにあつまった門人は、結局、七十二名である。このうち五十名が、阿部・神保両派の門人たちで、二十二名が道場へ残った門人だが、主人に仕えていて、この時刻に来られない門人もいれば、病気その他で、やむを得ずに欠席した者もいる。

道場の正面、一段高い見所へ、牛堀九万之助があらわれると、門人たちの、ざわめきが起った。まさかに九万之助が姿を見せるとはおもわなかったのであろう。

道場はひろいが、試合に必要な場所をとって、そのまわりに門人が居ならび、さらに東西の戸を外し、外側の廊下へも門人たちが詰め合わせた。

牛堀九万之助は、

「水野鉄斎殿との交誼により、牛堀九万之助が立合人として、試合を見分いたす」

と、いった。

これに反対する門人は一人もいなかった。また、反対する理由は何一つない。

白根岩蔵の大久保八郎が、鳥飼松之助と共にあらわれ、東側へすすむ。

同時に、神保左門が木太刀をつかみ、西側へ出て来た。

神保左門は中肉中背の、よく均整のとれた体軀をしており、岩蔵の目から見るには、

（剣をまなぶに、打ってつけの躰だ）

と、見えた。

神保の全身から、凄まじい殺気がふき出している。

白根岩蔵は、簡単に神保左門を撃退したかというと、そうでもなかった。

神保が、成子雪丸と立ち合ったらどうであろうか……。

その勝負は、予想がつかぬ。

ということは、雪丸と互角の腕前といってよい。

立つや、神保は猛然と打ちかかってきた。

神保も阿部も、剣（木太刀）を手にした白根岩蔵を、まだ、見たことがない。岩蔵が水野道場で稽古をするようになったのは、両者が道場へあらわれなくなった翌日からであった。

だが、阿部・神保両派の門人のうち、数人は残っていて、岩蔵の稽古ぶりを見た。彼らは、これを阿部と神保へ報告していたにちがいないが、おそらく、彼らの目では、岩蔵の実力を見ぬくことが不可能だったに相違ない。

「さほどの手練者とはおもえません」

と、告げたのであろう。

神保左門は、岩蔵を侮り、自分が必ず勝てると、信じきっていたようだ。

試合の時間は短かかったが、岩蔵の木太刀が神保の右腕を打ち据え、神保が木太刀を落したとき、門人たちは瞠目した。

道場へ残り、岩蔵をもりたてて、水野道場再建の意欲に燃えていた門人たちの中にも、

「大久保先生は、あの二人に勝てまいな」

「おれも、そうおもう」

「人柄は、段ちがいに立派だが……」

「阿部と神保は強いからなあ」

こうした声が、少なくなかったのである。

それだけに、阿部・神保両派の門人たちのおどろきは、層倍のものであった。

神保左門は、くやしげに木太刀を拾いあげ、白根岩蔵を睨みつけつつ、廊下へ出て行った。これを見送った阿部又七郎の顔色が、わずかに変わっている。阿部も、

「自分が出るまでもない」

神保の勝ちを、うたがわなかった。

阿部と神保の、剣士としての技倆は伯仲している。なればこそ、それぞれの〔派〕ができたのだ。水野道場をわがものとするためには、白根岩蔵を打ち破った後に、今度は阿部と神保が争うことになるはずであった。

ところが、神保左門は負けた。それならば、阿部又七郎が白根岩蔵の大久保八郎を打ち破れば、阿部の実力第一は、門人たちのすべてがみとめるところとなる。

（よし!!　見ておれよ）

神保を見送った視線を岩蔵へ移したとき、阿部又七郎の五体は闘志でふくれあがった。

白根岩蔵は、いったん、道場から出て門人の控部屋へ入り、ぬるい湯で喉をうるおした。

水野鉄斎道場の近くを、神田堀という堀川がながれてい、北岸は堤になっている。この堤は幕府が火除けのために築いたもので、堤の名を〔八丁堤〕とよぶ。

紺屋町の水野道場は、八丁堤の下にあった。

白根岩蔵に負けた神保左門は、憤然として、着替えもそこそこに道場を飛び出すと、神保派の門人が五名ほど、あわてて後からついて来た。

道場の近くに栄松庵という蕎麦屋があり、この店の二階座敷が神保派の〔溜り〕になっている。

神保左門は門人たちと共に、栄松庵の二階座敷へあがり、

「酒、酒だ。燗はいらぬ。すぐに持ってまいれ」

と、命じた。

門人のうちの二人は、水野道場へ引き返して行く。これは、つぎの阿部又七郎の試合を見とどけるためであった。

「うぅむ……」

唸りつつ、神保左門は茶碗の冷酒を一気に呷った。

そのとき、道場の様子を見に行った二人の門人が、栄松庵へ駆けもどって来た。

「どうした?」

「阿部さんが勝ったか?」

門人たちは、口ぐちに問いかけた。

神保左門が負けたからには、阿部又七郎の勝敗は、彼らにとって影響が大きい。

二人の門人は、声もなく、かぶりを振って見せた。

「何……阿部さんが負けたのか?」

「さよう」

「まさかに……」
「胴を……胴を、はらわれてな」
「胴……」
「うむ」
神保左門は無言のまま、空間の一点を睨み据えたままだ。蒼ざめた神保の顔に、新たな殺気がただよいはじめた。
「実に、激しい試合であったよ」
短かかったが、
「そ、そうか……」
「あのような試合、見たこともないわ」
「ふうむ……」
門人たちは、神保左門の様子を盗み見ながら、ひそひそとささやきかわす。
神保が、突然に立ちあがり、
「おぬしたちは、ゆっくりとして行け」
呻くがごとくにいい、階下へ降りて行った。
水野道場から出て来た門人たちが、神保へ声をかけたが、神保は振り向きもせずに立ち去って行く。

神保派の門人の中から、栄松庵へ入って行く者もある。
阿部又七郎の姿は、何処にも見えなかった。
冷え冷えと澄みわたった大空に鳶が一羽、悠々と旋回している。

試合の翌日になると、阿部・神保両派のうちの合わせて十二名が、水野道場へもどって来た。
鳥飼松之助は、白根岩蔵へ、
「油断は禁物です」
忠告をしたが、岩蔵は平気であった。
うたがえば、切りがないのである。
亡き日影一念は、黙々として門人たちへ稽古をつけ、門人の出入りには一切かまわなかった。いったん、稽古をやめた門人が一年後にもどって来たときも、一念は一年前と少しも変わらず、
「さ、まいれ」
その門人へ稽古をつけてやり、一言も咎めなかった。
岩蔵も雪丸と共に、何度か、こうした場面を見て来ている。いまの岩蔵は、およばぬながらも亡師のように門人たちを教えようと決意しているのであろう。

それにしても、門人たちが昨日の試合によって、白根岩蔵の力量を、はっきりと知ったことは否めぬ事実であった。

この日、阿部又七郎の使いが神保左門へ手紙を届け、夜に入って、二人は浅草の並木町にある料理屋・浅田屋源三方で会い、密談は二刻（四時間）におよんだ。阿部と神保が両派の門人を一人も交えず、二人きりで何事か相談をしたのである。

水野鉄斎が息絶えたのは、同じ夜更けだ。

夕餉をすませた白根岩蔵が先へ寝むことになり、次の間へ入って、ぐっすりと眠り込んだが、どれほどたったろうか。

「起きてください。水野先生の様子が……」

鳥飼松之助に起され、岩蔵は着替えもせずに病間へ飛び込んだ。

なるほど、水野鉄斎の呼吸が切迫している。

「医者を、よんで来ます」

「たのむ」

出て行くとき、松之助が知らせたので、女中の伊佐が急ぎあらわれた。

鉄斎は両眼を閉じ、昏睡状態のまま、この世を去ろうとしている。

「何とか、ならないものでございましょうか？」

伊佐が切なげにいうのへ、岩蔵はかぶりを振った。そして鉄斎の左手をにぎりしめ、

「先生……水野先生……」
耳もとへ口をつけ、よびかけたが、鉄斎はこたえようともせぬ。
「先生、しっかりなすって……」
伊佐も鉄斎の右手をつかんだ。
「あ……脈が……」
「な、何でございますって？」
「絶えた……」
町医者をよびに行った松之助は、まだ、帰って来なかった。

闇の中の声

闇の底から、土の香が淡く立ちのぼっているのを、歩みつつ、白根岩蔵は感じていた。

（春が、そこまで来ている……）

このことであった。

年が明けて安永八年（西暦一七七九年）となった、二月上旬の或夜のことで、岩蔵は、島田九兵衛を訪問し、夕餉を共にしてから、道場への帰途についていた。

むかしの二月上旬は、現代の三月上旬とおもえばよい。少しずつ、春の気配が立ちのぼってくるのも当然である。

この年、白根岩蔵は二十九歳になった。

したがって、成子雪丸は二十二歳ということになる。

半月ほど前に、岩蔵は雪丸を、水野道場へ招き、午後からの稽古を見せてから、夕餉を共にした。

「よい道場です。おめでとう」
雪丸は、心からうれしげに、
「亡き一念先生も、きっと、よろこんでおられましょう」
「そうおもうか……おぬし、ほんとうに、そうおもってくれるか？」
「むろんのことです」
「そうか、よかった。おぬしに、そういってもらうと、おれの心も、安まる。ありがとう、ありがとう」
岩蔵の両眼には、うっすらと泪が浮いていた。
「ときに雪丸……」
「何か？」
「見たか？」
「何を、です？」
「一念先生の秘伝書の中身をだ」
「いいえ」
「見ない……」
「御遺言のとおりに、お墓の中へ埋めてあります」
「ふうむ……」

岩蔵は、おどろきの眼で、まじまじと雪丸をながめ、
「そうか、おぬしは……」
「もう、このことはやめましょう。それよりも、今夜は、もっと道場のはなしを聞かせて下さい」
去年の暮に、水野鉄斎が亡くなり、葬儀その他の後始末がすむと、白根岩蔵は、いよいよ、道場主として門人たちの教導をはじめた。
門人たちも、熱心に稽古をするし、それに、島田九兵衛の紹介によって、二十名ほど、新しい門人が増えた。九兵衛が紹介した門人は、いずれも身分の低い御家人の二、三男か、または諸方の武家に奉公をしている足軽などであった。
こうした門人ならば、道場に残留した門人たちとも気が合う。いずれも向上心があるから、稽古をはげむ。
その様子は、彼らの稽古ぶりを見た成子雪丸の目にも、歴然としていた。
阿部・神保両派の門人の中から道場へもどって来た十二名のことを、残留の門人たちは、
「出もどり組」
などとよぶが、この十二名も道場へは毎日通って来て、稽古もよくしているのだ。
阿部又七郎と神保左門は、いまのところ、沈黙をしている。彼らは、水野道場のあるじになりたいという野心を、捨ててしまったのであろうか……。

「われわれの前で、二人とも、あのように、はっきりと、大久保先生に負けたのだから、文句のつけようがあるまい」

門人たちは、そのように語り合っていたが、いまは阿部・神保両人の名を口にのぼせることもなくなった。忘れかけているらしい。

牛堀九万之助が、時折、道場を見に来てくれるし、岩蔵には、大いに心強いことであった。鳥飼松之助も牛堀道場の稽古を終えてから立ち寄って、ときには泊り込んで行く。

島田屋敷の女中・喜乃は、以前ほどではないが、十日に一度はやって来て、九兵衛との連絡を絶やさぬようにしてくれる。

ともかくも、白根岩蔵にとっては、無我夢中の明け暮れで、一所懸命に門人たちへ稽古をつけているうち、いつの間にか、春の跫音が近寄って来た。

島田九兵衛へは、新年の挨拶に行ったきり、ずっと、無沙汰をしていたので、今日は稽古を終えるとすぐに、島田屋敷へおもむいた白根岩蔵なのである。

いま、岩蔵は、松平伊豆守・下屋敷（別邸）に沿った道を歩んでいた。

左側は、上野山内の鬱蒼たる森であった。

細い道は、屈曲しつつ、不忍池のほとりへ向っている。

（はて……？）

前方の闇の中に、何か、うごいたものがあったような気がして、岩蔵は提灯をかかげて見

た。

（気の所為か……）

少し行くと、また何か、

（うごいた……）

と見て、岩蔵は立ちどまった。

この坂道は、いまでも残っている。筆者も少年のころは、数え切れぬほどに通ったが、そのころも、実に、さびしくて怖い道であった。谷中に住んでいた伯父夫婦に、

「正太郎。あの道を通ってはいけないよ。昼間っから追い剝ぎが出るのだからね」

などと、おどかされたおぼえがある。

坂道の名を清水坂といい、通称は暗闇坂だ。

白根岩蔵は何事もなく、暗闇坂を下りきって、不忍池のほとりへ出たのだが、その歩調は、急に、ゆるやかなものとなり、左手は大刀の鍔ぎわへかかっていた。

前方右手に、不忍池がひろがってい、池畔の水茶屋や茶店の灯も、夜更けのこととて、大半が消えている。

白根岩蔵の歩調がゆるやかになったのは、

（だれかが、おれを待ち伏せているような……）

気がしたからである。

年が明けてからは、島田九兵衛と牛堀九万之助へ年始の挨拶に行ったが、これは日中のことで、あとは道場にかかりきりだったし、夜更けに外出から帰るのは、今年になって、はじめてのことだ。

岩蔵は、池畔の道へ、そろりと足を踏み出した。

この道はひろい。右は不忍池、左は上野山内の森で景観もまことによく、四季を問わず江戸市民があつまって来るけれども、夜に入れば、人通りは絶えてしまう。

白根岩蔵は、道の中央を歩む。これならば、両側のどちらから襲われても、これに応ずる体勢をととのえることができる。

背後に、跫音がした。

振り向くと、暗闇坂の下のほうで、跫音は消えた。

（何者か？）

阿部又七郎と神保左門は、旧臘の試合に負けたことを遺恨におもっている。

ことに阿部は、岩蔵と激しく打ち合って左足がながれ、体勢を立て直した一瞬、胴をはらわれて負けたが、そのとき、

「おぼえておれよ」

無念の歯ぎしりの中で、岩蔵へいったときの、阿部又七郎の白い両眼から発する殺気を、岩蔵は忘れていなかった。

いまのところ岩蔵には、自分を待ち伏せて襲いかかる者がいるとしたら、阿部と神保よりほかに心当りがない。

闇が、急速に、ふくらんできた。

そのふくらみこそ、殺気である。

跫音が右と左、背後の三方から起り、岩蔵を目がけて迫った。

同時に、岩蔵は走り出した。

走り出しながら、大刀の鯉口を切った。

尚も走りつつ、呼吸をととのえる。

岩蔵が右手に持った提灯の火は、まだ消えぬ。いや、消えぬようにして走ったのだ。

曲者たちは、その提灯を目ざして走り寄って来る。

（よし!!）

と、看て、岩蔵は提灯を後ろへ投げ捨てざま、尚、二十歩を走って振り向き、大刀を抜きはらい、身を沈めた。

地に落ちた提灯は、燃えはじめた。

めらめらと燃える提灯の炎が、殺到して来る三つの黒い影を浮きあがらせた。

転瞬……。

大刀を抜きはらった白根岩蔵の躰が、左前方へ飛んだ。

三人の曲者たちから見ると、岩蔵の躰は闇の底へ沈んでしまったかのようにおもえたが、岩蔵からは、燃えあがる炎を受けた三人の黒い影が、はっきりと見えた。

三人のうちに、阿部又七郎と神保左門は入っていない……と、直感しつつ、岩蔵は左端の曲者の脚を薙ぎはらった。

峰（刀の刃の背）打ちである。

曲者は唸り声を発して、のめり込むように倒れた。

峰打ちでも、おそらく曲者の右脚の骨は折れたにちがいない。

残る二人……彼らは、あわてて体勢をととのえようとしたが、岩蔵の逆襲の凄まじさに、気をのまれてしまった。

「何者だ？」

叫んで、岩蔵は躍りかかった。

「ぬ!!」

曲者のひとりが岩蔵の大刀を打ちはらったが、おのれもよろめき、狼狽しつつ、転げるように逃げた。

こうなっては、勝負がついたのも同然であった。

「名乗れ!!」

さらに、岩蔵は誰何しつつ、一歩、二歩と退って腰を沈め、大刀を脇構えにかまえた。

提灯の火は、燃えつきようとしている。
脚を叩き折られた曲者が、必死に、這うように、闇の中へ逃げこもうとしていた。
（こやつを捕えて……）
と、おもったが、岩蔵はこらえた。
何といっても、闇夜の斬り合いだから、油断はできぬ。
提灯の火が、燃えつきた。
月のない夜ゆえ、あたりの闇は濃い。
その闇の幕の中へ、脚を折られた曲者が逃げ込むと、
「引けい」
曲者のひとりが、低声でいった。
彼らが、骨折した仲間をたすけつつ、じりじりと引いて行く気配を、岩蔵は知った。
追うことも考えたが、結局、やめた。
追えば、また、斬り合いになる。
三人は覆面をしていたが、岩蔵には心当りのない男たちのようにおもえた。
しかし、襲撃の前後の様子から看て、三人とも相当の遣い手らしい。
岩蔵に圧倒され、引きあげて行くときも、隙を見せなかった。
今度、斬り合えば、峰打ちではすまなくなる。

人を斬れば、そのままにしておくわけにはまいらぬ。
そのままにしておけば、岩蔵は単なる殺人者になってしまう。
かといって、これを上へ届け出れば、岩蔵も、相応の調べを受けることになるのは当然だ。
白根岩蔵は、島田九兵衛のすすめもあって、いまだに大久保八郎の偽名で通している。そして、いまは、水野道場の再建に打ち込んでいる。
こうしたときに、よけいな事件に巻き込まれたくはない。
ゆえに岩蔵は曲者たちを追わなかった。斬らなかった。
（それにしても、何者なのか？）
阿部と神保でないことはたしかだ。それは闇の中でもわかった。では両派のうちの門人か……。
（そうではない……）
ような気がする。
間一髪のところで機先を制し、反撃して追いはらったが、両派の門人の中で、あれほどの襲撃ができる門人は、いないはずであった。
（これで、すむはずはない。きっと、また、おれは襲われるだろう）
どうしたらよいのか……このとき、白根岩蔵が真先に相談をしようとおもいたったのは、成子雪丸である。

（このようなときに、だれよりも、たよりになるのは雪丸だ。雪丸しかいない）

つぎには、島田九兵衛ということになるであろう。

岩蔵は道をえらび、気を張りつめ、水野道場へ帰って来た。

「おかえりなさいまし」

出迎えた女中の伊佐が、

「どうか、なさいましたか？」

「え……」

「あの、お顔の色が……」

「いや、別に……」

翌朝になってから、岩蔵は下男の作造へ、島田屋敷の喜乃へ手紙を届けさせた。暇をみて、こちらへ訪ねて来てもらいたいと、手紙には短かくしるしたのみだ。

作造と共に、喜乃が道場へやって来た。

「早ばやと、すまなかった」

稽古をやめ、奥へ来た岩蔵が、

「九兵衛殿に、おことわりをして下されたか？」

「はい。大丈夫でございます」

「すまぬが……いま、手紙を書きますから、この前、使いに行ってもらった角筈の、成子雪

丸のもとへ届けていただきたいのだ」
「はい。では、これより、すぐに……」
「いや、急がずともよいのだ」
「いえ、出てまいりましたから、ついでのことに行ってまいります。町駕籠で行けば、わけもないことでございます」
「そうして下さるか」
岩蔵は稽古着のまま、急いで手紙をしたためた。これも短かい文面で、暇なときに、こちらへ来てもらいたい。いささか相談の事があると書いた。
喜乃は、道場の近くの駕籠屋〔駕籠松〕から駕籠を雇って、角筈村の日影道場へ向い、午後おそくなって水野道場へもどり、
「確かに、お届けしてまいりました」
と、岩蔵へつたえた。

翌日の昼前に、成子雪丸が水野道場へあらわれた。
白根岩蔵は稽古を門人たちにまかせ、奥の、故水野鉄斎の居間へ雪丸を招じて、
「勝手をいうてすまぬ。こちらから出向くのがほんとうなのだが、やはり、まだ、日が高いうちに角筈村へ行くのは、気が引けてなあ」

「まだ、そのようなことを……」
雪丸は笑ったが、岩蔵の気持ちがわからぬでもない。
「ならば、夜に入ってから出向いて行けばよいのだが……それが、むずかしいことになってきた」
「……？」
「雪丸。ま、聞いてくれ」
岩蔵は、一昨夜の襲撃について、包み隠すことなく、雪丸へ語り、
「おぬしは、どうおもうか？」
「岩蔵どのも、なかなかに、苦労が多くなりましたな」
「角笙村の道場にいたころは、よけいな心配も不安もなく、おぬしと共に一念先生の教えを受け、ひたすら稽古をしていればよかったのだが……」
「ふうむ……」
雪丸は腕を組み、瞑目した。
女中の伊佐が、昼餉のかわりにといって、蕎麦を運んで来た。
この蕎麦は、例の栄松庵に注文したもので、柚子切の蒸し蕎麦である。
「ほう。こんなにうまいものが、江戸にはあるのですか」
成子雪丸は、柚子の香りのする熱い蒸し蕎麦を啜り込み、目をまるくした。

「口に合ったか、それはよかった」
「まことに、うまい。うまい」
「帰りに、さとどのへ持って行ってくれぬか。蒸し蕎麦というわけにはまいらぬが、柚子切を注文してある。角筈へ帰って、それ、以前、われらがしたように蕎麦を熱い湯であげればよいようになっている」
「そうですか、さとが、びっくりするでしょう」
「ああ……」
突然、岩蔵が箸を置き、嘆息を洩らし、
「角筈の道場は、よかったなあ……」
しみじみと、いった。
「それです。そのことです」
膝をすすめた雪丸が、
「角筈の道場へ帰られたら、いかがですか？」
「何と……」
「そして、二人でちからを合わせ、一念先生の道場をやって行きましょう。角筈の人びとは、あなたのことをよく知っています。気にすることは少しもない、大丈夫ですよ」
「ふうむ……」

今度は、岩蔵が沈黙してしまった。

その岩蔵を、雪丸は凝っと見まもっている。

ややあって、成子雪丸が、

「岩蔵どの。いまの私にできることは、それだけです。私は、まだ若い。むずかしい世の中のことはわかりませんが、そのように面倒なことを、いっさい捨てて、角筈へ帰るのが、もっともよいとおもいます」

真情をこめていう雪丸の手を、白根岩蔵はかたくにぎりしめて、

「ありがとう、ありがとう。よく、いってくれた」

「では、承知してくれるのですね？」

「うぅむ……少し、考えさせてくれ」

そういったが、もとより岩蔵には角筈の道場へもどる意思はなかった。岩蔵は、水野道場の再建に意欲を燃やしている。なればこそ、闇討ちを恐れるのだ。

もとより、成子雪丸に相談をしたところで、雪丸が解決できることではない。それは岩蔵もわきまえていた。けれども、ほかのだれにも打ちあけられぬ、胸の内の苦しみと不安を、安心して聞いてくれるのは雪丸ひとりとおもえばこそ、わざわざ来てもらったのである。

「おぬしに、すべてを打ちあけたので、胸がはれた」

と、岩蔵は微笑んだ。

まさに、そのとおりであった。打ちあけて、雪丸の言葉を聞いたとき、岩蔵の胸の内は、急に明るくなり、新しいちからがわいてきたようだ。

（苦しみを、分ちあえる友だちがいるというのは、何と、たのもしいことか……）

岩蔵は、

「なれど、このことは、だれにもいわないでいてくれ」

「申すまでもありませんが、私は角筈へもどり、名主さまをはじめ、村の人びとへ、あなたが道場へ帰るように、すすめてみたいとおもいます。いかがでしょう」

「それほどまでに、いってくれるか」

「当然です」

「だが、もう一度、考えてみたい。おぬしが折角に思案してくれたのをことわるようになって、すまぬ。おぬしが、わざわざ来てくれたのに、な」

「いえ、さようなことは……」

「怒ってはいないか？」

「何を、そのような……」

雪丸は、わずかに、かたちをあらためて、

「もしも、私に、妻へも打ちあけられぬ苦しみがあれば、真先に岩蔵どののもとへ駆けつけ、その苦しみを聞いてもらうでしょう」

「そ、そうか。ほんとうに、そうか？」
「はい」
それから間もなく、成子雪丸は角筈へ帰って行った。
岩蔵は〔駕籠松〕から駕籠をよんだが、
（雪丸は、歩いて帰るというだろうか……）
危惧していたところ、雪丸は、むしろ子供のような笑顔になり、
「岩蔵どの。私は、駕籠に乗るのは、生まれて初めてです」
と、よろこんだのである。

その後。
水野道場と、白根岩蔵の大久保八郎にとって、平穏な明け暮れがつづいた。
岩蔵は、あれから夜間の外出をやめた。そして、門人たちへ稽古をつけることに熱中した。
この間に一度、島田九兵衛を訪ねたが、あの夜の襲撃については語らなかった。
むしろ、岩蔵は、
（いつでも来い。これも、自分の修行のうちだ）
そうおもうようになってきている。
あの夜、自分を襲った刺客たちについては、あれからも、いろいろに考えてみたが、まっ

たく見当がつかぬ。闇夜の中とはいえ、いのちがけに斬り合ったのだから、おぼえがある相手ならば、わからぬはずがないとおもう。

（すると、何者かが刺客を雇ったか、または依頼して、おれを襲わせたのか……）

と、いうことになる。

それならば、わからぬことはない。

阿部又七郎なり神保左門が、刺客を雇ったというなら、考えられぬことではない。これは彼らが、白根岩蔵の剣を怖れてのことではないのだ。彼らの父兄は、それぞれに徳川将軍に仕える家来であり、これが一道場のあるじを襲って、もしも表沙汰になったときは、父兄に迷惑をかけることになるのだ。

それにしても、油断はならなかった。

夜間の外出をしなくても、道場が襲撃されることも考えておかなくてはならぬ。

岩蔵は長さ五尺ほどの樫の八角棒へ鉄条をはめこんだ武器をつくらせ、夜間は、この棒を身辺からはなさぬようにした。

「いったい、これは何です？」

と鳥飼松之助が訝った。

岩蔵は、微笑したのみで、こたえなかった。松之助は二度と尋ねなかった。くわしいことはわからなくとも、何となく松之助の直感がはたらいたのであろう。

道場と母屋の戸締りを、岩蔵は、あらためて厳重にした。二人の下男と女中の伊佐についても、その身におよぶ危険……つまり、巻きぞえになることを考え、

「眠るときは、道場で眠る」

岩蔵は、そういった。

下男たちも伊佐も、びっくりしたような顔をしたが、あえて訊き返さなかった。彼らも、道場の紛糾を知っているからだ。

しかし、三人とも、

「お暇をいただきたい」

とは、決していい出さなかった。

鳥飼松之助は、一日置きに道場へ泊り込み、水野道場から牛堀道場へ通うようになった。となれば、松之助の口から、こうした道場の様子が牛堀九万之助の耳へも入っているはずであった。

牛堀九万之助は、その後、一度も水野道場へあらわれなかったが、成子雪丸は二度ほど角筈からやって来て、

「変わりはありませんか？」

「すまぬ、わざわざ来てくれて……」

「夜は、ひとりだけですか？」

「いや、前に、おぬしにはなした鳥飼松之助が、私の身を案じて一日置きに、泊ってくれている。それで困っているのだ」
「どうして？」
「鳥飼の身に万一のことあってはとおもうのだが、どうしても聞き入れてくれぬ」
「いや、ほんらいならば、私がここへ……」
「何をいう、おぬしは角筈にいてもらわなくてはならぬ。道場のことのみではない。むかし、名主さまのお屋敷へ盗賊どもが入った夜のことを忘れてはなるまい」
「さよう……」
「たのむ。角筈の村をまもってくれ。私の分も、な」
「わかりました」
二月も下旬に入った或日、水野道場の門人・玉井与平治が旧門人の坪内惣市に道で出合った。
玉井与平治は、すでにのべたごとく、三千石の大身旗本・織田主税助に奉公をしている足軽だ。
主家の屋敷は、向柳原にある。
奉公をしている身ゆえ、水野道場での稽古は三日に一度の玉井与平治だが、それだけに熱心である。

その日、稽古を終えた玉井が、神田川に架かる新し橋を南から北へわたりかけたとき、向うからやって来た坪内惣市が、
「や、玉井ではないか」
声をかけてよこした。
坪内は、阿部又七郎の〔ふところ刀〕などといわれていた中年の御家人で、阿部・神保の内意をうけ、白根岩蔵へ試合の申し入れの使者に来た男である。
玉井与平治は、坪内惣市へ好感を抱いていないが、声をかけられたことでもあるし、自分は身分の低い足軽だから、立ちどまって、坪内へ頭を下げた。
「どうだ、稽古をやっているか？」
と、坪内。
「はい」
「お前ら、よくも大久保八郎なぞに、くっついているなあ」
玉井はむっとして黙っていた。
すると、坪内が、
「おい、大久保八郎につたえるがいい。いつまでも、いまのままですごせるとおもうのは、大間違いだと、な」
「……？」

「ふん」

鼻で笑って、坪内惣市は新し橋を南へわたって行った。

翌日、玉井与平治は主家の勤めの隙を見て、水野道場へ駆けつけ、このことを白根岩蔵に告げた。

「ありがとう。よく知らせてくれた」

岩蔵は、礼をのべ「このことは、だれにも洩らさぬように」と、念を入れた。

（下巻につづく）

文字づかいについて

新潮文庫の日本文学の文字表記については、原文を尊重するという見地に立ち、次のように方針を定めた。

一、口語文の作品は、旧仮名づかいで書かれているものは新仮名づかいに改める。

二、文語文の作品は旧仮名づかいのままとする。

三、常用漢字表、人名用漢字別表に掲げられている漢字は、原則として新字体を使用する。

四、年少の読者をも考慮し、難読と思われる漢字や固有名詞・専門語等にはなるべく振仮名をつける。

池波正太郎著

剣客商売

白髪頭の粋な小男・秋山小兵衛と巌のように逞しい息子・大治郎の名コンビが、剣に命を賭けて江戸の悪事を斬る。シリーズ第一作。

池波正太郎著

剣客商売 辻斬り

闇の幕が裂け、鋭い太刀風が秋山小兵衛に襲いかかる。正体は何者か？ 辻斬りを追跡する表題作など全7編収録のシリーズ第二作。

池波正太郎著

剣客商売③陽炎の男

隠された三百両をめぐる事件のさなか、男装の武芸者・佐々木三冬に芽ばえた秋山大治郎へのほのかな思い。大好評のシリーズ第三作。

池波正太郎著

剣客商売④ 天魔

「秋山先生に勝つために」江戸に帰ってきたとうそぶく魔性の天才剣士と秋山父子との死闘を描く表題作など全8編。シリーズ第4作。

池波正太郎著

剣客商売⑤白い鬼

若き日の愛弟子を斬り殺された秋山小兵衛が、復讐の念に燃えて異常な殺人鬼の正体を追及する表題作など、大好評シリーズの第五作。

池波正太郎著

剣客商売⑥ 新妻

密貿易の一味に監禁された佐々木三冬を秋山大治郎が救い出すと、三冬の父・田沼意次は嫁にもらってくれと頼む。シリーズ第6弾。

池波正太郎著

黒白（上・下）

―剣客商売番外編―

若き日の秋山小兵衛に真剣勝負を挑んだ小野派一刀流の剣客・波切八郎。対照的な二人の剣客の切り結びを描くファン必読の番外編。

池波正太郎著

忍者丹波大介

関ケ原の合戦で徳川方が勝利し時代の波の中で失われていく忍者の世界の信義……一匹狼となり暗躍する丹波大介の凄絶な死闘を描く。

池波正太郎著

男振（おとこぶり）

主君の嗣子に奇病を侮蔑された源太郎は乱暴を働くが、別人の小太郎として生きることを許される。数奇な運命をユーモラスに描く。

池波正太郎著

俠客

「お若えの、お待ちなせえやし」の幡随院長兵衛とはどんな人物だったのか――旗本水野十郎左衛門との宿命的な対決を通して描く。

池波正太郎著

剣の天地

戦国乱世に、剣禅一如の境地をひらいて新陰流の創始者となり、剣聖とあおがれた上州の武将・上泉伊勢守の生涯を描く長編時代小説。

池波正太郎著

闇の狩人（全二冊）

記憶喪失の若侍が、仕掛人となって江戸の闇夜に暗躍する。魑魅魍魎とび交う江戸暗黒街に名もない人々の生きざまを描く時代長編。

池波正太郎著

闇は知っている

金で殺しを請け負う男が情にほだされて失敗した時、その頭に残忍な悪魔が棲みつく。江戸の暗黒街にうごめく男たちの凄絶な世界。

池波正太郎著

雲霧仁左衛門

（全二冊）

神出鬼没、変幻自在の怪盗・雲霧。政争渦巻く八代将軍・吉宗の時代、狙いをつけた金蔵をめざして、西へ東へ盗賊一味の影が走る。

池波正太郎著

さむらい劇場

八代将軍吉宗の頃、旗本の三男に生れながら、妾腹の子ゆえに父親にも疎まれて育った榎平八郎。意地と度胸で一人前に成長していく姿。

池波正太郎著

おとこの秘図

（全三冊）

江戸中期、変転する時代を若き血をたぎらせて生きぬいた旗本・徳山五兵衛――逆境をはねのけ、したたかに歩んだ男の波瀾の絵巻。

池波正太郎著

忍びの旗

亡父の敵とは知らず、その娘を愛した甲賀忍者・上田源五郎。人間の熱い血と忍びの苛酷な使命とを溶け合わせた男の流転の生涯。

池波正太郎著

編笠十兵衛

幕府の命を受け、諸大名監視の任にある月森十兵衛は、赤穂浪士の吉良邸討入りに加勢。公儀の歪みを正す熱血漢を描く忠臣蔵外伝。

池波正太郎著

上意討ち

殿様の尻拭いのため敵討ちを命じられ、何度も相手に出会いながら斬ることができない武士の姿を描いた表題作など、十一人の人生。

池波正太郎著

真田騒動
―恩田木工―

信州松代藩の財政改革に尽力した恩田木工の生き方を描く表題作など、大河小説『真田太平記』の先駆を成す〝真田もの〟5編。

池波正太郎著

あほうがらす

人間のふしぎさ、運命のおそろしさ……市井もの、剣豪もの、武士道ものなど、著者の多彩な小説世界の粋を精選した11編収録。

池波正太郎著

おせん

あくまでも男が中心の江戸の街。その陰にあって欲望に翻弄される女たちの哀歓を見事にとらえた短編全13編を収める。

池波正太郎著

あばれ狼

不幸な生い立ちゆえに敵・味方をこえて結ばれる渡世人たちの男と男の友情を描く連作3編と、『真田太平記』の脇役たちを描いた4編。

池波正太郎著

谷中・首ふり坂

初めて連れていかれた茶屋の女に魅せられて武士の身分を捨てる男を描く表題作など、本書初収録の3編を含む文庫オリジナル短編集。

新潮文庫最新刊

椎名誠著

銀座のカラス（上・下）

23歳の新米編集者が突然編集長に。ええい、こうなったら酒でもケンカでも女でも仕事でも何でもこい！なのだ。自伝的青春小説。

宮尾登美子著

菊亭八百善の人びと

戦後まもなく江戸料理の老舗に嫁いだ汀子。店の再興を賭けて、消えゆく江戸の味を守ろうと奮闘する下町育ちの女性の心意気を描く。

瀬戸内寂聴著

手毬

寝ても覚めても良寛さまのことばかり……。雪深い越後の山里に師弟の契りを結んだ最晩年の良寛と若き貞心尼の魂の交歓を描く長編。

宮本輝著

螢川・泥の河

芥川賞・太宰治賞受賞

幼年期と思春期のふたつの視線で、人の世の哀歓を大阪と富山の二筋の川面に映し、生死を超えた命の輝きを刻む初期の代表作二編。

船戸与一著

砂のクロニクル（上・下）

山本賞・日本冒険小説協会大賞受賞

クルド民族の悲願、独立国家の樹立。その命運は謎の日本人が握っていた。銃は無事マハバードに届くのか。著者渾身の壮大なる叙事詩。

小林信彦著

イエスタデイ・ワンス・モア Part 2

ミート・ザ・ビートルズ

30年前の東京に迷いこんだ現代の青年が、ビートルズ来日の1966年に再びタイムトリップした!?　熱気と興奮のあの夏の冒険物語。

新潮文庫最新刊

吉本ばなな他著

中吊り小説

JR東日本電車の中吊りに連載されて話題となった《中吊り小説》が遂に一冊に！吉本ばななから伊集院静まで、楽しさ溢れる19編。

宮部みゆき著

返事はいらない

失恋から犯罪の片棒を担ぐにいたる微妙な女性心理を描く表題作など6編。日々の生活と幻想が交錯する東京の街と人を描く短編集。

野田知佑著

ゆらゆらとユーコン

著者が初めて語る切ない日々——ナバホ居留地でのことを始め、亀山湖での暮らし、大河ユーコンの川旅などを描いたエッセイ集。

近藤唯之著

戦後プロ野球50年
—川上、ON、そしてイチローへ—

柳川事件、黒い霧事件など節目となった事件はもとより、個性的な選手・監督たちのエピソードも満載した、近藤版戦後プロ野球史。

縄田一男著

江戸市井図絵
—時代小説の楽しみ⑤—

威勢のいい女房と酒好き亭主が大喧嘩。子供は路地を駆け回り、食い詰め浪人は傘を貼る。すべてが優しかったあの時代へ誘う18の名品。

松本洋二著

アイルトン・セナ 日本伝説

神の御許へと疾走していった男——。日本人初のF1担当新聞記者となった著者が、20世紀最後の英雄を追いつづけた日々を振り返る。

新潮文庫最新刊

C・カッスラー
中山善之訳

インカの黄金を追え（上・下）

16世紀、インカの帝王が密かに移送のうえ保管させた財宝の行方は――？　美術品窃盗団とゲリラを相手に、ピットの死闘が始まった。

A・J・クィネル
大熊栄訳

燃える男

誘拐・惨殺された少女の復讐に燃え、たったひとり敵地に乗りこむ元外人部隊兵士クリーシィ！　クィネルのデビュー作、待望の登場。

A・リプリー
森瑤子訳

スカーレット（一～四）

スカーレットはレットの愛を、ふたりの心がひとつになる明日をとりもどせるのか……。永遠の愛の物語「風と共に去りぬ」の続編。

サガン
河野万里子訳

愛は束縛

美貌の妻ローランスと売れない作曲家ヴァンサン。闇の中に漂う濃く甘い香水と音楽の調べにのせて描かれる、苦く官能的な愛の現実。

J・ハンフリーズ
雨沢泰訳

愛にあふれて

家族を愛しつつも家を出た母、必死に捜す父、愛を確信できぬまま子を宿す姉、そして懸命に家族を支える17歳のわたしの愛の行方は？

C・ストラウド
二宮磬訳

狙撃警官キーオウ

同僚警官の殺害容疑をかけられ追い詰められるNY市警の狙撃手キーオウ。手に馴染んだレミントンを唯一の頼りに起死回生はなるか。

秘伝の声（上）

新潮文庫　い－16－57



平成二年十二月二十日　発行
平成六年十二月五日　十四刷

著者　池波正太郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　営業部（〇三）三二六六－五一一一
　　編集部（〇三）三二六六－五四四〇
振替　東京四－八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・加藤製本株式会社
© Toyoko Ikenami 1986　Printed in Japan

ISBN4-10-115657-3 C0193





新宿角筈村に剣術道場を構える老剣客・日影一念は、臨終の床で、なぜか二人の内弟子、白根岩蔵と成子雪丸に、自分の遺体と共に秘伝の書を土中に埋めよと言い残す。だが、剣の極意を極めたい一心の岩蔵は、遺言にそむき、秘伝書を奪って出奔する。村人たちに頼まれて道場を継ぐことになった雪丸は、岩蔵の行方を探りつつ道場を守り立て、角筈村になくてはならない人物となるが……。

定価360円（本体350円）

ISBN4-10-115657-3

C0193 P360E